

仙台市文化財調査報告書第236集

後河原遺跡

—第3次・4次発掘調査報告書—

1999年3月

仙台市教育委員会

うしろ　　が　　わら　　い　　せき
後 河 原 遺 跡

—第3次・4次発掘調査報告書—

1999年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、まことに感謝に堪えません。

近年、中田地区もとみに住宅化が進み、昔の面影はだいぶ失われてしまいました。今回の後河原遺跡の調査もそのような流れの中で実施されました。本書では、調査地点も近いことから2つの調査の成果をまとめて報告しております。大きな柱穴を持つ建物跡や旧地形の様子など、今回多くの情報を得ることが出来ました。

21世紀も間近に迫り、先達らの残した貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら未来へと継承していくことが私達にとっての責務であると考えます。

本書は、このような調査成果を収録したものであり、多くの方々に積極的に活用され学術研究の場で役立てば幸いに思います。また、この調査成果が研究者のみならず、地域の皆様にも地元の歴史を解きあかす貴重な資料であることを感じて頂ければと思います。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際してご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成11年3月

仙台市教育委員会

教育長 小松弥生

例　　言

1. 本書は宅地造成に先立って行った後河原遺跡第3次調査・第4次調査の発掘調査報告書であり、すでに公表された発表会資料等に優先するものである。
2. 出土遺物の整理と本文の執筆・編集は、第3次調査が平間亮輔、第4次調査が五十嵐康洋が担当したが、プラント・オバール分析とその報告に関しては樹古環境研究所に依頼した。
3. 発掘調査および報告書作成に関しては次の方々から協力を受けた。
大和団地株式会社東北支店、福仙興業株式会社、桂島建設株式会社、東北歴史資料館
4. 本調査における出土遺物・実測図・写真などの資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1. 本書中の土色及び色調については「新版標準土色帖」小山、竹原1997を使用した。
2. 本書使用の地形図は国土地理院発行5万分の1「仙台」(平成8年)である。
3. 本書中の北は真北を示している。
4. 遺構の略称は次の通りで、それぞれに通し№を付けた。
S I : 積穴住居跡、S B : 掘立柱建物跡、S D : 溝跡、S K : 土坑、P : 柱穴等のピット
5. 積穴住居跡や掘立柱建物跡の柱痕跡はスクリーントーンで示した。
6. 掘立柱建物跡模式図中の数字は柱間隔(cm単位)、()内は間尺を示す。
7. 畦畔計測表及び水田区画計測表の数値のうち()は完全には検出できなかった畦畔等の現存の値である。
8. 図上復元した遺物実測図は、中心線を一点鎖線(—・—)で示した。
9. 遺物実測図のうち、土師器の黒色処理はスクリーントーンで示した。
10. 遺物の法量のうち()は図上復元値である。
11. 鉄製品・石製品の長さのうち()は現存値を示す。
12. 遺物観察表において胎土中の白色針状物質(海綿状骨針)は白針と表示した。
13. 第1編の註は各節ごと、引用・参考文献は巻末にまとめた。なお、第2編の引用・参考文献は第1編に準ずるため割愛した。

目 次

第1編 後河原遺跡第3次調査

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 遺跡の概要	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	4
第4節 調査方法	6
1. 調査区の設定	6
2. 調査方法	7
第5節 基本層序	7
第2章 検出された遺構と遺物	11
第1節 各層上面における遺構の確認状況	11
I. 基本層の欠落と遺構の確認面	11
II. 耕作による擾拌と遺構の確認面	11
第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）	11
I. I～III層除去後の状況	11
II. 遺構と遺物	13
1. 壁穴住居跡	13
2. 掘立柱建物跡	14
3. 溝跡	19
4. 土坑	28
5. ピット	34
6. 小溝状遺構群	36
第3節 V a～X層上面（I～IV層除去後）	38
I. I～IV層除去後の状況	38
II. 遺構と遺物	39
1. 掘立柱建物跡	39
2. 小溝状遺構群	40
第4節 V b～X層上面（I～V a層除去後）	42
I. I～V a層除去後の状況	42
II. 遺構と遺物	43
1. 掘立柱建物跡	43
2. 溝跡	46
3. 小溝状遺構群	48
第5節 VI a～X層上面（I～V b層除去後）	49
I. I～V b層除去後の状況	49
II. 遺構と遺物	50
1. 壁穴住居跡	50
2. 掘立柱建物跡	52
3. 小溝状遺構群	55
第6節 I～IV層・その他の出土遺物	56
第7節 VII a1層水田跡	57
I. 水田の構成と概要	57
1. 水田の構成	57
2. 検出・遺存状況	57
3. 耕作土	59
II. 遺構の状況	59
1. 畦畔	59
2. 水田区画	60
3. 水田面の標高と傾斜	63
4. 水口	63
5. 溝跡	64
III. 出土遺物	67
第8節 VII a2層水田跡	67
I. 水田の構成と概要	67

I.	水田の構成	67	2. 検出・遺存状況	67	3. 耕作土	69
4.	水田域	69				
II.	遺構の状況					69
1.	畦畔	69	2. 水田区画	69	3. 水田面の標高と傾斜	69
4.	水口	70	5. 溝跡	70		
III.	出土遺物					70
第9節	VII b 層水田跡					73
I.	水田の構成と概要					73
1.	水田の構成	73	2. 検出・遺存状況	73	3. 耕作土	73
4.	水田域	73				
II.	遺構の状況					74
1.	畦畔	74	2. 水田区画	74	3. 水田面の標高と傾斜	76
4.	水口	76	5. 溝跡	79		
III.	出土遺物					79
IV.	耕作土下面の状況					80
第3章	プラント・オバール分析					81
第4章	まとめ					88
第1節	遺物について					88
1.	S I 出土土器群	88	2. SK I 出土土器群	88	3. その他の出土土器	90
第2節	遺構について					90
1.	本来の掘り込み面の推定	90	2. 遺構の変遷			90
3.	掘立柱建物跡について	93	4. 水田跡について			93
引用・参考文献						94
写真図版						95

第2編 後河原遺跡第4次調査

第1章	はじめに					143
第1節	調査にいたる経緯					143
第2節	調査要項					143
第3節	遺跡の概要					143
第4節	調査方法					143
第5節	基本層序					144
第2章	検出した遺構と遺物					146
第1節	調査の概要					146
第2節	検出した遺構					146
1.	II層	146	2. IV層	146	3. V a層	148
4.	VII a層	148	5. あ層	148	6. VIII層・「い」層	151
7.	VIII層・「お」層	151				
第3節	出土遺物					154
第4章	まとめ					155
写真図版						157
報告書抄録						160

第1編 後河原遺跡第3次調査

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

後河原遺跡は仙台市の南端に位置する。昭和50年代後半に遺跡東半部の約1/3が宅地として開発されているが、開発に先立って昭和56年に第1次調査、昭和58年に第2次調査、昭和59年に民間の調査団による発掘調査が行われている（第3図、表1）。

平成8年、大和田地株式会社東北支店によって遺跡の西半部における宅地開発の計画が出されたため、協議の上同年5月4日に試掘調査を実施した。その結果、窓穴住居跡や溝跡等が検出されたため本調査を行うことになった。

調査主体	調査次数	調査年	調査面積	主な遺構・遺物	備考	文献
仙台市教育委員会	第1次調査	昭和56年	75m ²	土坑・施主・ピット・土器・酒器	下層は未調査	加藤他 1981
仙台市教育委員会	第2次調査	昭和58年	1,998m ²	平安時代以前の水田跡、平安時代の貯蔵・小溝状遺構群 ・中世の水田跡、石跡、中世陶器、土師器・瓦器	佐藤・青沼 1984	
県立文化財発掘調査研究室	——	昭和59年	1,023m ²	中世後半～近世初期の独立住居跡・井戸跡・火葬場跡 ・土師器、瓦器群、中世の陶器・磁器・漆器・中国鉢	下層の大部分は未調査	佐藤・井田 1985

表1 後河原遺跡における調査一覧

第2節 調査要項

遺跡名：後河原遺跡（仙台市文化財登録番号 C-208、宮城県遺跡登録番号01273）

調査名：後河原遺跡第3次調査

所在地：仙台市太白区中田町字後河原18番-1外

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

担当職員 平間亮輔、根本光一

調査期間：平成10年4月13日～8月6日

調査面積：1,467m²

発掘調査参加者

相原妥各子 青木 吉次

浅見 繁子 阿部すえ子

阿部 美香 阿部美枝子 阿部みのる

伊深みつ子 大友とし子 大沼みさほ

加藤 友治 斎藤 廉子 佐竹志女子

須賀 栄子 菅井きみ子 鈴木 いし

只木恵美子 橋 英子 田中さと子

二木木年男 服部 和恵 福山 幸子

山田 悅次 山田千代子 渡辺かほる



表土除去作業

整理作業参加者

相沢美佐子 井上里映子 小林 由美 小山つるよ 佐藤 悅子

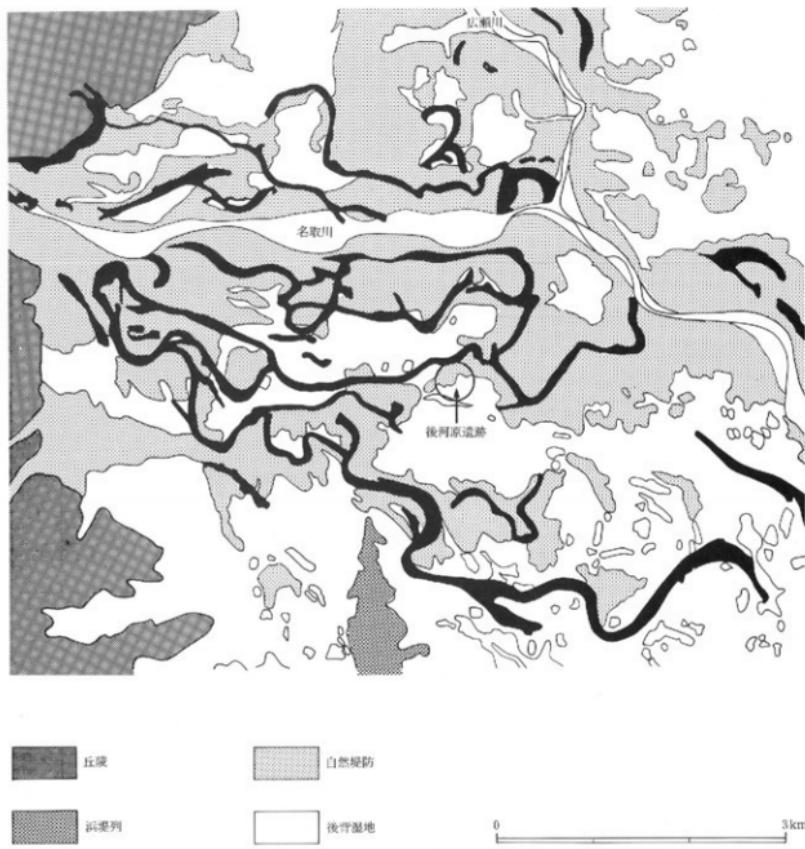
高橋 弘子

第3節 遺跡の概要

1. 地理的環境

後河原遺跡は仙台市南端の太白区中田町にあり、JR 南仙台駅の南東1km、名取川の川岸から1.5km南に位置している。仙台市南東部の地形環境については当遺跡の西方約500mに位置する中田南遺跡の報文（太田：1994）に詳しいので、ここでは遺跡の位置する自然堤防とその周辺の状況についてのみ触れることとする。

名取川両岸には多数の旧河道と自然堤防が発達しているが、当遺跡周辺にも旧河道・自然堤防・後背湿地が入り組んで複雑な地形を形成している。遺跡は北側を旧河道で画された南北幅100~200m、東西長約1,000mの弧状の自然堤防の西端部上に位置しており、遺跡の一部は南側の後背湿地にもかかっている（第1図）。



第1図 遺跡周辺の地形分類図（松本：1994 を基に作成）



第2図 周辺の遺跡 (1/50000)

No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	後河原遺跡	自然堤防・後背湿地	古墳～近世	17	石下遺跡	聖なる	丘陵	鶴文～平安	
2	戸ノ内遺跡	自然堤防・周溝墓	弥生～中世	18	瀬水遺跡	聖なる	自然堤防	弥生～平安	
3	中田山遺跡	自然堤防	古墳～平安	19	伊豆山遺跡	聖なる	丘陵斜面	弥生～平安	
4	昭和北遺跡	自然堤防	古墳～平安	20	穂谷遺跡	聖なる	台地	自然堤防	
5	西那丸遺跡	自然堤防・周溝墓	古墳・平安～	21	第2号前遺跡	聖なる	自然堤防	古墳～平安	
6	中田川遺跡	自然堤防	中世	22	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	鶴文～後・飛	
7	安久良遺跡	自然堤防	古墳～中世	23	十三塗遺跡	貝塚・聖なる	丘陵	鶴文～古墳中	
8	栗遺跡	自然堤防	弥生～近世	24	高神山古墳	古墳	丘陵	古墳	
9	御田駒跡	自然堤防	中世	25	瀬戸駒古墳群	古墳	丘陵	古墳中～後	
10	佐木遺跡	自然堤防	中世～近世	26	宇賀崎古墳	古墳	丘陵	中世	
11	弁天門古墳	古墳	古墳	27	高畠城跡	城跡	丘陵	古墳～平安	
12	城丸古墳	古墳	古墳	28	御船中道都	全合墳	冲積平野	自然堤防	
13	仙台大塚山古墳	古墳	古墳	29	沖浦北遺跡	台地	古墳～平安	古墳～平安	
14	今熊野遺跡	貝塚・聖なる	丘陵	30	下金田遺跡	聖なる	自然堤防	古墳～平安	
		聖なる・神		31	草津遺跡	聖なる	自然堤防	中世	
		彌生～平安		32	草津遺跡	聖なる	自然堤防	後背湿地	
15	五郎市遺跡	聖なる・周溝墓	丘陵	33	山口遺跡	聖なる	自然堤防～後背湿地	鶴文～中世	
16	西野田遺跡	聖なる・周溝墓	丘陵	34	大野田古墳群	古墳群	自然堤防	古墳	
		古墳～平安		35	聖山遺跡	聖なる	自然堤防	弥生～平安	

表2 周辺の遺跡地名表

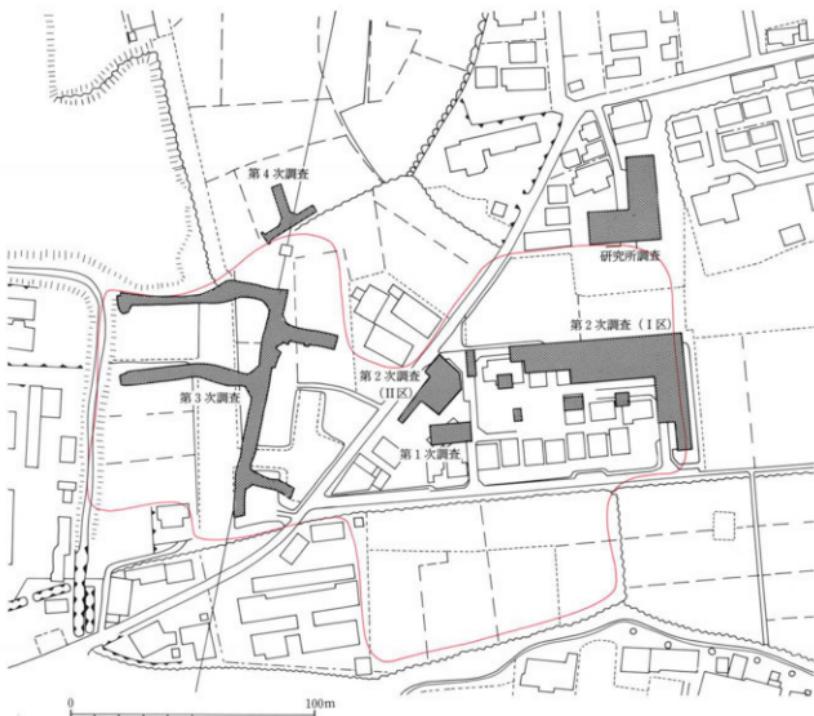
第3節 遺跡の概要

第3次調査区は遺跡の西半部に位置し、自然堤防の末端に近いことから、調査区付近の自然堤防の幅は極めて狭く50m前後と予想される。基本層の項でも述べるが調査区は南北方向の傾斜が顕著で、北側から南側に向かって標高が低くなっている（北側の畠と南側の盛土下の水田面との比高差が約1m）、ちょうど自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置していると推定される。

なお、第4次調査区は第3次調査区北端から北へ30m離れているが、この付近は自然堤防の北斜面からさらに北側の旧河道部分に相当する可能性が高い。

2. 歴史的環境

名取川下流の平野部および西側の高館丘陵には各時代を通して多数の遺跡が確認されている。ここでは川の南岸部において、今回の調査に関連する古墳時代以降の遺跡を中心に概観してみたい。



第3図 遺跡全体図

古墳時代前期の集落跡は、平野の南西丘陵上に今熊野遺跡、西野田遺跡、野田山遺跡などがあり、低地の自然堤防上にも当遺跡の北東～東方1.5～2 kmにかけて中田畠中遺跡、戸ノ内遺跡、昭和北遺跡、北西約1.5kmに安久東遺跡、南方約3 kmに鶴巻前遺跡などがある。集落の生産基盤である水田は集落に近接する後背湿地に營まれたと考えられるが、名取川の南側ではまだこの時代の水田跡は確認されていない。さらにこれらの集落遺跡のうち今熊野、西野田、戸ノ内、四郎丸館跡、安久東の各遺跡と、西野田遺跡の南方1.5kmに位置する五郎市遺跡では方形周溝墓が発見されており、方形周溝墓と集落が密接な関係を持ちながら平野の各地に散在している様子がみてとれる。またこのころの高塚古墳としては、雷神山古墳、飯野坂古墳群、高館山古墳、宇賀崎古墳などがあるが、これらは西側の丘陵上に位置している。

この他の古墳時代の集落としては西方0.5～2 kmの自然堤防上に中田南遺跡、清水遺跡、栗遺跡などがあり、このうち清水遺跡、栗遺跡では後期の遺構が数多く検出されている。

奈良・平安時代には清水遺跡、中田南遺跡などで集落の拡大が認められる他、中田畠中遺跡、安久遺跡、安久東遺跡、四郎丸館跡、鶴巻前遺跡などで集落跡が検出されている。当遺跡では畠跡の痕跡と考えられる小溝状遺構群が検出されている。



第4図 調査区配置図

第4節 調査方法

中世になると平野西側の高館丘陵の上には高館城跡、熊野堂大館跡、川上大館跡など大規模な山城が築かれ、丘陵の麓に位置する大門山遺跡付近は中世を通じて大規模な信仰の場であったことが明らかにされている。

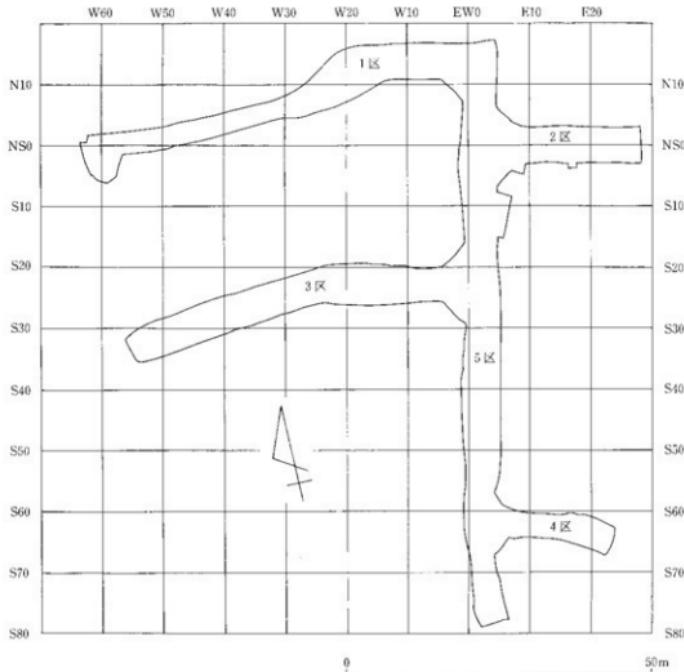
平地には松木遺跡、安久東遺跡、前田館跡、中田南遺跡、四郎丸館跡など、城館や居館・屋敷が数多く造られるようになり、当遺跡でも自然堤防上で掘立柱建物跡や井戸跡さらに火葬場跡などが検出されていて、武士階級の屋敷跡があったと考えられている。なお、南部の後背湿地部分では水田跡も検出されている。

第4節 調査方法

1. 調査区の設定

調査区は幅 6 m の道路予定地に設定し、調査区のうち東西道路部分を北から 1 区、2 区、3 区、4 区とし、中央の長い南北道路部分を 5 区とした。

また 2 区と 5 区の道路方向にあわせて直交する基準線を設け、これを遺構実測の基準線とした。基準線の名称は 2 区と 5 区の交点を通る南北方向の中心線を EW0 、これより東を E 、西を W で示し、東西方向の中心線を NS0 、これより北を N 、南を S で示した。数値の単位は m である。なお、南北基準線の方位は真北から約 12° 東に振れています。平面直角座標系 X における座標値は以下のとおりである。



第5図 グリッド配置図

(NS 0, EW 0) X = -201.065589km, Y = +5.519327677km

(S 40, EW 0) X = -201.104735km, Y = +5.511108677km

2. 調査方法

調査予定地の大部分は水田あるいは畑で、5区の南部から4区にかけての部分のみが水田上に盛土整地されて駐車場として利用されていた。

調査においては、まず重機で盛土および現水田や畑の耕作土（I層）やその直下の旧耕作土（II層）を除去し、精査はIII層上面から行った。ただしIII層は遺存状況が悪く、5区中央部に部分的に残るのみであったので、実質の遺構確認作業はIV層からである。IV層以下はすべて人力で掘り下げてIV・V a・V b・VI・VII a1・VII a2・VII b・VIII層において各層ごとの精査を行った。なお、VI層上面までは調査区全面の精査を行ったが、VII a1層以下については5区南半部において一部調査面積を縮小している。VIII層以下については特に試掘区を設けての調査は行わなかったが、側溝の壁面観察では文化層らしい層が確認できなかったことからこれ以下は無遺物層と推定し、掘り下げは行わなかった。

遺構の平面図は基準杭を利用して簡易造り方を組み、1/40あるいは1/20で作成した。断面図は1/20で作成した。写真は35mmモノクロとリバーサルで撮影している。

遺物は各遺構ごとに取り上げたが、遺構に伴わない基本層中の遺物は、層ごとに10mグリッド別に取上げた。

第5節 基本層序

今回の調査ではI～X層まで、大別して計10層を確認した。各層の傾きは、東西方向はほぼ水平であるが南北方向では北から南に向かって傾斜している。これは、前節でも述べたが、調査区が東西に延びる自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置するためと考えられる。第7図は5区の北壁と東壁の基本層序模式図であるが、おおよそ5区の北東コーナー付近が最も標高が高く、そこから南に向かって傾斜してS40付近で水平になっているのが判る。
I層 にぶい黄褐色～暗褐色のシルトを主とする層で I a～I f 層に細分される。

現代の畑あるいは水田の耕作土である。

I a層 10Y R3/3 暗褐色粘土質シルト。

I b層 10Y R4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。10Y R5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを少量含む。

I c層 10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト。10Y R4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを多量に含む。

I d層 10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト。層下部に部分的に10Y R3/2 黒褐色シルトブロックを多量に含む。

I e層 10Y R3/2 暗褐色シルト。10Y R3/2 黒褐色シルトブロックを多量に含む。

I f層 10Y R3/4 暗褐色粘土質シルト。10Y R2/1 黒色泥炭質粘土ブロックを多量に含む。

II層 10Y R4/2 灰黄褐色シルト。3区西部ではやや黄色が強くなる。厚さは20～30cmで、下面是比較的平坦である。

現代以前の畑の耕作土と推定される。

III層 10Y R3/2 黑褐色粘土質シルト。10Y R4/2 にぶい黄褐色砂質シルトを少量含む。

3区W24から西と5区S30～50付近にのみ部分的に遺存する。厚さは5～10cm、下面是5区では比較的平坦であるが3区では細かな起伏があり、IV層上面に小溝状造構群を残す。

平安時代以降の畑の耕作土である。

IV層 10Y R3/3 暗褐色シルト。3区西部では10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト質砂となる。10Y R3/2 黑褐色粘土質シルトブロックを少量含む。なお、灰白色火山灰の小ブロックを微量含むが、断面図を作成した地点には灰白色火山灰が認められなかったので図中では示せなかった。3区W24から西とW8から東、5区S20～S50付

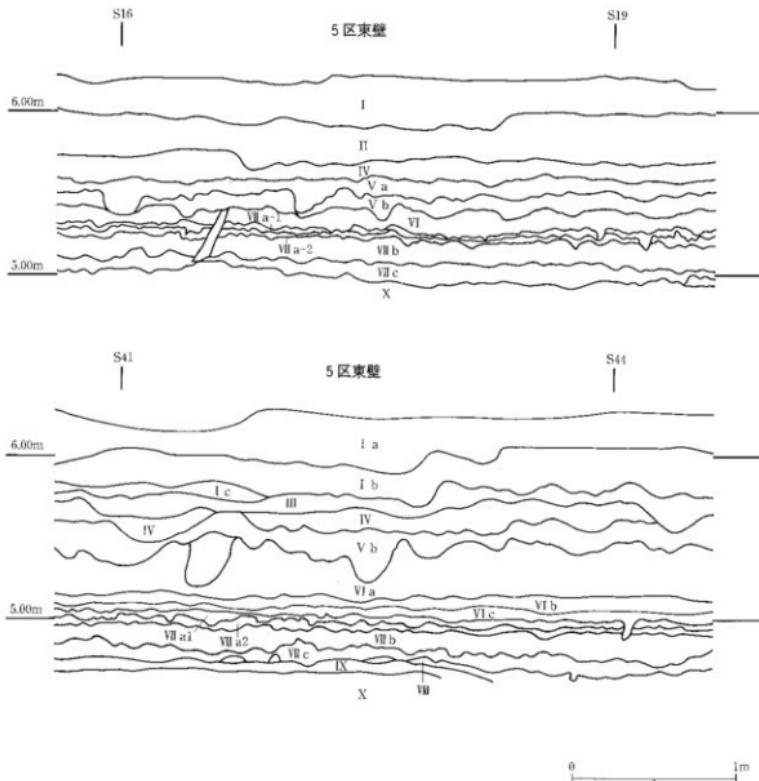
近にのみ遺存する。厚さは20~30cm、下面是比較的凹凸があり、V a~V b層上面に小溝状構造群を残す。

平安時代の畑の耕作土である。

V層 黒褐色のやや粘性のあるシルトを主とする。V a + V b層に細分され、いずれも平安時代の畑の耕作土である。

V a層 10Y R3/2 黒褐色粘土質シルト。10Y R3/3 暗褐色シルトブロックを少量含む。3区W24から西とW8から東、5区NS 0~S50付近にのみ遺存する。なお、5区の東壁際の遺存状況が良くないために断面図(第6図)や模式図にV a層の記載がないが、平面では確認している。厚さは10cm前後、下面是やや凹凸があり、一部のV b層上面に小溝状構造群を残す。

V b層 10Y R3/2 黒褐色シルト質粘土。10Y R4/2 灰黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。分布範囲はV a層とほぼ同じで、3区W24から西とW8から東、5区NS 0~S50付近にのみ遺存する。厚さは10~20cm、下面是比較的凹凸があり、VI a層上面に小溝状構造群を残す。



第6図 基本層序

VI層 にぶい黄褐色の砂あるいはシルトを主とし、VIa～VIc層に細分される自然堆積層である。

VIA層 10Y R5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。10Y R3/1 黒褐色粘土ブロック・10Y R4/1 棕灰色粘土ブロックを少量含む。3区西部と5区S20～50付近にのみ遺存する。厚さは15～35cm、下面是ゆるやかな起伏がある。

VIB層 10Y R4/2 灰黄褐色シルト質粘土。3区全域と5区S7～50付近にのみ遺存する。厚さは10～20cm、下面是ゆるやかな起伏がある。

VIC層 10Y R4/3 にぶい黄褐色細砂。10Y R3/3 暗褐色粗砂を少量、10Y R2/1 黒色粘土ブロックを微量に含む。3区西部と4区全域、5区S7付近から南側に遺存する。厚さは5～10cm、下面是ゆるやかな起伏がある。

VII層 暗褐～黒褐色の粘土層である。当初はVIIa・VIIb・VIIc層の3層に分層していたが、後にVIIa層がさらに2層に細分されることが判明したためVIIa層をVIIa1層とVIIa2層とに分けた。VIIa1・VIIa2・VIIb層は古墳時代の水田耕作土、VIIc層は自然堆積層である。

VIIa1層 10Y R3/3 暗褐色粘土。5区南部では2.5Y5/1 黄灰色シルト質粘土となる。3・4区全域と、5区NS0付近から南に遺存する。厚さは2～10cmで平均6cm前後、下面是凹凸が激しい。

VIIa2層 10Y R2/2 黑褐色粘土。10Y R4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを少量、酸化鉄粒を微量含む。3・4区全域と、5区NS0付近から南に遺存する。厚さは2～8で平均4cm前後、下面是凹凸が激しい。

VIIb層 10Y R2/1 黒色粘土。5区北部では泥炭質粘土となる。1区を除き、2～5区の全域に遺存するが、2区と5区NS0付近から北ではI層の耕作土によって上面が擾乱されている。厚さは12～20cmで平均15cm前後、下面是凹凸が激しい。

VIIc層 10Y R3/2 黑褐色シルト質粘土。10Y R3/3 暗褐色砂粒を多量に含む。1区を除き、2～5区のほぼ全域に遺存する。厚さは10cm前後で、下面是比較的凹凸がある。

VIII層 10Y R4/3 にぶい黄褐色粘土。10Y R4/3 にぶい黄褐色粘土ブロックを少量・酸化鉄粒を多量に含む。3・4区全域と、5区S20付近から南に遺存する。厚さは5～10前後で、下面是比較的平坦である。自然堆積層である。

IX層 10Y R3/1 黑褐色粘土。分布域はVII層とほぼ同じで、3・4区のほぼ全域と、5区S20付近から南に遺存する。厚さは5cm前後で、下面是比較的平坦である。

自然堆積層である。

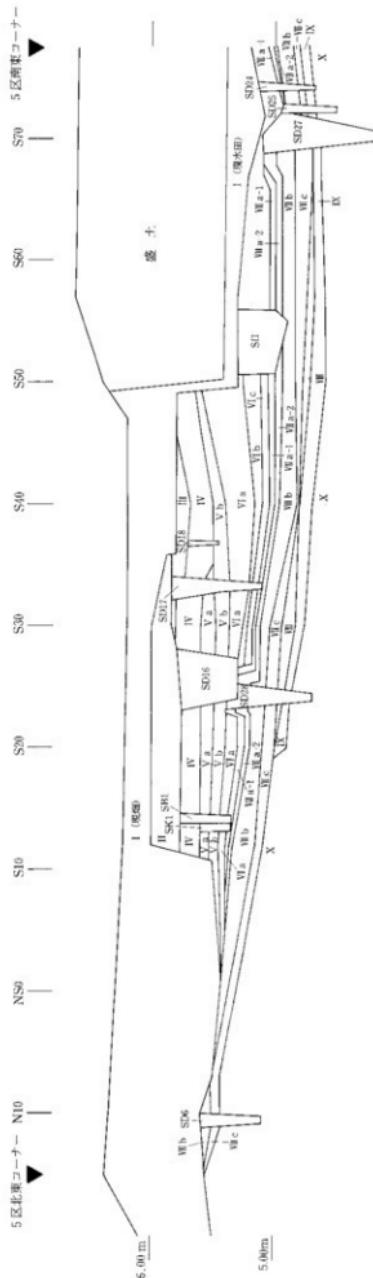
X層 10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。5区南部では粘土となる。酸化鉄斑文を多量に含む。調査区の全域に安定して分布する。

自然堆積層である。

なお、以前に行われた調査のうち第2次調査は調査区も比較的広く、層位的に検出されている遺構も中世の水田跡・平安時代以降の溝・平安時代の小溝状遺構群・平安時代以前の水田跡などで、中世の水田跡を除くと今回の調査と共に通点が多い。このため、両調査区における基本層序の対応を試みてみたが、表土～下層の水田耕作土までの基本的な色調の変化は類似するものの土質が一致しない場合もあり、明確にはできなかった。層の対応が困難な理由としては、両調査区間の距離が離れている（註1）ことと、立地も微妙にも異なっている（註2）ことが考えられるので、今回は対応関係の明示は控えておきたい。

註1 第3次調査区のほぼ中央にあたる5区から第2次調査の西部のII区までは約60m、東部のI区西端までは約100mある。

註2 現地表面の標高は第2次調査区のI区中央部で約4.8m、今回の第3次調査区5区中央部で約6.2mで、第2次調査区の方が約1.4m低い。このことと周辺の微地形を考慮すると第2次調査区の中心はほとんど後背湿地にかかっていると推定される。



第7図 基本層序模式図
5区北壁～東壁
(深さ1/40、長さ1/400)

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 各層上面における遺構の確認状況

精査は各層ごとに順次行ったが、基本層の欠落と耕作による層上面の攪拌等によって遺構の本来の掘り込み面が確定できない場合が多かったので、これらの点について簡単に触れておく。

1. 基本層の欠落と遺構の確認面

前章で述べたように、調査区が自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置するため、各基本層は北から南に向かって傾斜している。言いかえれば、調査区の北部にいくほど下の層の標高が高くなっているので、その分I・II層によって攪拌されて失われる結果となっている。5区のS20以北ではI・II層を除去した直下にX層・VIIb層・V層などの下部の基本層が現れて、その面が最初の遺構確認面となっている（第7図の基本層序模式図、第8図の平面図参照）。

また、3区のW8～24の間・4区・5区のS50以南は水田として利用された際に削平を受けたためI層の直下はVI層となっており、この面が最初の遺構確認面となっている。

このように遺構の確認面の直上の基本層が欠落する場合は、遺構の本来の掘り込み面は不明であり、実際このような遺構が多い。

2. 耕作による攪拌と遺構の確認面

遺構の廃絶後にその周辺が畑として利用された場合、層上面は攪拌されて畑以前にあった遺構のプランは確認できないことが十分予想される。畑の耕作深度が直下層にまで及ぶ場合は、実際の遺構確認面は畑の耕作土を除去した後の面となり、本来の掘り込み面よりも1層分下層となる。

本来の掘り込み面の検討にあたっては、他の遺構や出土遺物とも関係してくるのでここでは詳細には触れないが、後述するS11やSB3・4・5・6の一部がこの例に相当すると考えられる。

以上の1・2で述べた理由によって本来の掘り込み面が不明な遺構が多いため、調査時の遺構の確認面の違いをもってそのまま遺構の変遷に結び付けることはできない。そこで各遺構の説明にあたっては、とりあえず調査時に確認できたまま記述していくこととし、本来の遺構掘り込み面と実際の確認面とのずれは第4章で修正していくこととする。

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）

I. I～III層除去後の状況（第8図）

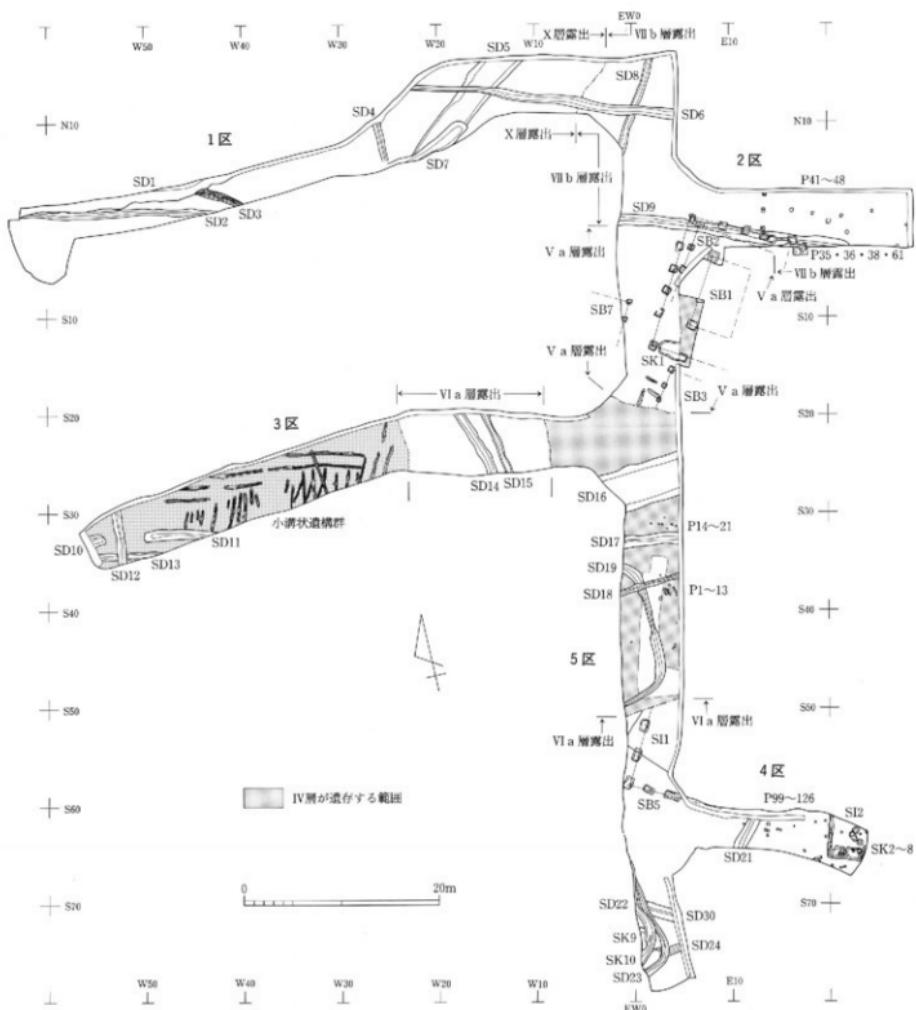
1区の東端部を除く部分は水田であったが、ここでは水田耕作土を除去するとにぶい黄褐色のX層上面が現れ、SD1～5・7とSD6の西半部を確認している。

1区東端部～5区北部および2区は畑として利用されていたが、畑の耕作土と直下のII層を除去すると、NS0以北は黒色のVIIb層、NS0～S20付近は黒褐色のVa層となり、S20以南の区域では暗褐色のIV層が現れた。ここではSD6の東半部、SD8・9、SB1・2・7、SK1、ピット群、小溝状遺構群の一部を確認したが、SB3はP52～54が確認できたのみで南側の柱穴はまだ確認できない段階であり、小溝状遺構群もSB3の付近でごく一部を確認したのみで、その大部分はIV層に覆われていて未確認の状況であった。

3区～5区の中央部にかけては、3区の一部の水田部分を除いて畑であったが、畑の部分では耕作土と直下のII層および部分的に遺存していたIII層を除去すると暗褐色のIV層となり、一方水田として利用されていた場所では耕

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）

作土下に黄褐色のVIa層が現れる。3区西部ではIV層上面でSD10～13と小溝状遺構群の他にSD20に伴う土手の上面プランを確認したが、この土手はVb層上面に構築されたもので、IV層には伴わない。また、東部の水田で削平されたVIa層上面ではSD14・15を確認している。5区のIV層上面ではSD16～19とビット群を確認している。



第8図 IV～X層上面（I～III層除去後）平面図

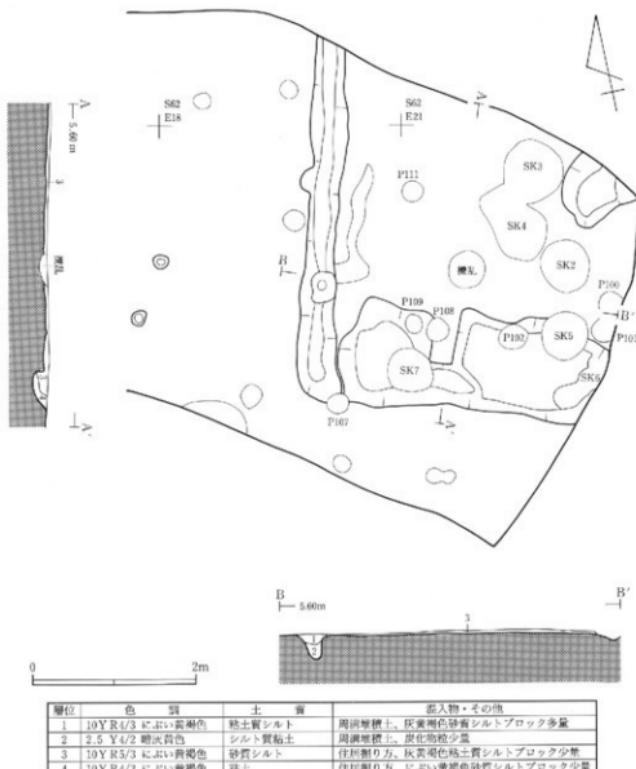
4区と5区南部は水田で削平されており、耕作土を除去して検出した黄褐色のVIa層上面ではS I 2、SD21～24・30、SK 2～10、ピット群などを確認している。またこの他にS I 1の大部分とS B 5-P71～75も確認したが、S I 1の北側とS B 5の柱穴2個は上にIV層が被っているためまだ確認できない状況であった。

II. 遺構と遺物

1. 穴住居跡

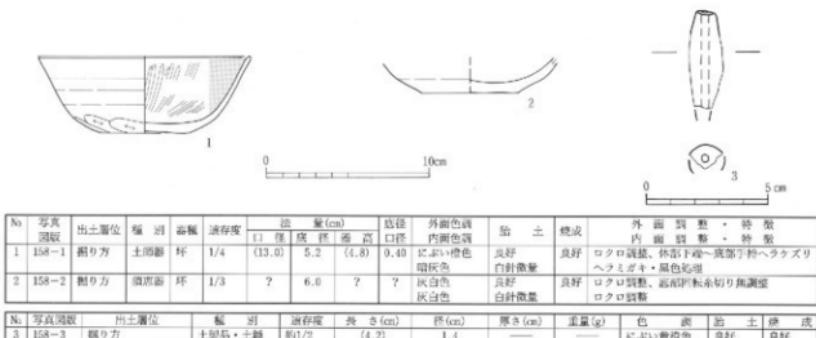
2号住居跡-S I 2-（第9図）

4区東端に位置する。床面は削平されVI層上面で掘り方のみを確認したものである。主軸方向はN-16°E、北～東部が調査区外のため大きさは不明であるが、南北4.4m以上、東西4m以上ある。掘り方のみのため床面・壁などは不明で、カマドは確認できなかった。西側に幅約40cm、深さ約30cmの周溝があり、南側には掘り方がやや幅広い部分も認められる。なお住居のプラン内側にあるSK 2～8はこの住居に伴う土坑であった可能性があるが、断定できないため一応住居とは別の独立した遺構として扱っている。



第9図 SI2 平面・断面図

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）



第10図 SI2 出土遺物

遺物は掘り方から土師器片38点、須恵器片12点、土錐1点が出土し、このうち土師器環1点、須恵器環1点、土錐1点が図化できた（第10図）。土師器環はロクロ調整で体部がやや内湾し、体部下端～底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるものである。

2. 挖立柱建物跡

（1）1号掘立柱建物跡－SB 1－（第11・12図）

5区北部～2区にかけて位置する。当初、2区で東西方向に並ぶ柱穴列（P27・31～34・36・62）をVIIb層～SD9堆積土上面で、それに直交して南北方向に並ぶ柱穴列（P22～26）を5区のVa層上面で確認した。この段階では2区の東西方向の柱穴列の間隔が狭いために他の掘立柱建物跡などとの切り合いも考慮され、さらに建物の大部分が調査区外のために不明な点が多くかった。このため調査区東側の一部を拡張した結果、柱穴P49・57～59を確認した。このうちP49はVa層上面での確認であるが、P57～59は付近のI・II層の耕作深度が浅かつたため、IV層上面で確認できた。さらに、P59については調査区壁面にかかっていたため、断面観察によっても本来はIV層上面から掘り込まれていることが再確認できた。

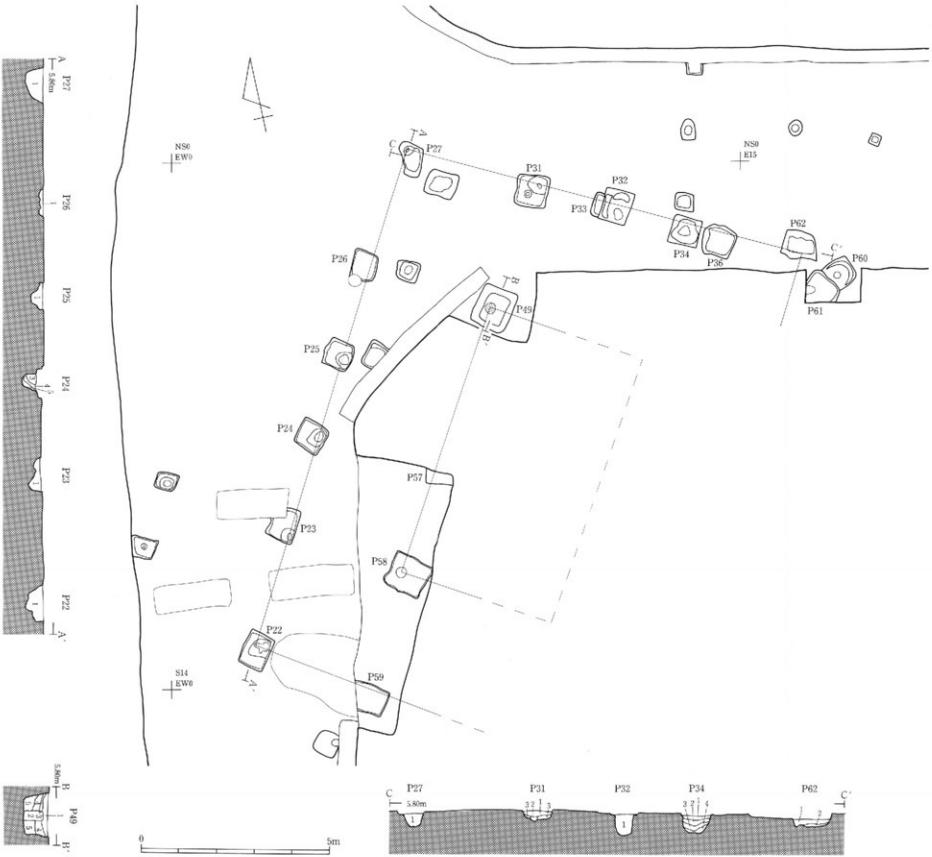
拡張して確認した柱穴4基とその他の柱穴との位置関係を見てみると、P31～P49・(P57)～P58～P59の柱筋が通ること、この柱筋に直交してP49とP58を通るラインの西側線上にP26とP23がそれぞれ位置することから、これらは同じ建物を構成する柱穴である可能性が高いと考えられる。なお、P57はプランの一部のみの確認なので判然としないが、P49とP58は掘り方が一辺1m前後で深さが約75cmと他のピットよりもひと回り大きくて深く



SB 1 調査風景



拡張区で確認したSB 1-P49・58・59



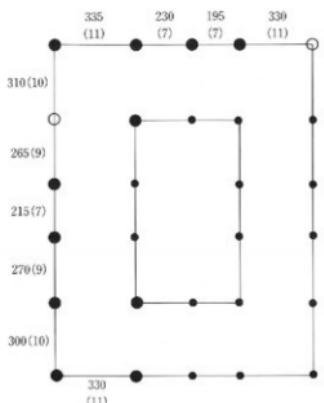
第11図 SB1 平面・断面図

SB 1 (BB)					
層位	色	調	土質	測定人物	その他
1	10YR 3/3	暗褐色	シルト		
2	10YR 4/2	灰褐色	砂質シルト	炭化物付粘土	
3	2.5 Y 6/2	褐色	砂質シルト	にあく葉緑色シルトブロック 少量	
4	2.5 Y 4/1	褐色	粘土	黄褐色シルトブロック少量	
5	2.5 Y 3/2	黒褐色	シルト	黄褐色シルトブロック多量	
6	2.5 Y 3/1	黒褐色	粘土	黄褐色シルトブロック無	

SB 1 (倉)					
層位	色	調	土質	測定人物	その他
1	10YR 4/2 にあく暗褐色	シルト	羽青褐色セメントブロック・ 粘土付シルトブロック量		
2	2.5 Y 3/2 黒褐色	シルト質 柱高層			
3	10Y R 3/3 暗褐色	シルト	羽青褐色粘土ブロック・ 混入する柱高層		
4	10Y R 4/3 にあく暗褐色	シルト	羽青褐色セメントブロック量 無褐色柱土を縦状に現る		
5	10Y R 4/2 灰褐色	砂質シルト			

ゾット	掘り方	柱面跡	備考
No	大きさ	幅×深さ	
5.8	110 × 95	?	28 ?
5.7	110 × 95	?	28 ?
4.9	110 × 100	73	28 ?
5.9	(90) × 70	44	29 ?
2.2	95 × 70	28	?
2.3	85 × 70	16	?
2.4	75 × 70	10	?
2.5	75 × 75	20	?
2.6	75 × 65	18	?
2.7	80 × 65	33	?
3.1	85 × 80	23	?
3.2	90 × 75	69	?
3.4	75 × 75	56	?
6.2	90 × 75	41	?

表3 SB1 柱穴一覧表



第12図 SB1 模式図



調査風景（北から）

いが、西側・南側の廂の様相からすると柱間は等間隔ではなく、廂部分が10~11尺と広いのに対して、身舎の部分はやや狭く、さらに中央部は最も狭くて7尺程度である可能性がある。この観点でみると、P34-P36の3尺は極端に狭い柱間となり不自然であるが、P36を外して考えるとP34-P62が10~11尺であるので、ほか他の廂部分と同様の柱間となり、P34-P62部分は東側の廂である可能性が考えられる。

以上のようなことから、SB1は南北13.60m(45尺)、東西10.90m(36尺)の南北棟で、四面に廂が付く建物であると推定されるが、北側の廂の柱列の中にSB1とは組み合わないP36とP33があることなど不明な点も残るので別な解釈がある可能性も留めておきたい。方向は西側の廂の柱列で見るとN-31°-Eで、柱間は前述したように身舎の南北が9尺と7尺、東西が7尺、廂の出は南北が10尺、東西が11尺である（第12図）。

遺物は柱穴の掘り方から土師器片105点、須恵器片39点、土鍤1点が出土した。土師器は大部分がロクロ調整のものであるが、いずれも細片で図化できたものはない。

(2) 2号掘立柱建物跡-SB2-(第13・14図)

SB1の西廂の脇のV字上面で、南北方向に並ぶ柱穴を3基確認した。他に組み合う柱穴が確認できなかったが、東側の調査区外に展開する可能性を考えてSB2とした。柱穴は表通りで、柱痕跡は確認できなかった。南

（註1）、柱の径も太いことから異なる性格を持つことが予想される。このことからP49・57・58は身舎の柱穴で（註2）、P49と58はその北西と南西のコーナーにあたり、その他は廂の柱穴であると推定される。

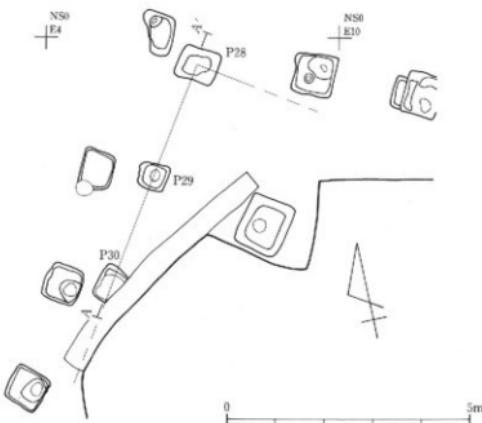
このようにP49と58が身舎の北西と南西コーナーの柱穴で、その他は廂の柱穴であるとすると、廂は少なくとも北・西・南の3面に付くこととなるが、次に東側の廂の有無も含めて、建物の構造について見てみたい。

廂の柱穴は、上面や断面では柱痕跡が確認できなかつたが、柱穴の底面に窓を持つものが多く、この部分が柱痕跡であると推定できる。このことから廂北西コーナー-P27と南西コーナーP22の柱との芯々距離を復元すると南北が13.60m(45尺)となる。柱間は北から10尺・9尺・7尺・9尺・10尺で中央のP24とP25の間が7尺と最も狭く、南北両端（南北の廂部分）が10尺で最も広い。

なお、身舎の西側柱列の柱間隔もこれに対応すると考えられ、北西コーナーのP49とP58の柱の芯々の距離を復元すると南北が7.45m(25尺)となる。そしてP49とP57との間に未調査の柱穴が1基入るとすると、この場合の柱間は9尺・7尺・9尺となる。

次に建物の東西方向を見てみると、南側の廂の柱穴はP22とP59の2基で、柱間は11尺である。北側の柱穴列についてはP27-P31-P32-P34までの柱間を見てみると、11尺・7尺・7尺となっているのに対してP34の東側はP34-P36が3尺、P36-P62が7~8尺となっている。身舎の大部分が調査区外のために断定はできな

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）

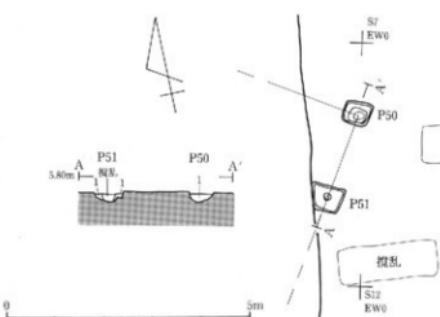


部位	色 調	土 質	鉱物・その他
1	2.5 Y4/3 オーブ緑色	シルト	
2	10Y R2/2 無色	シルト	に赤い黄褐色シルトブロック少量
3	10Y R3/4 に赤い黄褐色	砂質シルト	
4	10Y R4/2 に赤い黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック少量
5	2.5 Y4/2 無色	粘土質シルト	

第13図 SB2 平面・断面図

ピット No.	掘り方	柱痕跡			備考
		大きさ	深さ	層	
3.0	75×(50)	35	?	?	
2.9	65×55	20	?	26	掘り方画面の窪みが柱痕跡と推定
2.8	80×65	50	?	?	

表4 SB2 柱穴一覧表



部位	色 調	土 質	鉱物・その他
1	10Y R3/3 無色	シルト	に赤い黄褐色シルトブロック・炭化物粒少量

第15図 SB7 平面・断面図



第14図
SB2 模式図

北長は4.9m、柱間は8尺で、方向はN-32°-Eである。なお、南西側に近接するS.B.7と方向が一致していることから両者が接続する可能性はあるが、間尺が異なるので一応別な建物とした。

遺物は柱穴の掘り方から土師器片2点、須恵器片2点が出土したが、いずれも細片で図化できたものはない。

(3) 7号掘立柱建物跡－S.B.7－（第15・16図）

S.B.1西側のV.a層上面で、南北方向に並ぶ柱穴を2基確認した。他に組み合合う柱穴が確認できなかったが、西側の調査区外に展開する可能性を考えてS.B.7とした。柱穴は表の通りで、柱痕跡は確認できなかった。2基の柱の間隔は1.8m(6尺)で、方向はN-32°-Eである。前述したよう



第16図
SB7 模式図

ピット No.	掘り方	柱痕跡			備考
大きさ	深さ	層	深さ	層	
5.0	55×50	16	?	24	底面の窪みが柱痕跡と推定
5.1	70×55	22	?	30	底面の窪みが柱痕跡と推定

表5 SB7 柱穴一覧表

にSB2と方向が一致するが別な建物とした。

遺物は出土しなかった。

3. 溝跡

(1) 1号溝跡－SD1－（第17図）

1区西部の水田直下のX層上面で確認し、SD2・3を切っている。方向はほぼ東西に延び、確認できた長さは約22mである。大部分は調査区外のため確認できたのは南岸のみで、このため幅は不明、深さも部分的な調査のため不確実であるが、調査できた箇所では約80cmである。堆積土は現水田耕作土に似たオリーブ褐色粘土の単層である。

遺物は土師器4点、須恵器3点の他に現代の製品が出土しており、現代まで使われていたことが判る。

溝の位置はちょうど自然堤防の北側の縁に当たり、方向も自然堤防に沿っているが性格は断定できない。

(2) 2号溝跡－SD2－（第17図）

1区西部の水田直下のX層上面で確認した東西方向の溝で、SD1に切られている。上部はかなり削平されていると考えられる。方向はN-78°-W、確認できた長さは約20m、幅は約80cm、断面形は「U」字形で深さは約15cmである。堆積土は自然堆積層である。底面は比較的平坦で底面のレベルは東側がやや低く、東西の高低差は約5cmである。

方向や断面形からすると5区北部のSD9と同一の遺構である可能性がある。性格は断定できない。なお、遺物は出土しなかった。

(3) 3号溝跡－SD3－（第17図）

1区西部の水田直下のX層上面で確認した。SD2のやや北に位置し、SD1に切られている。確認した段階では幅約80cmの1条の溝であったが、掘りあげた結果幅30~40cmの2条の溝が平行する状況となった。2条の溝が切り合っていた可能性があるが、上部がかなり削平されているため検証できず、このため一応1条の溝として扱っている。方向は、確認できた長さが約4.5mと短いこととやや湾曲していることから明確ではないがN-63°-Wである。深さは約5cmで、底面はやや凹凸があり溝が途切れる箇所もある。底面の高低差は不明である。

なお、このまま南東からやや南向きに湾曲していくと3区東部のSD14につながる可能性がある。遺物は出土せず、性格は不明である。

(4) 4号溝跡－SD4－（第18図）

1区中央部の水田直下のX層上面で確認した南北方向の溝で、南端部を擾乱で切られている。方向はN-1°-Wで、確認できた長さは約4m、幅は約60cm、深さは約30cmである。堆積土は現水田耕作土に近いオリーブ褐色粘土の単層である。底面は平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

方向や断面形からすると3区東部のSD15につながる可能性がある。遺物は出土せず、性格は不明であるが、年代は堆積土からすると現代に近いと考えられる。

(5) 5号溝跡－SD5－（第18図）

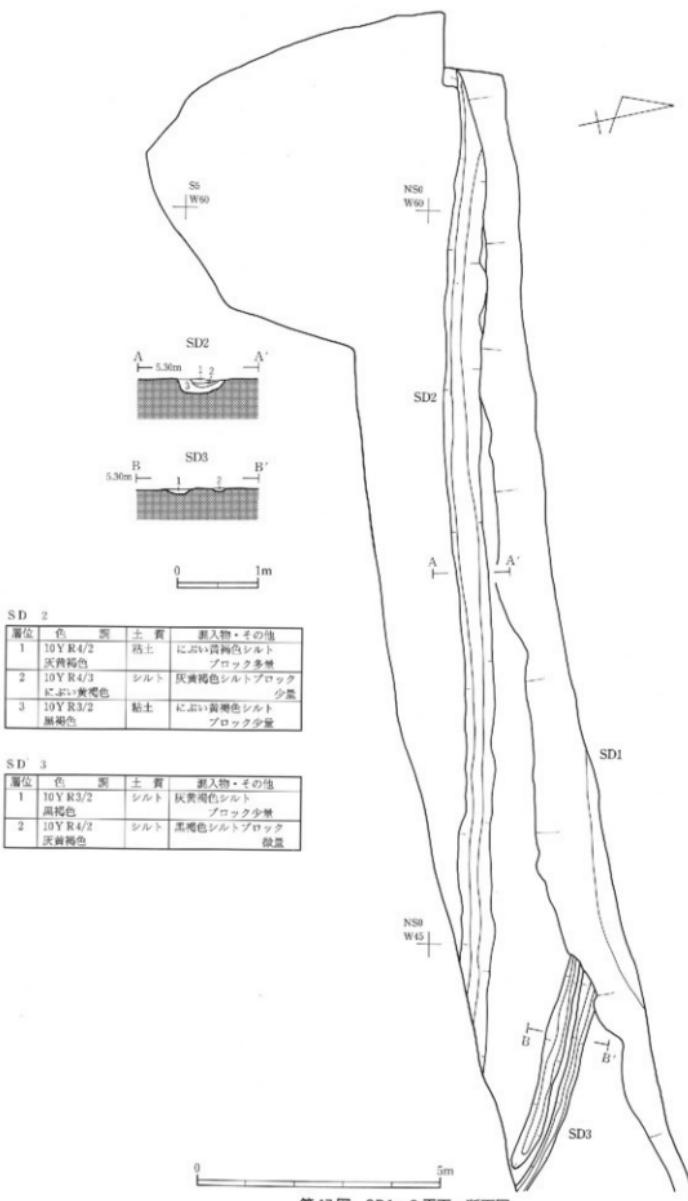
1区中央部の畠と水田にまたがる場所に位置し、現耕作土直下のX層上面で確認した。SD6・7に切られている。方向はN-52°-Eで、確認できた長さは約12m、幅は約2.8m、断面形は浅い逆台形で深さは約15~25cmである。堆積土は自然堆積層と推定される。底面は平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片4点、須恵器片2点が出土したが、いずれも細片で固化できたものはない。溝の性格は不明である。

(6) 6号溝跡－SD6－（第18図）

1区中央部から東端部の畠から水田部分にかけて位置する東西方向の溝で、耕作土直下のX層およびVIIb層上面

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）



第17図 SD1～3 平面・断面図

で確認した。SD 5・8 を切っている。方向はN-71°-W、確認できた長さは約27m、幅は40~100cm、断面形は「U」字形で深さは約50cmである。堆積土のうちの大部分がブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差もほとんど認められない。

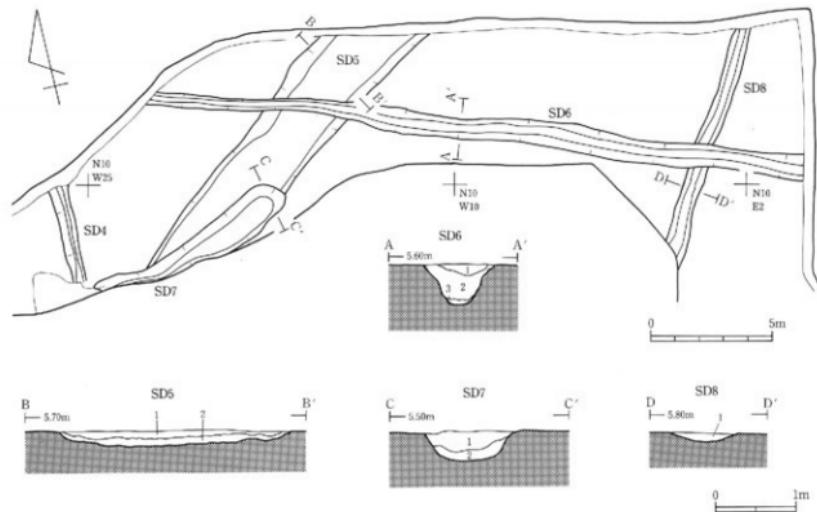
遺物は出土せず、性格も不明である。

(7) 7号溝跡 - SD 7 - (第18図)

1区中央部に位置し、水田直下のX層上面で確認した。SD 5を切っている。平面形がやや湾曲しているが方向はほぼN-64°-Eで、北東部で途切れている。確認できた長さは約8.5m、幅は約1.5m、断面形は浅い「U」字形で深さは約40cmである。堆積土は2層に分層できるがブ



SD 6 作業風景



層位	色調	土質	混入物・その他
1	10Y R 4/2 灰青褐色	シルト	酸化鉄斑点少
	2, 5 Y 3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄斑点少
SD 6	10Y R 2/2 黑褐色	シルト	酸化物粒微量
	2 10Y R 3/3 灰褐色	シルト	黒褐色シルト・灰青褐色粘土ブロック多量
	3 10Y R 4/3 に紫 黄褐色	シルト質粘土	灰青褐色シルト質粘土ブロック微量
SD 7	10Y R 3/3 灰褐色	粘土質シルト	に紫い黄褐色粘土ブロック少
	2 10Y R 2/3 黑褐色	粘土	に紫い黄褐色粘土ブロック多量、酸化鉄管状少
SD 8	10Y R 4/2 灰青褐色	シルト	混入物・その他
			灰褐色粘土質シルトブロック多量

第18図 SD4~8 平面・断面図

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）

ロックを多く含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片が2点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(8) 8号溝跡－SD 8－（第18図）

5区北部に位置する南北の溝で、畑の耕作土直下のVIIb層上面で確認した。SD 6に切られてい。る。方向はN-30°-Eで、確認できた長さは約9.5m、幅は約70～80cm、断面形は浅い「U」字形で深さは10cm前後である。堆積土は単層であるがブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されないと考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベルは南側が3～4cm低い。

遺物は土師器片が1点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(9) 9号溝跡－SD 9－（第19図）

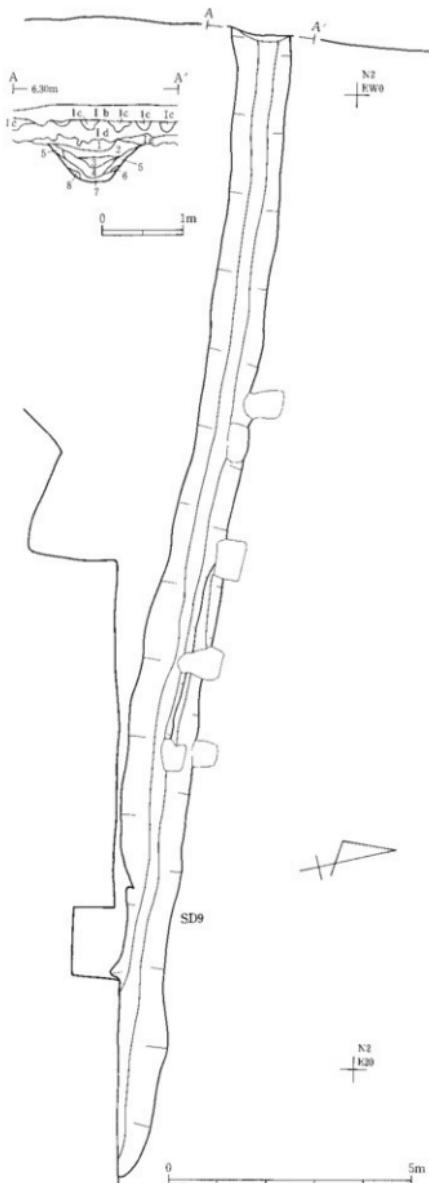
5区北部から2区にかけて位置する東西方向の溝で、畑の耕作土直下のVIIb層上面で確認した。

S B 1 - P 27・P 31・P 32・P 34・P 62、S B 2 - P 28の他、P 33・P 35・P 36・P 38・P 60に切られている。方向はN-71°-Wで、確認できた長さは23.5m、幅は1～1.4mである。断面形は「U」字形で深さは約50cm、堆積土は自然堆積層である。底面はやや凹凸があり、底面の傾きは不明である。

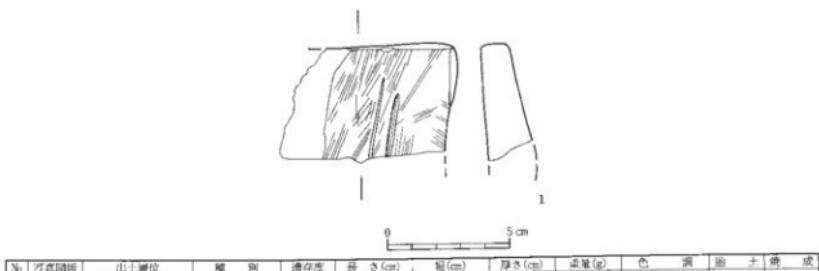
遺物は土師器片7点、磁石1点が出土したのみで、磁石が図化できた（第20図）。溝の性格は不明であるが、前述したようにSD 2とつながる可能性がある。

(10) 10号溝跡－SD 10－（第22図）

3区西南部に位置し、断片的に残るIII層を除去した後のIV層上面で確認した。確認できた長さは約2.2mで、南北方向に延びるSD 12に1mの地



第19図 SD9 平面・断面図



第20図 SD9出土遺物

点で途切れている。SD12をはさんだ東側にも幅や断面形態が類似する溝があつて東方に延びていくが、一度途切れるので別な名称とした(SD11)。溝の幅は約1.2m、方向はN-84°-W、断面形は逆台形で深さは約50cmである。堆積土はブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差は確認した長さが短いため不明である。

遺物は土師器片が4点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は断定できないが、SD11やSD12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。

(11) 11号溝跡-S D11- (第22図)

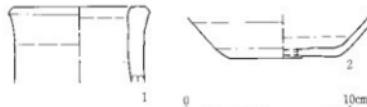
3区西端部に位置し、断片的に残るIII層を除去した後のIV層上面で確認した。小溝状遺構群を切っている。確認できた長さは約7mで、前述したSD10と同様に南北方向に延びるSD12側で途切れている。幅は約1.2m、方向はやや湾曲しているたる明確ではないがほぼN-80°-W、断面形は逆台形で深さは約50cmである。堆積土は下層にブロックを多量に含むことから一部は人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差もほとんどない。

遺物は土師器片が7点、須恵器片が8点出土したが、図化できたものは須恵器の壺と考えられる1点のみである(第21図1)。溝の性格はSD10やSD12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。

(12) 12号溝跡-S D12- (第22図)

3区西端部に位置し、断片的に残るIII層を除去した後のIV層上面で確認した。SD13を切っている。確認できた長さは約5.5mで、SD10・11が途切れている幅4mの部分を通って南北に延びている。幅は約80cm、方向はN-7°-Eである。断面形は「U」字形をしており深さは約40cm、堆積土は自然堆積と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベルは南側が約10cm低い。

遺物は土師器片が1点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格はSD10やSD11と関連する区画の溝で



第21図 SD11・13出土遺物

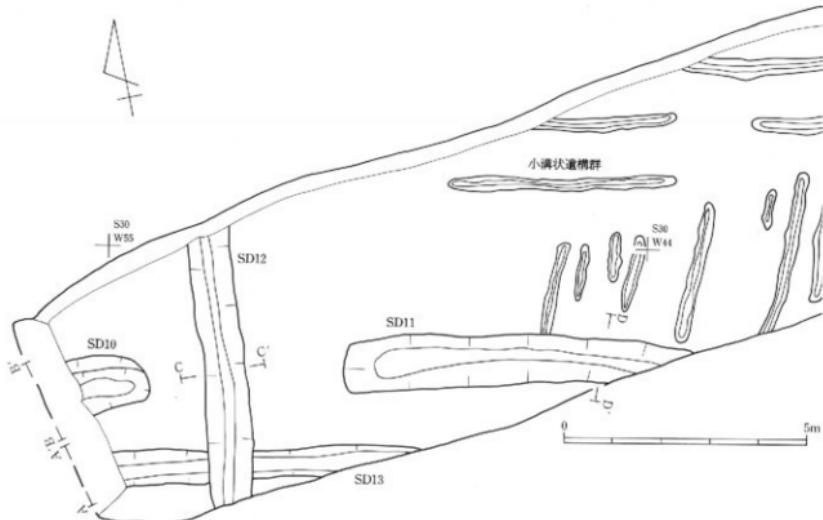
第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）

ある可能性が考えられる。

(13) 13号溝跡－SD13－（第22図）

3区西端部に位置し、断片的に残るIII層を除去した後のIV層上面で確認した。SD12に切られている。確認できた長さは約7mで、幅は50～90cm、方向は前述したSD10やSD11と並行するN-82°Wである。断面形は「U」字形で深さは約30cmである。堆積土は単層で、ブロックを含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差は南側が約10cm低い。

遺物は土師器片が12点、須恵器片が3点出土したが、図化できたものは須恵器壺1点のみである（第21図2）。溝の性格はSD10～SD12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。



SD13		
	A	A'
	6.20m	
	I a	
	I b	
	IV	
	1	
	VI	

SD10		
	B	B'
	6.20m	
	I a	
	IV	
	1	
	VI	

SD12		
	C	C'
	5.70m	
	2	

SD11		
	D	D'
	5.80m	
	1	

層位	色	調	土質	混入物・その他	
				1	2
SD10	10YR 3/2 黒褐色		粘土	褐色粘土ブロック多量	
	10YR 3/2 黒褐色		粘土		ブロックの混合
	10YR 4/1 黒褐色		粘土		
	10YR 4/3 にほい黄褐色		シルト		

層位	色	調	土質	混入物・その他	
				1	2
SD11	10YR 3/2 黒褐色		シルト	にほい黄褐色砂質シルトブロック少量	
	10YR 3/3 黄褐色		砂質シルト	にほい黄褐色砂質シルトブロック少量、黒褐色砂質シルトブロック少量	

層位	色	調	土質	混入物・その他	
				1	2
SD12	10YR 3/2 黒褐色		粘土シルト		
	10YR 3/2 黑褐色		粘土質シルト	暗灰黄色砂質シルトブロック少量	
	10YR 4/2 黑褐色		粘土質シルト	黒褐色シルト・暗灰黄色砂質シルトブロック少量	

層位	色	調	土質	混入物・その他	
				1	2
SD13	10YR 4/2 反転褐色		シルト	にほい黄褐色シルトブロック少量、黒褐色粘土ブロック少量	

第22図 SD10～13 平面・断面図

(14) 14号溝跡 - S D14 - (第23図)

3区東部の現水田耕作土直下、VIa層上面で確認した。確認できた長さは約7.5mで、幅は約1m、方向はN-18°-Wである。断面形は途中で段が付く逆台形をしており、深さは約45cm、堆積土にはブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は常滑産の甕の破片が1点出土したが図化はできなかった。前述したように1区のS D3とつながる可能性があるが、溝の性格は不明である。

(15) 15号溝跡 - S D15 - (第24図)

3区東部の現水田耕作土直下、VI層上面においてSD14と並んで確認した。確認できた長さは約6.5m、幅は約70cm、方向はN-12°-Wである。断面形は逆台形で深さは約20cm、堆積土にはブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は出土せず、前述したように1区のS D4とつながる可能性はあるが、溝の性格は不明である。

(16) 16号溝跡 - S D16 - (第24図)

5区のほぼ中央部、III層除去後のIV層上

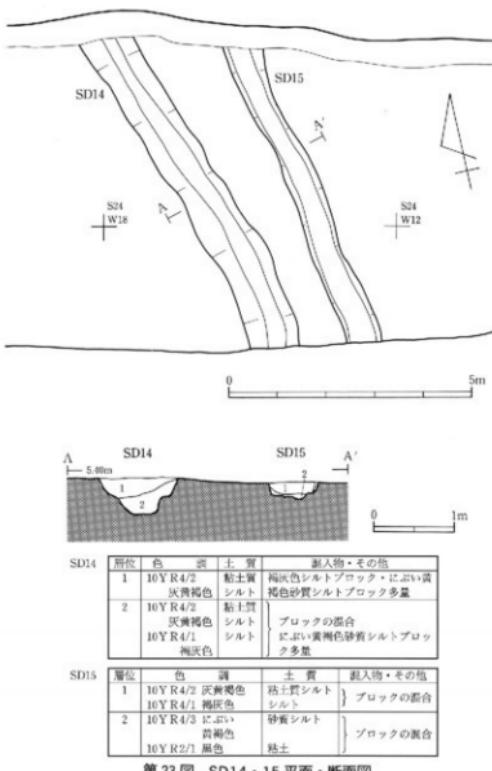
面において確認した。確認できた長さは約8.5m、幅は約4.5m、方向はN-84°-Eである。断面形は逆台形で深さは約50cm、堆積土下層は自然堆積と推定されるが、上層にはブロックを多量に含むことからある程度埋没したのちに埋め戻されたと考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片77点、須恵器片35点などが出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(17) 17号溝跡 - S D17 - (第25図)

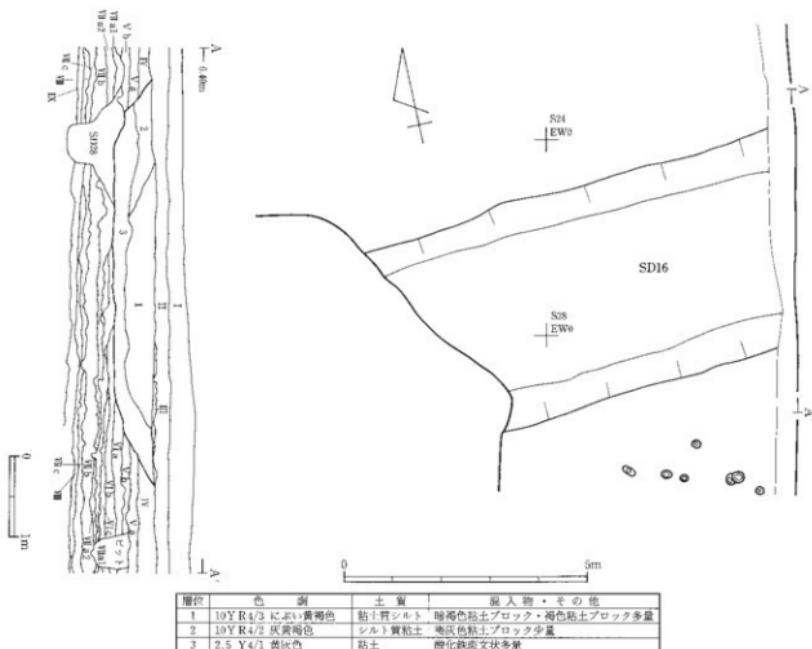
5区のほぼ中央部、III層除去後のIV層上面においてSD16の南側に並んで確認した。確認できた長さは約6m、幅は約1.2m、方向はN-81°-Wである。断面形は「V」字形をしており、深さは約50cmである。堆積土は基本層III層に類似した黒褐色シルトであることから、本来は確認面よりも1層分上位のIII層上面から掘り込まれていたと推定される。底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片37点、須恵器片18点が出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。



第23図 SD14・15 平面・断面図

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）



第24図 SD16平面・断面図

(18) 18号溝跡－SD18－（第25図）

5区のほぼ中央部、III層除去後のIV層上面においてSD16・17の南側に並んで確認した溝で、SD19を切っている。確認できた長さは約6m、幅は40~70cm、方向はSD16に近いN-87°-Eである。断面形はやや丸みを帯びているが「V」字形に近く、深さは約30cm、堆積土は単層である。底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片13点、須恵器片6点が出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

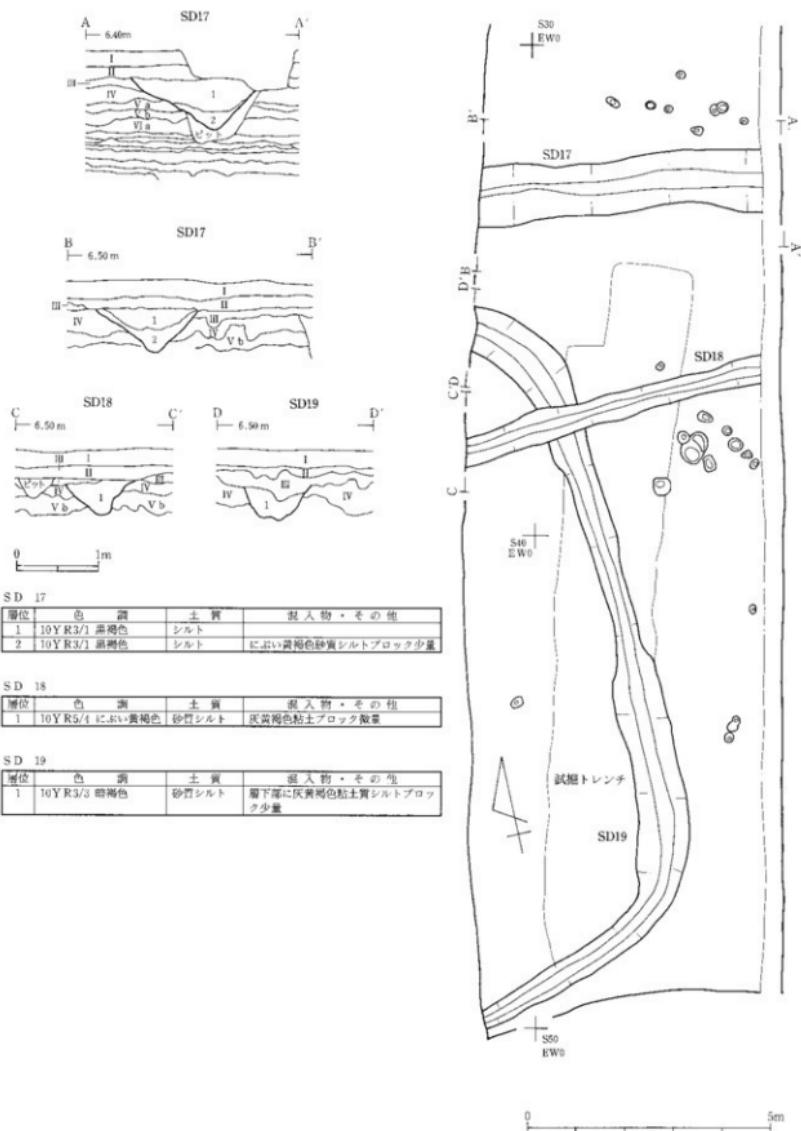
(19) 19号溝跡－SD19－（第25図）

5区中央部、III層除去後のIV層上面で確認した「コ」字状に巡る溝で、SD18に切られている。確認できた長さは約17m、幅は50~100cm、断面形はやや開いた「U」字形で深さは30~45cm、堆積土は単層である。底面はやや凹凸があるがレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片63点、須恵器片17点、鉄釘1点が出土した。図化できたのは土師器壺1点、鉄釘1点のみで（第26図）、土師器壺は底部～体部下端に手持ちヘラケズリが施されるものである。なお、溝の性格は不明である。

(20) 21号溝跡－SD21－（第27図）

4区中央部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。確認できた長さは約3.5mで、幅は約1.2m、方向はN-38°-Eである。断面形は逆台形をしており、深さは約60cm、堆積土は自然堆積層と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。



第25図 SD17~19 平面・断面図

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）



第26図 SD19出土遺物

遺物は土師器6点と須恵器片5点が出土したのみで、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(21) 22号溝跡-S D22-（第27図）

5区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。S D23と共に南北から南西方向に屈曲する溝で、S D23・30、S K9・10を切っている。確認できた長さは約11m、幅は60～100cmである。断面形は「U」字形をしており深さは約50cm、堆積土は現代水田耕作土に類似した灰黄褐色粘土で自然堆積層と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は出土せず、溝の性格は不明である。

(22) 23号溝跡-S D23-（第27図）

5区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。S D22と共に南北から南西方向に屈曲する溝で、S D24・30、S K10を切り、S D22に切られている。確認できた長さは約11m、幅は40～70cmである。断面形は「U」字形をしており深さは約20～30cm、堆積土は現代水田耕作土に類似した灰黄褐色シルト質粘土で自然堆積層と考えられる。底面は凹凸があるが底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片10点、須恵器片2点が出土したが、図化できるものはない。溝の性格は不明である。

(23) 24号溝跡-S D24-（第27図）

5区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。S D23とS K10に切られている。確認できた長さは約1.5m、幅は約80cmである。断面形は逆台形をしており深さは約50cm、堆積土は自然堆積層と考えられる。底面は凹凸があり、底面のレベル差は調査範囲が狭いために不明である。

遺物は土師器片10点、須恵器片5点が出土したが、図化できるものはない。溝の性格は不明である。

(24) 30号溝跡-S D30-（第27図）

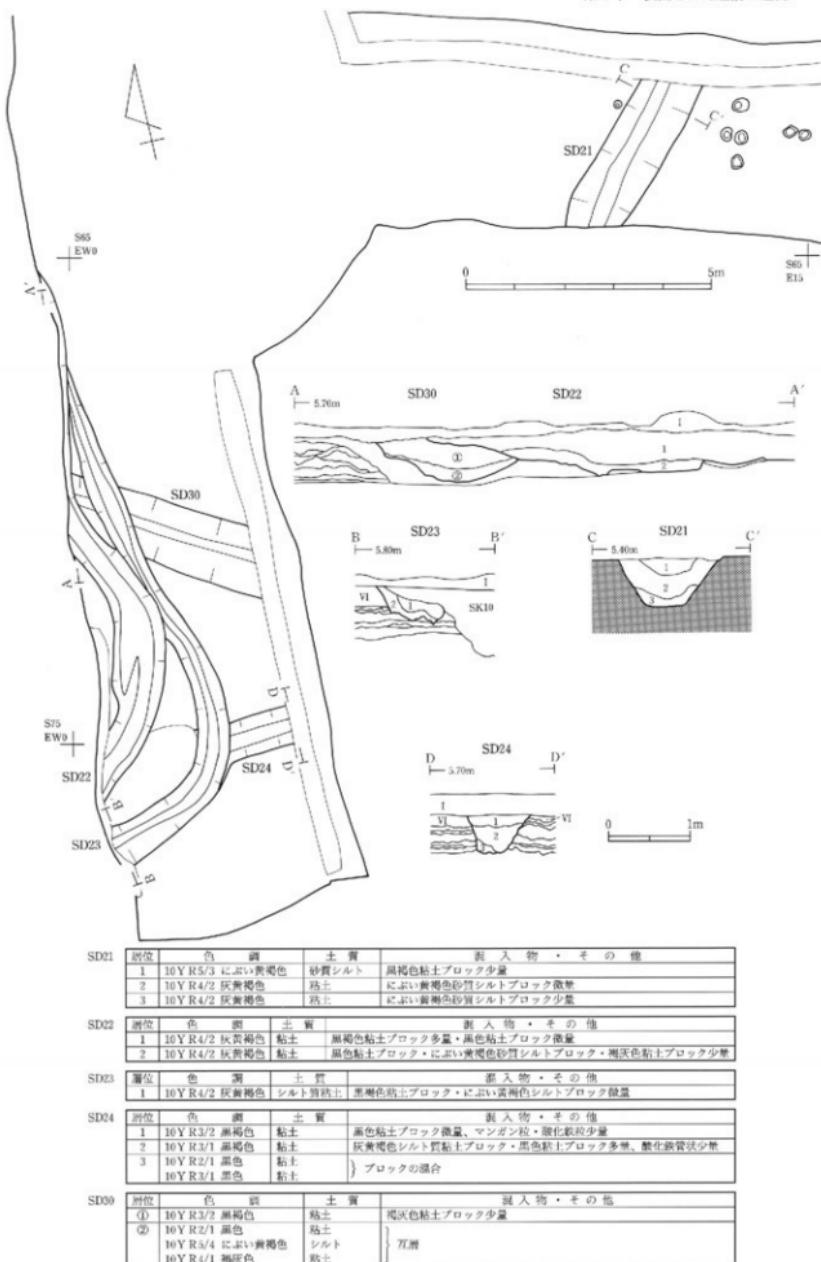
5区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。S D22・23に切られている。確認できた長さは約4m、幅は約1.3mである。断面形は浅い「U」字形をしており深さは約35cm、堆積土は自然堆積層で下層は水成堆積層である。底面は平坦で底面のレベル差は調査範囲が狭いために不明である。遺物は出土しなかった。

溝の位置はちょうど下層のV a層水田跡に伴うS D27が埋没した直上にあたることから、S D27の埋没過程の最終段階にできた自然流路の可能性がある。

4. 土坑

(1) 1号土坑-S K1-（第28図）

5区北部に位置する。II層直下のV a層上面で確認したが、調査区の東壁面でもV a層上面から掘り込まれていることを検証できた。東側が調査区外のため規模は明確ではないが、東西2.7m以上、南北2.0mの楕円形で、主



第27図 SD21～24・30 平面・断面図

軸方向はN-64°-Wである。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約20cm、底面は平坦である。堆積土は自然堆積層で、層中からは多くの土器が廃棄された状況で出土した。

遺物は土師器片102点、須恵器片51点、土製品1点、金属製品1点で、このうち土師器7点、須恵器6点、土鍤1点が図化できた（第29・30図）。

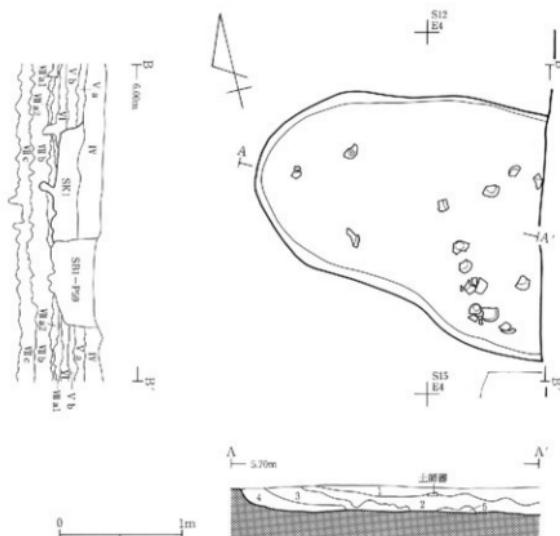
須恵器壺は、体部下半はわずかに丸みを持つが上部は比較的直線的に開き、口縁部はあまり外反しない器形である。調整技法は、切り離し方法が不明で底部あるいは底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるもの（第29図1・2）と、底部が回転糸切無調整のもの（第29図3～6）に分けられる。

土師器壺は2点が大型で、鉢に近いタイプのものである。調整技法は底部あるいは底部～体部下端に手持ヘラケズリ調整が施されるもの（第29図7・9）と底部が回転糸切無調整のもの（第29図8）に分けられる。

なお、土師器壺・須恵器壺共に底部に墨書が認められるものが1点ずつある（第29図6・9）。両者共に同じ文字で、「山」である可能性がある（註3）。

土師器壺はロクロ調整のもの（第30図1・4）とロクロ使用の有無が確認できないもの（第30図2・3）があるが、全体形が判るものはない。

(2) 2号土坑-SK2-（第31図）



層位	色調	土質	盛入物・その他
1	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
2	10Y R4/3 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色粘土ブロック少量
3	10Y R5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物粒多量、洗土少量 にぶい黄褐色粘土質シルトブロック少量
4	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒微量 にぶい黄褐色シルトブロック・黒褐色粘土ブロック少量、食文化物粒微量
5	10Y R3/3 塩漬色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック微量

第28図 SK1平面・断面図

4区東部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。平面形は楕円形で規模は65×40cm、深さ20cmである。堆積土上層には焼土ブロックを多量に含んでいる。遺物は土師器片26点、須恵器片2点が出土したが土師器の大部分はロクロ調整の壺の破片で、図化できたものはない。

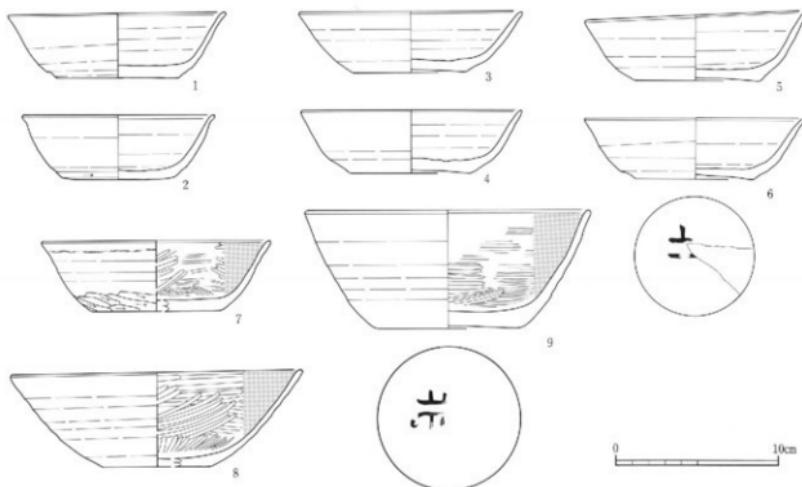
なお、このSK2に近接してSK3～8があるが、これらの土坑の確認状況はすべてSK2と同じで堆積土も類似している。これらの土坑は「S12」の項で述べたように、その位置関係からS12に伴うものである可能性が考えられる。

(3) 3号土坑-SK3-(第31図)

平面形は楕円形で規模は80×70cm、深さ20cmである。堆積土は単層で焼土ブロックを多量に含んでいる。遺物は土師器片33点、須恵器片1点が出土したが土師器の大部分はロクロ調整の壺の破片で、図化できたものはない。

(4) 4号土坑-SK4-(第31図)

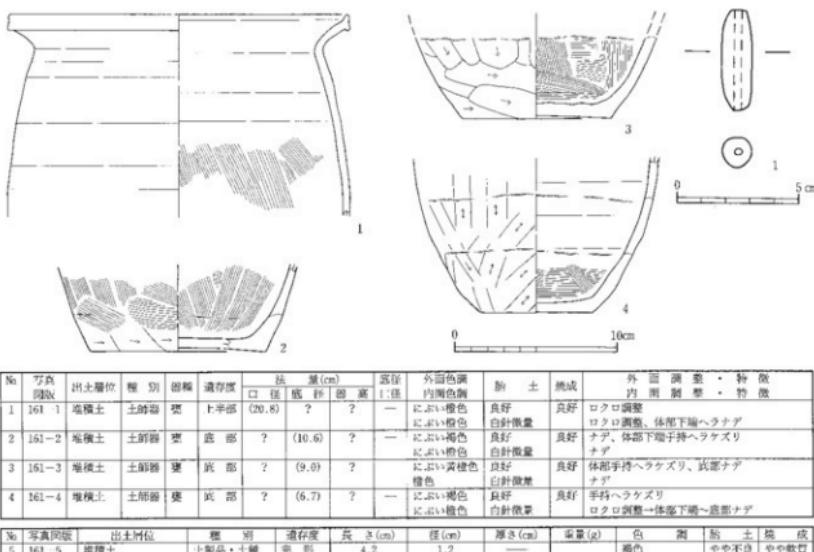
平面形は長楕円形で規模は100×50cm、深さ30cmで、段を有する。堆積土は3層で一部に焼土を含んでいる。遺物



No.	写真 写真 版面	出土層位	種別	断面	遺存状	法 量(cm)	底深 口深 底径 厚	口径 底径 内面色	外面部 内面 色	外面部 内面 調査・特徴		
										底深 口深 底径 厚	外面部 内面 色	
1	160-1	堆積土	須恵器	壺	1/2	13.4	7.6	4.0	0.57	灰褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底部凹凸へラグゼリ→ヘラナダ ロクロ調査
2	160-2	堆積土	須恵器	壺	1/2	(11.8)	6.9	4.0	0.58	灰褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面へ体節下端削除へラグゼリ ロクロ調査
3	160-3	堆積土	須恵器	壺	ほぼ 完形	13.8	7.0	3.8	0.51	灰褐色 灰白色	良好 良好	ロクロ調査、底面凹凸無調査 ロクロ調査
4	160-4	堆積土	須恵器	壺	1/2	13.6	7.3	3.9	0.54	灰褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面凹凸無調査 ロクロ調査
5	160-5	堆積土	須恵器	壺	1/2	(13.7)	7.8	4.3	0.57	灰白色 灰白色	良好 良好	ロクロ調査、底面凹凸無調査 ロクロ調査
6	160-6	堆積土	須恵器	壺	3/4	13.6	7.3	3.8	0.54	灰褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面凹凸無調査 ロクロ調査
7	160-7	堆積土	土師器	壺	1/4	(14.0)	(6.8)	4.3	0.47	淡黃褐色 淡黃褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面へ体節下端削除へラグゼリ ヘラミガキ・施色処理
8	160-8	堆積土	土師器	壺	1/4	(18.0)	(6.6)	5.9	0.37	灰褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面凹凸無調査 ヘラミガキ・施色処理
9	160-9	堆積土	土師器	壺	1/3	(17.5)	(8.8)	7.3	0.50	淡黃褐色 灰褐色	良好 良好	ロクロ調査、底面手括へラグゼリ、底部品青 ヘラミガキ・施色処理

第29図 SK1出土遺物(1)

第2節 IV～X層上面（I～III層除去後）



第30図 SK1 出土遺物（2）

は土師器片19点の他、焼けた粘土塊が1点出土した。土師器の大部分はロクロ調整の壺の破片で、図化できたものはない。

（5）5号土坑-S K 5-（第31図）

平面形は円形で規模は径55cm、深さ22cmである。堆積土は単層で焼土ブロックを含んでいる。遺物は土師器片23点、須恵器片2点が出土した。土師器の大部分はロクロ調整の壺の破片で、このうち1点が図化できた（第32図1）。

（6）6号土坑-S K 6-（第31図）

平面形は不整な方形で規模は90×60cm、深さ50cmで、段を有する。堆積土は単層である。遺物は土師器片23点、瓦片1点、金屬製品1点が出土した。土師器の大部分はロクロ調整の壺の破片で、瓦1点が図化できた（第32図2）。

（7）7号土坑-S K 7-（第31図）

平面形は梢円形で規模は60×50cm、深さ37cmで、段を有する。堆積土はS K 6と同じである。遺物は出土しなかった。

（8）8号土坑-S K 8-（第31図）

調査区のコーナーに位置するため平面形や規模は不明である。深さは約10cmで、堆積土はS K 6と同じである。遺物は出土しなかった。

（9）9号土坑-S K 9-（第34図）

5区南部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。SK10を切り、SD22に切られている。平面形は不整な楕円形で規模は南北2.3m、東西1.7m以上、深さ60cmである。堆積土は灰黄褐色粘土を主としており、ブロックを比較的多く含んでいることから人為的に埋め戻されている可能性がある。遺物は土師器の小片1点のみで図化はできなかった。

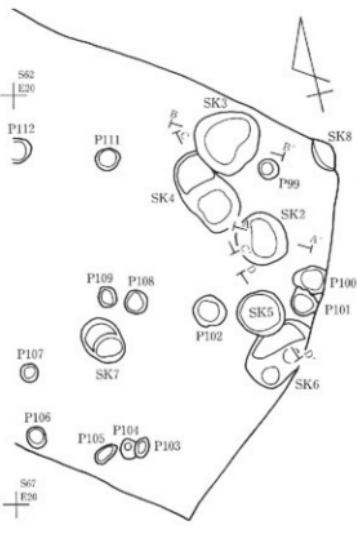
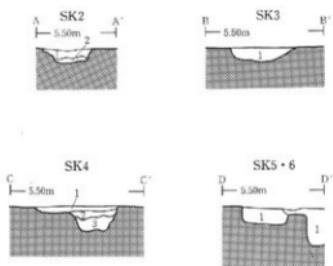
(10) 10号土坑 - SK10- (第34図)

5区南部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面でSK9の南側に並んで確認した。SD24を切り、SD23とSK9に切られている。平面形は長方形で、規模は南北1.6m、東西2.2m以上で主軸方向はN-81°-E、深さ80cmである。堆積土は上層が黒褐色粘土、下層が灰黄褐色粘土を主としており、層下部にはブロックを多量に含んでいることからある程度の深さまで埋め戻されていると考えられる。遺物は須恵器片1点のみである(第33図)。

5. ピット

掘立柱建物の柱穴として区別できるピット以外のものとしては、V区中央部、III層除去後のIV層上面で確認したP1~21、II区のI・II層除去後のVIIb層上面で確認したP33・35・36・38~48・60・61、4区の現代水田直下のVI層上面で確認したP99~126がある(第8図)。

これらのうち2区のP33・36・60・61に関しては平面形が



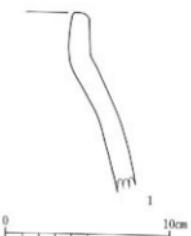
SK 2				埋入物・その他
部位	色調	土質		
1	10YR3/3 灰褐色	シルト		焼土ブロック多量
2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト		
SK 3				埋入物・その他
部位	色調	土質		
1	10YR3/3 灰褐色	シルト		焼土ブロック多量
SK 4				埋入物・その他
部位	色調	土質		
1	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト		灰黄褐色粘土ブロック少量
2	10YR3/1 黄褐色	粘土		{ 前者、焼土ブロック少量
3	10YR5/3 に赤い黄褐色	砂質シルト		後者、灰黄褐色粘土ブロック微量、粘土質ブロック少量
SK 5				埋入物・その他
部位	色調	土質		
1	10YR3/3 灰褐色	シルト		黑色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
SK 6				埋入物・その他
部位	色調	土質		
1	10YR3/3 灰褐色	砂質シルト		墨褐色粘土ブロック少量

第31図 SK2~8 平面・断面図

第2節 IV～X層上面 (I～III層除去後)



第32図 SK5・6出土遺物



No.	写真 図版	出土層位	種 別	器種	遺存度	法 異 (cm)			底様	外側色調 内側色調	胎 土	焼成	外 面 調 整 ・ 特 徴		
						口 径	底 径	高 度					口 径	底 径	高 度
1	162-1	SK 3 堆積土	土師壺	壺	上半部 2/5	(21.2)	?	?	一	横～縦灰色 横～縦灰色	良好	良好	ロクロ調整	ロクロ調整	
2	162-2	SK 6 堆積土	瓦・平瓦	部分			?		(凹面) 灰色 (凸面) 黒～縦灰色	やや不良	良好	(凹面) 有目、糸切り痕 (凸面) 横位鉗印き	(凹面) 有目、糸切り痕 (凸面) 横位鉗印き		

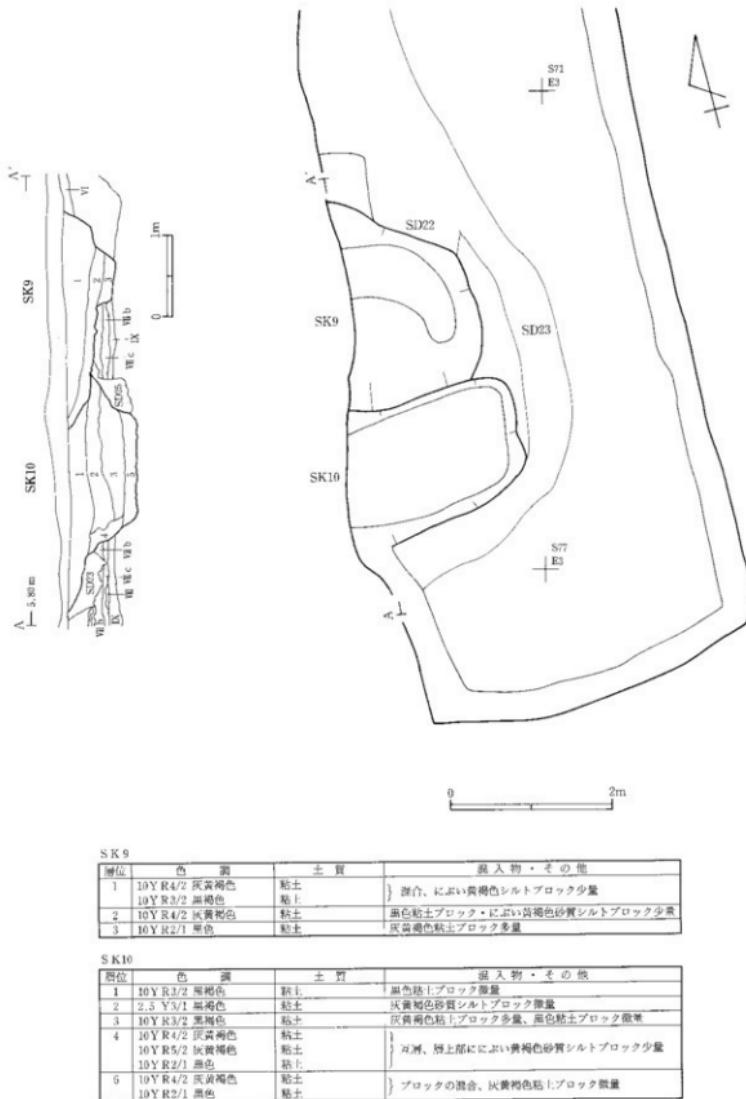
第32図 SK5・6出土遺物

No.	写真 図版	出土層位	種 別	器種	遺存度	法 異 (cm)			底修	外側色調 内側色調	胎 土	焼成	外 面 調 整 ・ 特 徴		
						口 径	底 径	高 度					口 径	底 径	高 度
1	163	堆積土	須恵器	近済部 破片	口縫部 破片	?	?	?	一	灰色	やや不良	良好	ロクロ調整	ロクロ調整	

第33図 SK10出土遺物

方形で規模が大きく、S B 1等掘立柱建物の柱穴に類似していることから、これらも建物の柱穴である可能性が高いが、どの建物に伴うものか明らかにすることはできなかった(第11図)。また、4区のS I 2のプランの内側に位置するP99～102・108・109・111については、SK 2～8同様にS I 2に伴う可能性はあるが確定はできなかった。その他のピットの性格は不明である。

遺物は各ピットから土師器片70点、須恵器片23点が出土した(表19)、このうち土師器片・須恵器片各1点が図化できた(第35図)。



第34図 SK9・10 平面・断面図

6. 小溝状遺構群（第36・37図）

3区西部において、III層除去後のIV層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、新旧関係は明らかにできなかった。

それぞれの小溝の幅は20～30cmで、長さは10m近く続くものもあるが1m前後のものや3～4mで途切れるものもある。深さは5～10cm程度で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は基本層III層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のIII層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。

溝と溝との間隔は20～30cmと狭い箇所と、1mくらいある箇所とがある。

方向は、南北方向のものは北から東に約10°振れるものと20°前後振れるものとの2種類あり、東西方向のものはやや湾曲しているが北から75～85°西に振れているもののみである。

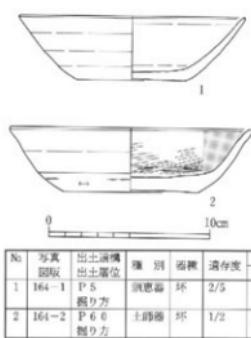
小溝状遺構群は、畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であり、畑の耕作土の下面で確認されている（註4）。3区の小溝状遺構群も同様のもので、III層上面では畠は確認できなかったものの基本層III層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがIII層直下のIV層にまで達したと考えられる。なお、小溝状遺構群が確認できなかった地点においてはその場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲について不明である。また、遺物は出土しなかった。

（註1）完掘したのはP49のみで、P58はプラン確認のみに留めた。

（註2）P57の位置がやや北に寄っているが、これはプランを確認したIV層上面がP57の付近ではI・II層の耕作によって乱されていた可能性もある。

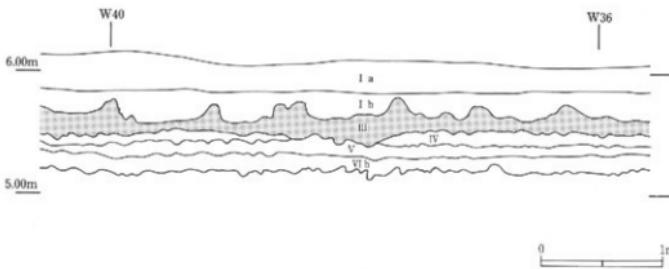
（註3）東北歴史資料館の赤外線テレビで他の墨痕の有無を確認させていただいたが、その際のご教示による。

（註4）下内浦遺跡第4次調査（佐藤：1993）、同第5次調査（神成：1995）では畑の耕作土上面の畠と耕作土の直下層上面の小溝状遺構群の両者がセットとなって確認されている。なお、小溝状遺構群の成因である深い耕作痕については、通常の所謂「天地返し」の他に「根菜類用畠床」も含まれている可能性も指摘されている（佐藤：1998）。

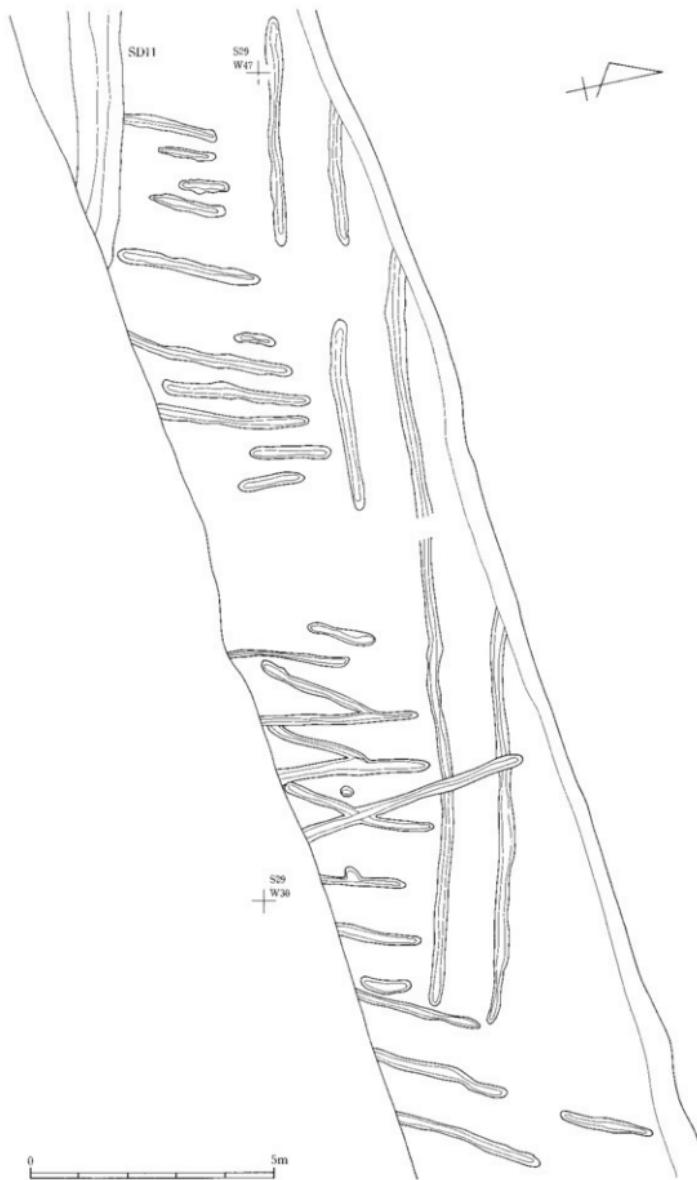


第35図 P5・60出土遺物

No.	分類	出土遺構 部段	出土層位	種別	面積	遺存量	法 面 積 (cm) ²	底 径 (m)	高 度 (m)	外 面 色 調 査	内 面 色 調 査	駆 土	造成	外 面 形 型 ・ 特 徴	内 面 形 型 ・ 特 徴
1	164-1	P 5	耕作層	壊	2/5	(14.0) (6.8)	4.0	0.49	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	良好 良好	良好 良好	良好 良好	ロクロ調整、 局部凹凸へラケズリ ロクロ調整	— —	
2	164-2	P 6 0	耕作層	壊	1/2	(15.0)	8.4	4.0	0.56 に赤い黄褐色 暗灰色	良好 良好	良好 良好	良好 良好	ロクロ調整、 局部～体部下端凹凸へラケズリ ヘラミガキ・黒色処理	— —	



第36図 IV層上面小溝状遺構群断面図

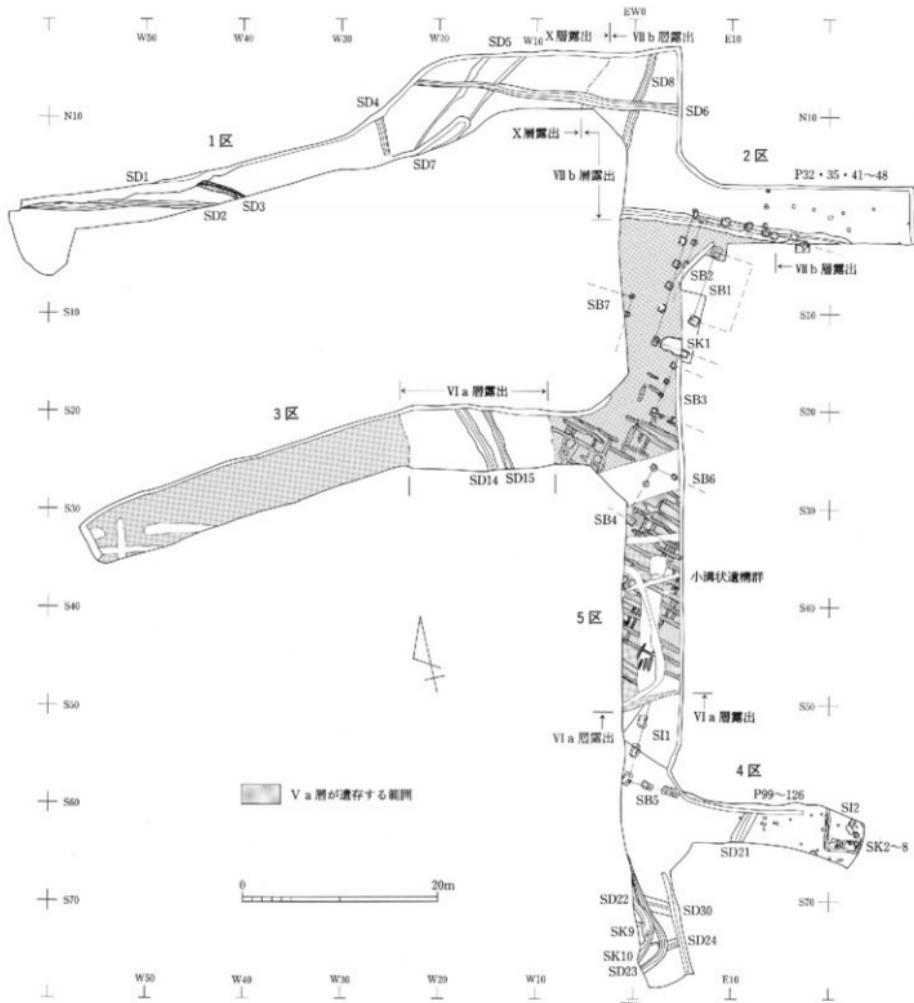


第37図 IV層上面小溝状遺構群平面図

第3節 V a～X層上面（I～IV層除去後）

I. I～IV層除去後の状況（第38図）

前節で述べたように調査区の大部分の箇所ではI～III層を除去した段階すでにIV層よりも下の層（V a・VI a・VII b・X層など）が現れていたので、これらの箇所ではIV層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第38図 V a～X層上面（I～IV層除去後）平面図

IV層が遺存していたのは3区西半部(W24以西)と東端部(W8以東)、5区中央部(S20~50付近)のみであるが、ここではIV層上面の精査終了後にIV層を除去してVa層上面を検出した。3区西半部ではVa層上面で新しく確認した遺構はなかったが、5区中央部ではSB3の南側の柱穴(P55・P56)が確認できた他、この付近で一部が確認されていた小溝状遺構群がさらに南側のS50付近にある段差まで拡がっていることを確認した。

S30付近ではこの小溝状遺構群に混じってSB4-P68が確認されたがSB4の他の柱穴はまだ確認できない状況であった。さらにIV層上面で確認して精査したSD16の底面からはSB6-P94~96も確認したが、この建物が展開すると考えられたSD16の南側では組み合った柱穴はまだ確認できなかった。

なお、S50付近の段差の南側で確認されていたSI1とSB5の北側部分のプランもこの段階ではまだ確認できない状況であった。

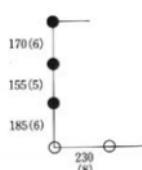
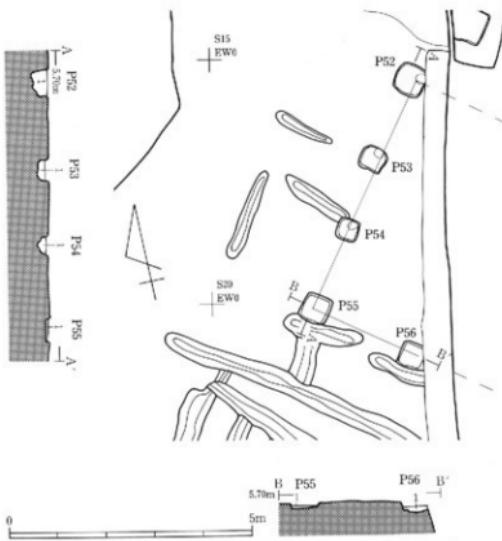
II. 遺構と遺物

1. 堀立柱建物跡

3号掘立柱建物跡—SB3—(第39・40図)

5区北部のSB1の南側に位置している。Va層上面で南北方向の柱穴4基とそれに直交して東に延びる柱穴1基を確認した。同じくVa層上面で確認した小溝状遺構群に切られている。

南北3間で、東西は東側が調査区外のため不明であるが、規模は南北5.10m、東西2.30m以上、西側柱列の方向はN-37°Eである。柱穴は表6通りで上面や断面では柱痕跡は確認できなかったが、P52~54の底面には窪みが認められるのでこの部分が柱痕跡と推定される。南北の柱間は北から6尺・5尺・6尺でSB1同様に中央が狭くなっている。東西は8尺である。遺物は土師器片18点、須恵器片3点が出土したが図化できたものはない。



第40図 SB3模式図

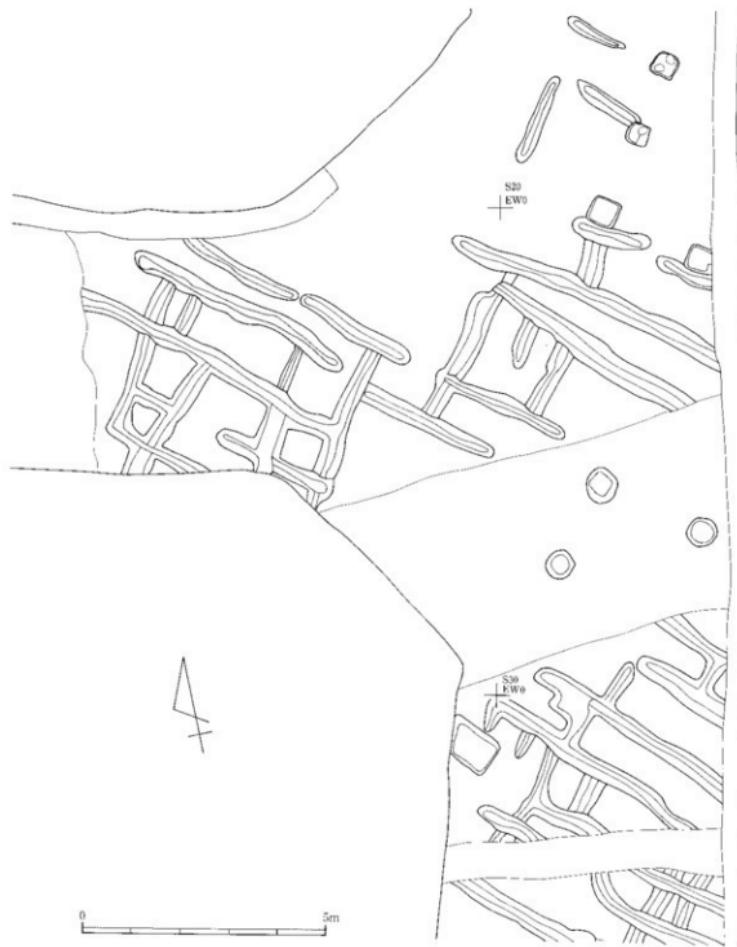
ビット No.	掘り方	性質	地		備考
			大きさ	深さ	
5.2	60×60	10	?	32	掘り方底部の窪みが柱痕跡と推定
5.3	50×50	12	?	26	掘り方底部の窪みが柱痕跡と推定
5.4	45×45	13	?	24	掘り方底部の窪みが柱痕跡と推定、IV層縁の小溝に切られる
5.5	60×60	12	?	?	IV層縁の小溝に切られる
5.6	50×50	20	?	?	IV層縁の小溝に切られる

表6 SB3柱穴一覧表

2. 小溝状造構群 (第41・42図)

3区東端部と5区中央部のIV層除去後のV a層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っている。全部の溝の新旧関係を明らかにすることはできなかったが、平面で切り合い関係が判明したものはすべて東西方向のものが新しい。

方向は、南北方向のものは北から東に30～35°くらい振れるものが大部分で、40～45°くらい振れるものがごくわずかにある。東西方向のものはこれにほぼ直交しており、北から48～55°くらい西に振れるものが大部分を占め、45°程



第41図 V a層上面小溝状造構群平面図 (S16～35)

度振れるものがわずかに認められる。

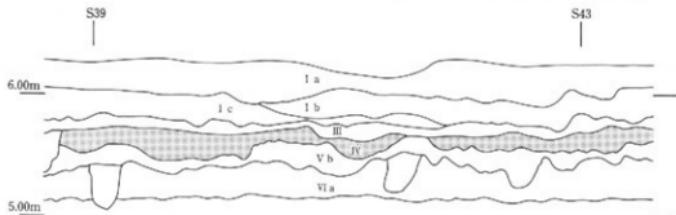
溝の幅は20~70cmで場所によって差があるが、概して東西方向のものが広くて60cm前後、南北方向のものが30cm前後である。調査区が限られているため長さは判らないが、途切れている部分もある。深さは2~10cm程度で平均5cm程度、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は基本層IV層が入り込んだもので、調査区の縦面観察でも溝直上のIV層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。なお、これらの堆積土はV層（黒褐色粘土）をわずかに巻き上げているが、東西方向の溝よりも南北方向の溝の堆積土のほうがV層の巻き上げ方が多いためか、色調がやや暗い。

溝と溝との間隔は大体60cm前後であるが、狭い箇所では20~30cm程度の場合もあり、ばらつきがある。

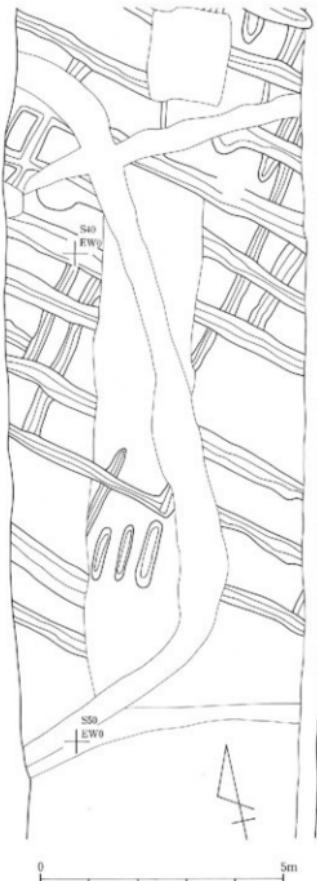
これら的小溝状遺構群は、前節で述べた3区の小溝状遺構群と同様に畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどに比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では畠は確認できなかったものの基本層IV層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがIV層直下のV a層にまで達したと考えられる。なお、小溝状遺構群が確認されなかつた地点ではその場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。遺物は出土しなかつた。



小溝状遺構群
調査風景



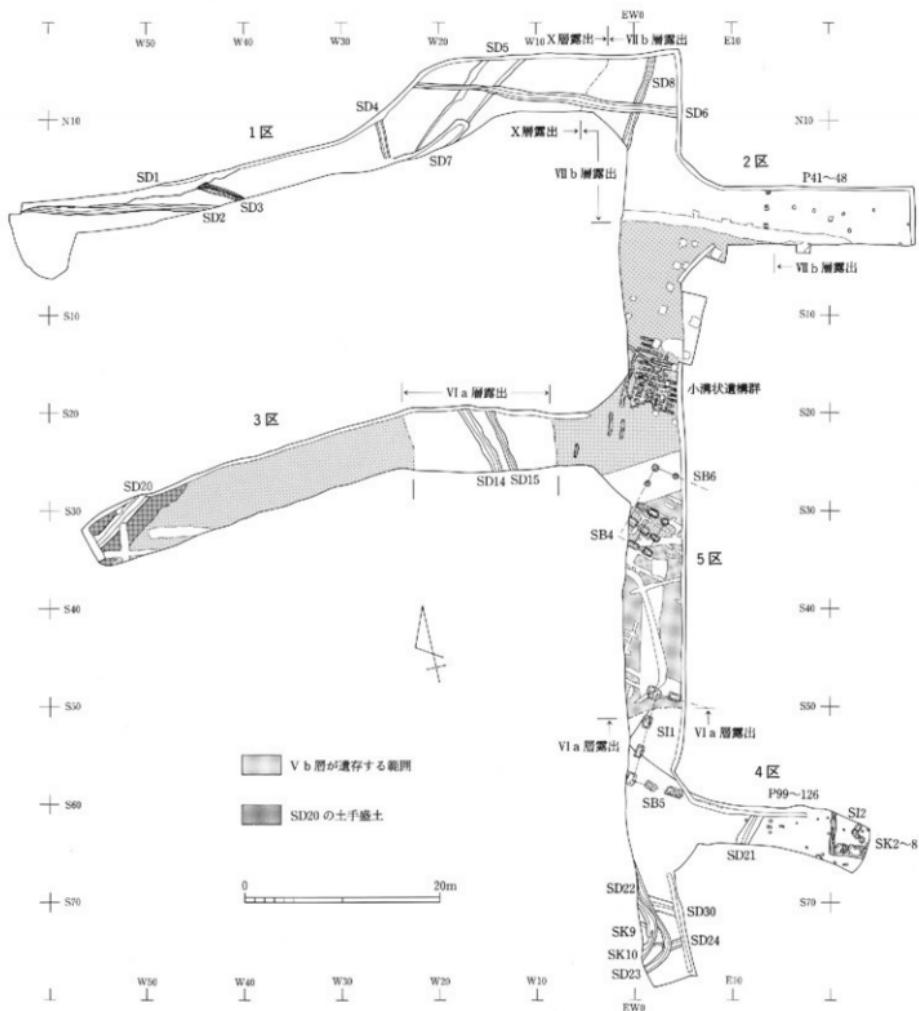
第42図 V a層上面小溝状遺構群平面図 (S35~50)・断面図



第4節 V b～X層上面（I～V a層除去後）の遺構と遺物

I. I～V a層除去後の状況（第43図）

I～III層を除去した段階すでにV a層よりも下の層（V b・VI a・VII b・X層など）が露出していた箇所ではV a層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第43図 V b～X層上面（I～V a層除去後）平面図

V a 層が遺存していたのは 3 区西半部 (W24 以西) と東端部 (W 8 以東) 、5 区北部から中央部 (N S 0 ~ S 50 付近) で、ここでは V a 層上面の精査終了後に V a 層を除去して V b 層上面を検出した。V b 層が遺存していて検出できた範囲は V a 層とほぼ同じであった。

V b 層上面の遺構としては、3 区西端部では S D20 がある。S D20 はすでに IV 層上面の段階において溝に伴う南北両側の土手のプランを確認していたが、土手の盛土と溝の掘り込みは V b 層上面からのものと確認できた。

5 区では、北部の S 12 ~ 25 付近で小溝状遺構群を確認した。中央部の S 30 付近では、V a 層上面で柱穴が一基のみ (P68) 確認されていた S B 4 の残りの柱穴 (P63 ~ 67・68・69) が確認できた。ただし S D16 底面で確認されていた S B 6 の残りの柱穴はまだこの段階でも確認はできない状況であった。

なお、S 50 付近では、段差の下側でのみ確認されていた S B 5 の残りの柱穴 (P76・77) が段差上側の V b 層上面で確認できた。しかし、同様に段差の下側でのみ確認されていた S I 1 の北側部分のプランについてはこの段階でもまだ確認できない状況であった。

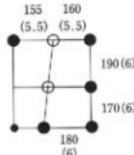
II. 遺構と遺物

1. 挖立柱建物跡

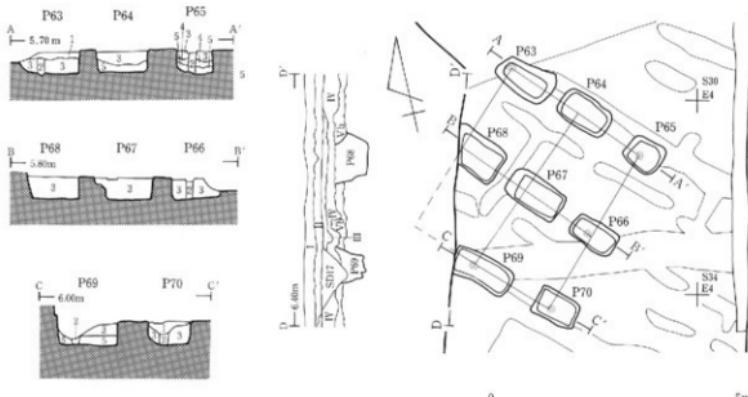
(1) 4 号挖立柱建物跡 - S B 4 - (第44・45図)

5 区中央部に位置している。前述したように直上の V a 層上面で P68 を確認し、V b 層上面で残りの柱穴を確認した。

南西コーナーの柱穴が調査区外のため未検出であるが、南北 2 間、東西 2 間の総柱の建物と考えられる。規模は南北 3.60m (12 尺)、東西 3.15m (10~11 尺)、東側柱列の方向は N-42°-E であるが平面形はやや歪んでいる。柱穴は表 7 の通りで長方形の掘り方を持っており、確認できた柱痕跡はすべて径 15cm 程である。柱間は南北が 6 尺、東西



第44図 SB4 模式図



部位	色調	土質	既入物・その他
1	10YR5/2 深黄褐色	シルト	灰黄褐色粘土シルトブロック少量、黒褐色粘土ブロック微量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡、にぶい黄褐色砂質シルトブロック、黒色粘土ブロック少量
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック、黑色粘土ブロック少量
4	10YR2/1 黒色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック、灰色粘土ブロック少量
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック、灰色粘土ブロック少量

第45図 SB4 平面・断面図

第4節 V b～X層上面（I～V a層除去後）の造構と遺物

が5～5.5尺と推定される。

遺物は土師器片47点（大部分がクロコロク使用のもの）、須恵器片12点が出土したがすべて細片で図化できたものはない。

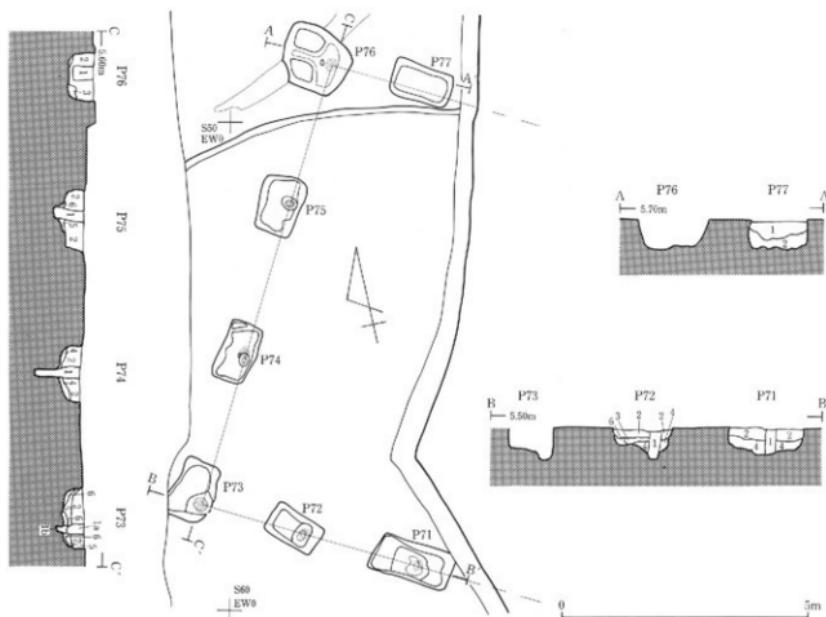
（2）5号掘立柱建物跡—SB 5—（第46・47図）

5区南部に位置している。前述したように段差の下側ではI層を除去した直後のVI a層上面で大部分の柱穴（P71～75）を確認していたが、段差の上側ではV a層除去後のV b層上面で残りの柱穴（P76～77）を確認した。

建物の東側が調査区外であるが、南北3間、東西2間以上の建物で、規模は南北9.35m（31尺）、東西4.5m以上、西側柱列の方向はN-38°Eである。柱間は南北が10尺・11尺・10尺で中央が広くなっている。東西は、南側の柱列で見るとP73-P72が7尺、P72-P71が8尺となっていて、南北方向と同じく中央が広くなっていると仮定す

ピット No.	垂 り 方	柱 孔		柱 頭跡	備 考
		大きさ	深さ		
6.3	11.3 × 7.0	48	15	52	IV層烟の小窓に切られる
6.4	11.0 × 6.5	46	?	?	IV層烟の小窓に切られる
6.5	7.5 × 6.5	50	15	50	IV層烟の小窓に切られる
6.6	10.0 × 5.5	46	15	46	IV層烟の小窓に切られる
6.7	12.0 × 6.5	46	?	?	IV層烟の小窓に切られる
6.8	(12.0) × 7.5	47	?	?	一部調査区外
6.9	12.5 × 7.0	42	15	42	IV層烟の小窓に切られる。SD17に切られる
7.0	9.0 × 6.0	52	15	52	IV層烟の小窓に切られる

表7 SB 4柱穴一覧表



層位	色 調	土 質	進入物・その他の
1 a	10Y R 4/2 淡黄褐色	粘土	柱頭跡、および含鉄白砂質シルト粒、淡褐色シルト質粘土少量、柔らかい
1 b	10Y R 4/2 淡黄褐色	粘土	柱頭跡下部、無色粘土ブロック少量、柔らかい
2	10Y R 4/3 あるいは黄褐色	砂質シルト	淡黃褐色粘土質シルトブロック多量、無色粘土大ブロック少量
3	10Y R 3/2 黑褐色	粘土	同じく淡褐色砂質シルトブロック少量
4	10Y R 4/3 あるいは黄褐色	粘土質シルト	淡黃褐色粘土ブロック・無色粘土大ブロック多量
5	10Y R 4/2 淡黄褐色	砂質シルト	無色粘土ブロック少量
6	10Y R 2/2 黒色	粘土	なし
	10Y R 4/2 淡黄褐色	砂質シルト	なし

第46図 SB5 平面・断面図

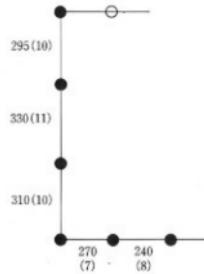
るとP72-P71が建物の中央となり、この場合の建物の東西は3間となる。

柱穴は表8通りで、堀り方の平面形は西北コーナーのものを除いてすべて長方形であり、しかも堀り方の主軸方向は西側のものが南北方向、北側と南側のものが東西方向というように建物の壁面と一致する方向になつてゐる。柱痕跡は径20~26cmで、北側のP77を除いたすべての柱穴で確認できた。このうちP72~75では柱痕跡の底面が堀り方よりも下がつていて、特にP74では堀り方底面から約50cmも低い。これは堀り方底面の基本層が水分を多く含む柔らかい粘土層(Vb層)であったために、柱にあたる部分が建物の重みで不等沈下したためと考えられる。なお、P71・74・76からは柱痕跡のすぐ脇の堀り方底面に偏平な河原石(10×20cm、15×15cm程度)が1個ずつ認められた。これらは礎板として使用するために設置されたものの柱の真下の位置から外れたために、柱が沈下した際に一緒に沈まらず、堀り方底面に取り残されたものである可能性がある。

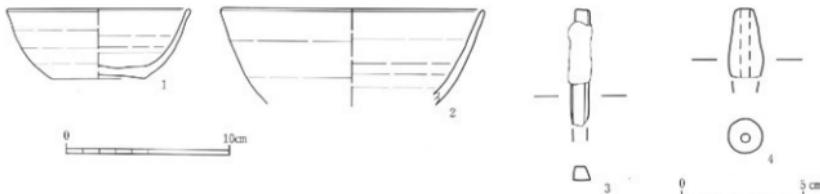
遺物は土師器片135点、須恵器片36点、土製品1点、金属製品1点と比較的多いが、柱穴のうちP74~77はS.I.1堆積土を掘り込んでいるので遺物の中には本米S.I.1に伴うものも含まれている可能性はある。須恵器环2点、土鉢1点、鉄釘1点が図化できた。

ピット No.	掘り方		柱痕跡		備考
	大きさ	深さ	径	深さ	
7.1	160×80	60	22	60	礎板石あり
7.2	110×65	60	26	60	
7.3	125×83	40	20	36	柱痕跡部分が15cm以下
7.4	120×72	46	24	95	柱痕跡部分が約50cm以下、礎板石あり、S.I.1を切る
7.5	125×82	66	21	66	S.I.1を切る
7.6	135×125	55	26	44	礎板石あり、S.I.1を切る
7.7	120×70	66	?	?	S.I.1を切る

表8 SB 5柱穴一覧表

第47図
SB5 模式図

SB 5 調査風景



No.	零直 段階	出土遺物 出土層位	種別	層	遺存度	法 径(cm)	高 さ(cm)	底 径(cm)	外側色 内側色	胎 土	焼成	外 面 内 面 調 整	特 徴
1	165-1	SB5-P71 堀り方	須恵器 環	2/5	(11.3) (5.6)	4.3	0.50	武色 灰色	良好 白粉微量	良好	クロロ調整、底部回転糸切り無調整	ロクロ調整	
2	165-2	SB5-P71 堀り方	須恵器	3/5	1/6	(16.0)	?	?	?	武色 灰色	良好 白粉微量	ロクロ調整	ロクロ調整
3	165-3	SB5-P71 堀り方	土製品・刃	両端欠損	(4.7)	?	0.7	0.6	—	—	—	—	—
4	165-4	SB5-P71 堀り方	土製品・土鍬	両端欠損	(2.8)	?	1.4	—	—	—	に付い青褐色	良好	良好

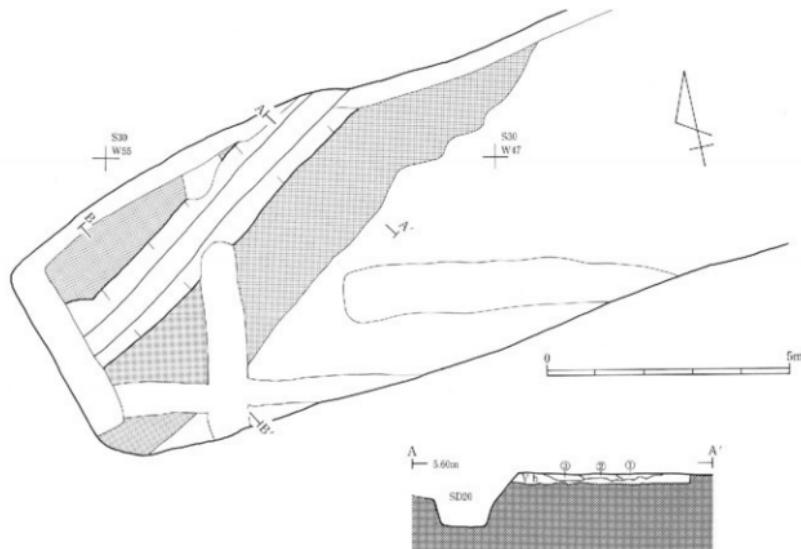
第48図 SB5 出土遺物

2. 溝跡

20号溝跡－S D20－（第49図）

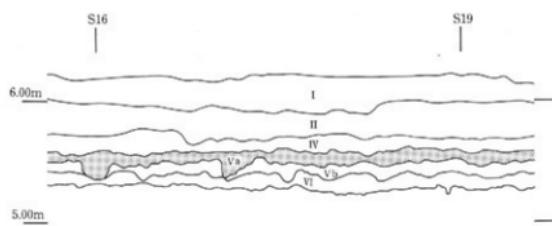
3区西端部に位置する。土手を伴っており、前述したように土手のプランはIV層上面で確認できたが、土手はV b層上面に構築されたものであり、溝も同様にV b層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは8m、幅は約1.3m、方向はN-54°-Eである。断面形は逆台形であるが「U」字形を呈する部分もあり、深さは約60cm、底面はやや凹凸があるがレベル差は認められなかった。堆積土は3層に分層できたが、最下層は粘土や砂の互層であることから水成堆積と考えられ、第2層はブロック土であることからある程度埋没した後に人為的に埋め戻されている可能性がある。



層位	色 調	土 質	混 入 物・そ の 他
1	10Y R 4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
2	10Y R 4/2 黄褐色	細砂	
	10Y R 4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	混合
3	10Y R 4/2 黄褐色	細砂	
	10Y R 4/1 棕褐色	砂土	
	10Y R 3/3 に近い黄褐色	砂質シルト	五層、部分的に混れる
①	10Y R 3/2 黑褐色	砂質シルト	土手の盛土、黒褐色粘土ブロック少量
②	10Y R 2/1 黑色	シルト質粘土	土手の盛土、に近い黄褐色粘土ブロック少量
③	10Y R 3/3 黑褐色	粘土質シルト	土手の盛土、黒褐色シルト質粘土ブロック少量、に近い黄褐色粘土ブロック少量

第49図 SD20 平面・断面図



第50図 V b 層上面小溝状遺構群平面・断面図

第4節 V b～X層上面（I～V a層除去後）の遺構と遺物

土手は主として黒褐色シルトの盛土で構築されており、溝の南北両側に認められた。南側は幅が1.5～2 mあるが、北側は大部分が調査区外のため幅は不明である。確認した際のV b層上面からの高さは約10cmであったが、その後誤って削平してしまったため断面図に盛土の高まりを示すことができなかつた。なお、平面図に盛土の上端を示していないのも同じ理由である。

溝の性格は堆積土の下層が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であると考えられる。このまま北東方向に延長すればSD 5に達するがSD 5とは幅が異なり、同一のものかどうかは断定はできない。なお、遺物は溝・土手ともに出土しなかつた。

3. 小溝状遺構群（第50図）

5区中央部のS 12～25付近、V a層除去後のV b層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、新旧関係を明らかにすることはできなかつた。

方向は、南北方向のものがややばらつきがあるが北から20～30°東に振れている。東西方向のものは1条のみが北から約40°西に振れているが、他の大部分は南北方向のものに直交して北から60°西に振れている。

溝の幅は20～40cmであるが大体は30cm前後、深さは1～5cmで平均は2cm程度とごく浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。長さについては、検出できた範囲が狭いことと、途切れている部分が本来の状況を示しているのかあるいは遺存状況が悪いためなのか判断できないため不明である。溝と溝との間隔は大体30cm前後である。

堆積土は基本層V a層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のV a層と溝の堆積土とに違いは認められなかつた。

これら的小溝状遺構群は、IV層やV a層上面で確認された小溝状遺構群（第2・3節参照）と同様に畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では歯は確認できなかつたものの基本層V a層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがV a層直下のV b層にまで達したと考えられる。なお小溝状遺構群が確認できなかつた地点においては、その場所が耕作域であったかどうか判断できなかったため、畑の範囲については不明である。また、遺物は出土しなかつた。

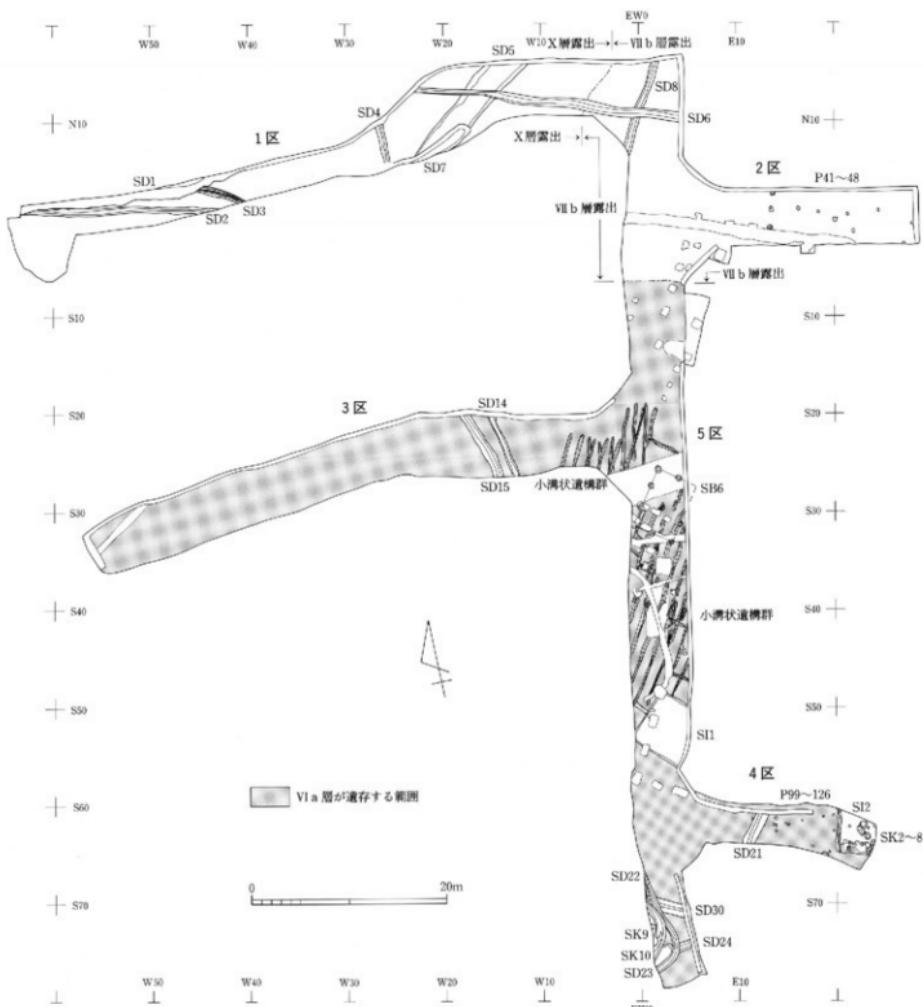


SD 20調査風景

第5節 VI a～X層上面（I～V b層除去後）

I. I～V b層除去後の状況（第51図）

I～III層を除去した段階すでにV b層よりも下の層（VI a・VII b・X層など）が露出していた箇所ではV b層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第51図 VI a～X層上面（I～V b層除去後）平面図

V b 層が遺存していたのは 3 区西半部（W24 以西）と東端部（W 8 以東）、5 区北部から中央部（N S 0 ～ S 50 付近）であったが、ここでは V b 層上面の精査終了後に同層を除去して VIa 層上面を検出した。VIa 層は V b 層下の全域に遺存しており、この段階においてやっと、I ～ III 層を除去した段階ですでに VIa 層が露出していた地点と同一面となった。VIa 層上面の遺構としては、5 区中央部において S B 6 の一部の柱穴が S D16 や S B 4 ～ P 68 の底面で確認されていたが、この残りの柱穴（P 87・88・93・101）がこの段階で確認できた。また、S 20 ～ 50

付近にかけて新たに小溝状遺構群を確認した他、S 50 付近の段差の下側でのみ確認されていた S I 1 の北側部分のプランもこの段階で確認できた。

なお、5 区 S 20 付近では小溝状遺構群を確認した際にこれらに切られる形で黒褐色の並行する 2 条の帯状のプランを確認している（写真 100・101 と挿図参照）が、断面観察の結果これは VIa 層上面の遺構ではなく、VIIa1 層水田跡に伴う S D28 の土手であることが判明した。

II. 遺構と遺物

1. 穴状住居跡

1 号住居跡 - S I 1 - (第 52 図)

5 区 S 50 付近に位置し、小溝状遺構群を切っている。北西側にカマドが有り、主軸方向は N-22' - W である。南東側が調査外となっているため規模は確定できないが、北東～南西が 6.0m、北西～南東も 5.6m 以上ある。

壁はやや傾きを持って立ち上がり、最も遺存状況がよい北東側で約 35cm の高さがある。

堆積土は褐色の砂質シルトを主としており、自然堆積と考えられる。

ピット No.	掘り方			柱痕跡	種 子
	大きさ	深さ	種		
1	横70～75	43	?	?	主柱穴
2	横 65	46	?	?	主柱穴
3	横63～70	50	20	50	主柱穴
4	?	55	?	?	主柱穴、調査区東側部で確認
5	横25～30	6	—	—	—
6	横20～25	8	—	—	カマド縁に位置する
7	横18～24	14	—	—	カマド縁に位置する
8	85 × 115	24	—	—	野戦穴

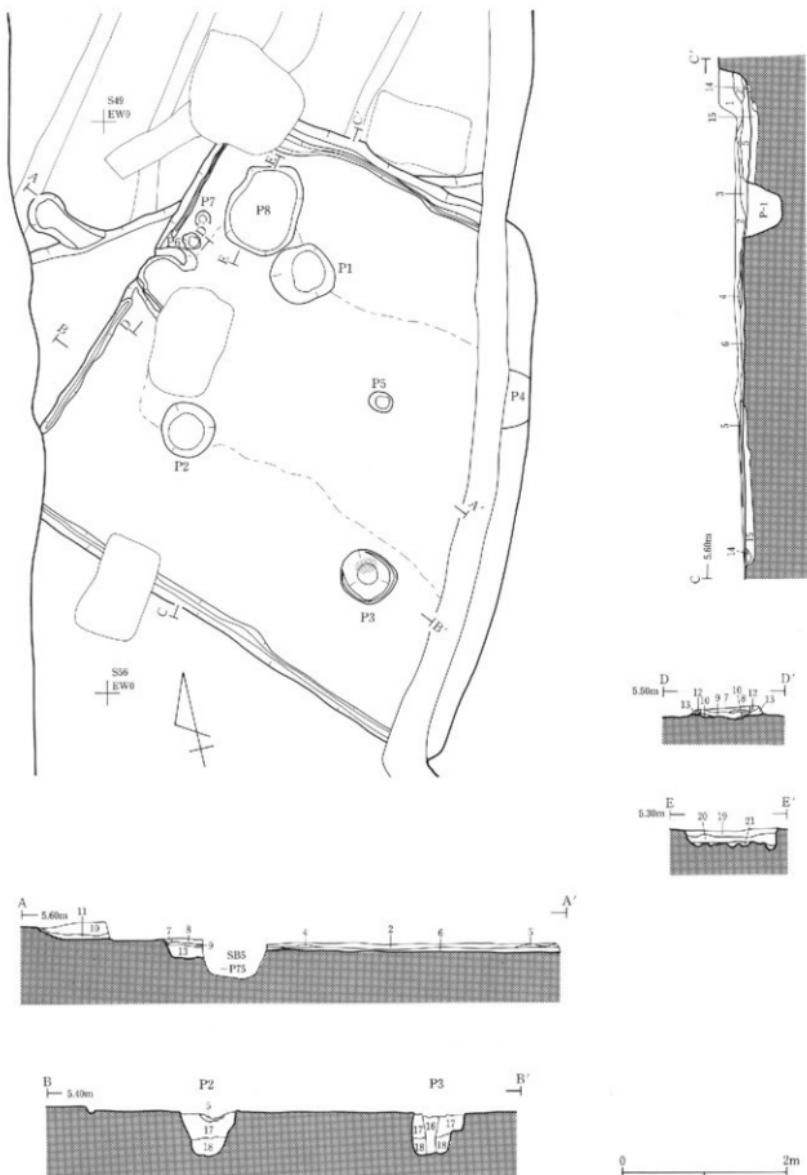


S I 1 床面の精査

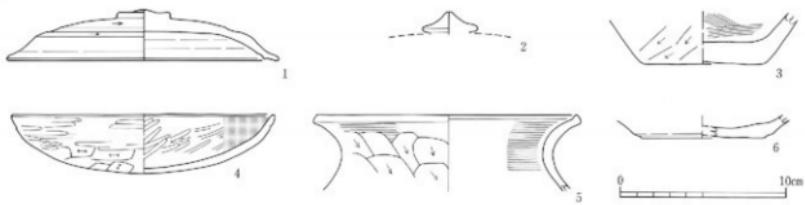
床面は堀り方を埋め戻して構築されているが堀り方の深さは一定ではなく、主柱穴（P 1 ～ 4）を結んだラインの外側が約 20cm と深くて、内側が 5 cm 前後と浅い。この堀り方の浅い部分（第 52 図一点鎖線の内側）

表 9 S I 1 ピット一覧表

S I 1				
部位	色	測	土 質	混入物・その他
1	10Y R 4/4 棕褐色	砂質シルト	褐灰色粘土ブロック少量	
2	10Y R 4/4 棕褐色	砂質シルト	褐灰色粘土ブロック多量	
3	10Y R 3/1 棕褐色	砂質シルト		
4	10Y R 5/1 棕褐色	砂質シルト	炭化物粒・透土粒少量	
5	10Y R 4/3 にい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土ブロック少量	
6	10Y R 4/4 棕褐色	粘土質シルト	粘床、褐灰色粘土ブロック少量、硬く縮まる	
7	10Y R 5/1 棕褐色	シルト質粘土	カマド下部土、焼土人ブロック少量	
8	10Y R 5/1 棕褐色	シルト質粘土	カマド下部土、灰青褐色粘土ブロック少量	
9	10Y R 4/1 棕褐色	粘土	カマド下部土、焼土人ブロック少量	
10	10Y R 5/1 棕褐色	シルト質粘土	地盤構造土、溝土少量	
11	2.5 Y 4/3 オリーブ褐色	細砂	褐色粘土上・褐色砂質シルトプロック・炭化物粒少量	
12	5 Y 4/3 にい黄褐色	シルト質粘土	カマド下部、熊土粒少量	
13	2.5 Y 4/3 オリーブ褐色	シルト質粘土	カマド下部、褐灰色粘土多量	
14	10Y R 4/2 棕褐色	砂質シルト	開削構造土	
15	10Y R 6/4 にい黄褐色	砂質シルト	住居構造土、黒褐色粘土小ブロック・灰青褐色粘少量	
16	10Y R 3/2 棕褐色	透土質シルト	柱孔跡	
17	10Y R 6/4 にい黄褐色	透土質シルト	柱穴跡り方、黒褐色粘土ブロック多量	
18	10Y R 6/1 棕褐色	透土	柱穴跡り方、黒褐色粘土ブロック多量	
19	10Y R 6/4 にい黄褐色	砂質シルト	透戻穴構造土	
20	10Y R 4/2 灰褐色	シルト質粘土	透戻穴構造土、黑色粘土ブロック少量	
21	10Y R 5/6 黑褐色	砂	透戻穴構造土	



第52図 SI1 平面・断面図



No.	写真 図版	出土層位 柱間	種別	器種 環	遺存度 环蓋	底 量(cm)			直径 口徑	外面部 内面部	胎 土	焼成	外 面 内 面 装 飾 内 面 装 飾 特 徴
						口 徑	底 径	面 面					
1	166-1	カマド・ 床面直上	須恵器	环	1/3	16.4	—	3.2	—	灰白色 灰白色	良好 白針棘縫	良好	ロクロ調整、丹舟部凹板ヘラケズリ ロクロ調整
2	166-2	カマド	須恵器	环	つまみ 部のみ	?	—	?	—	灰黑色 灰黑色	良好 白針棘縫	良好	ロクロ調整 ロクロ調整
3	166-3	カマド	土師器	甕	返部 1/3	?	(7.0)	?	—	赤褐色 赤褐色 赤褐色～明赤褐色	やや不良 白針棘縫	良好	体部手持ヘラケズリ、底部木桶痕 ナメ
4	166-4	S I 1 — P 4	土師器	环	1/3	(16.0)	—	3.7	—	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	良好 白針棘縫	良好	口縁部ココナギ、体部～底部手持ヘラケズリ —体部周辺ヘラミガキ ヘラミガキ、黒色記憶
5	166-5	床面直上	土師器	甕	口縁部 1/6	(15.8)	?	?	—	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良 白針棘縫	良好	口縁部ココナギ、頸部～体部手持ヘラケズリ 口縁部ココナギ、体部崩滅（ナメ？）
6	166-6	掘り方	須恵器	环	底部 1/3	?	(7.4)	?	?	灰色 灰白色	良好 白针棘縫	良好	ロクロ調整、底部凹板ヘラケズリ ロクロ調整

第53図 SII 出土遺物

は褐色の粘土質シルトで貼床されていて硬く締まっている。床面はわずかに凹凸があり、レベルは北東側がやや低くなっている。壁際には幅10～20cm、深さ約5cmの周溝が巡っていた。なお、掘り方底面には幅約15cm、奥行約10cmの半月形の工具痕が多数確認された（写真91～93）。

ピットは8基検出した。詳細は表9の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがP1～4で住居プランの対角線上の位置にある。柱間隔については、柱痕跡が確認されたのがP3（径約10cm）のみであるので詳細はよく判らないが、柱穴の心々でみるとP1～4、P2～3、P3～4が2.8mと同じで、カマド側のP1～P2が2.5mでやや狭い。なお他のピットのうちP8はカマド脇の貯蔵穴と考えられる。

カマドは大部分が崩落していて、両袖の下部と煙道先端部が遺存するのみであった。袖は粘土のみで構築されており、特に芯材等は認められなかった。なお、カマド奥壁から煙道先端部までの距離は1.5mである。

遺物は堆積土や掘り方から土師器片38点、須恵器片16点などが出土したが、このうち須恵器は环蓋2点と环1点、土師器は非ロクロ調整の丸底环1点と甕2点が固化できた（第53図）。

2. 挖立柱建物跡

6号掘立柱建物跡－S B 6－（第54・55図）

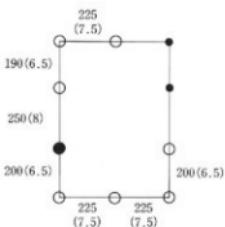
5区中央部に位置している。柱穴は前述したようにS D16底面で3基（P94～96）、S B 4～P 68底面で1基（P92）、VIa層上面で残りの4基（P87・88・93・101）を確認した。ただし、VIa層上面で確認した柱穴については他の遺構との切り合い等のためプランの確定が困難であり、このため写真撮影や図面作成はプランを確定しやすいVIa2層水田面にて実施している。

建物は北東側の柱穴2基が調査区外のため未検出であるが、南北3間、東西2間の南北棟と考えられる。規模は南北6.40m(21尺)、東西4.50m(15尺)で、方向は西側柱列で見るとN-37°-Eである。

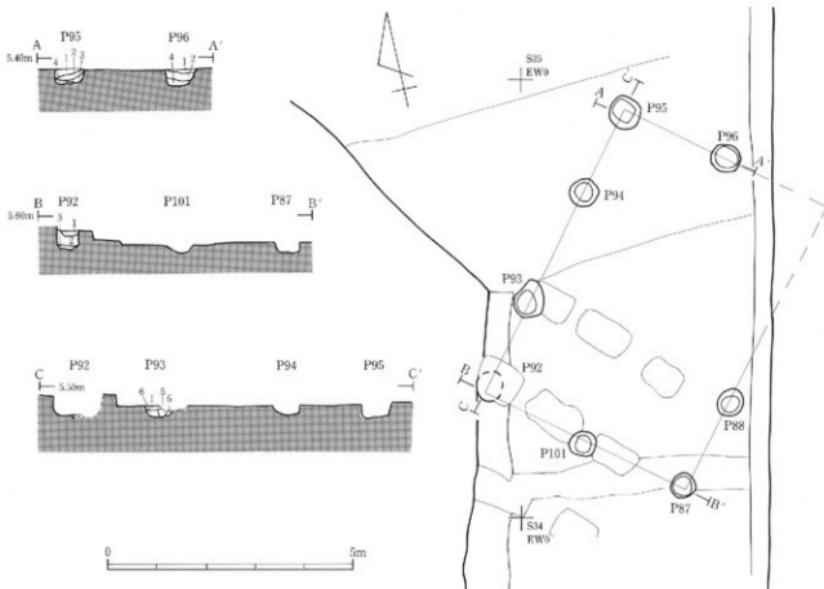
柱穴は表10の通りで円形の掘り方を持っている。柱痕跡はP93で確認できだが、径15cm程度である。柱間は南北方向のP95-P94-P93-P92が6.5尺・8尺・6.5尺で、中央部がやや広くなっている。東西は7.5尺である。なお遺物は出土しなかった。

プロット No.	掘り方	柱痕跡			備考
		大きさ	深さ	径	
8.8	径 55	24	?	?	
8.7	径 59	17	?	?	S D12に切られる
1.0.1	径 59	15	?	?	P66・67に切られる
9.2	?	38	?	?	P68に切られる
9.3	径 60	21	15	21	P63に切られる
9.4	徑 55	35	?	?	S D16に切られる
9.5	径 65	25	?	?	S D16に切られる
9.6	径 60	40	?	?	S D16に切られる

表10 SB 6 柱穴一覧表



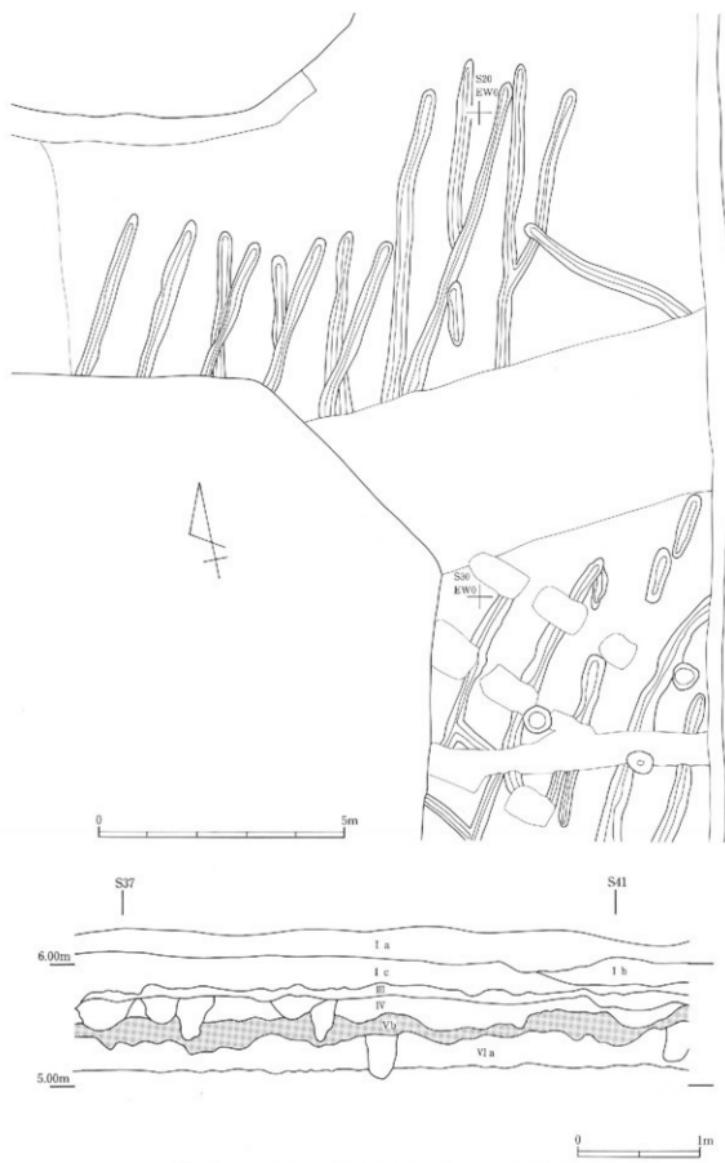
第54図 SB6 模式図



第55図 SB6 平面・断面図

層位	色調	土質	滲入物・その他
1	10Y R5/3 に近い黄褐色	砂質シルト	に近い黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量
2	10Y R3/3 に近い黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック多量
3	10Y R2/1 黒色	粘土	に近い黄褐色粘土ブロック少量
4	10Y R4/2 深黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック多量
5	10Y R5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	柱痕跡、黒色粘土ブロック多量
6	10Y R5/4 に近い黄褐色	細砂	黒色粘土ブロック少量

第5節 VIa～X層上面 (I～Vb層除去後)



第56図 VIa層上面小溝状遺構群平面 (S19～35)・断面図

3. 小溝状遺構群 (第56・57図)

5区中央部のS 20~50付近、V b層除去後のVI a層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、南北方向のものが多く東西方向のものは少ない。なお、すべての新旧関係を明らかにすることはできなかった。

南北方向の小溝の方向は、N25付近では北から約15°東に振れるものと、約30°東に振れるものの2種類あり、後者が前者を切っている。これより南部では大部分が30°~35°東に振れるものである。なお、東西方向のものは確認した数が少ないため明確ではないが、大体北から55°~60°西に振れている。

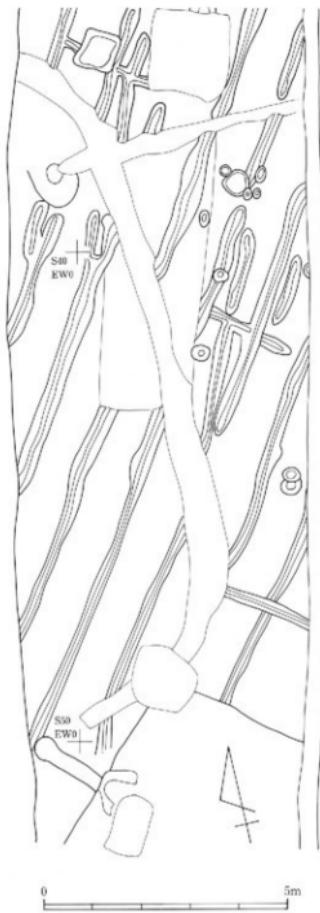
溝の幅は20~40cmであるが大体は30cm前後、深さは5~10cm程度で浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。長さは検出できた範囲が狭いため不明である。溝と溝との間隔は同じ方向のもの同士でみると70~120cmで、90cm前後のものが最も多い。

堆積土は基本層V b層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のV b層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。

これら的小溝状遺構群は、IV~V b層上面で確認された小溝状遺構群と同様に、畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では畠は確認できなかったものの基本層V b層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがV b層直下のVI a層にまで達したと考えられる。なお小溝状遺構群が確認できなかった地点においては、その場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。また、遺物は出土しなかった。



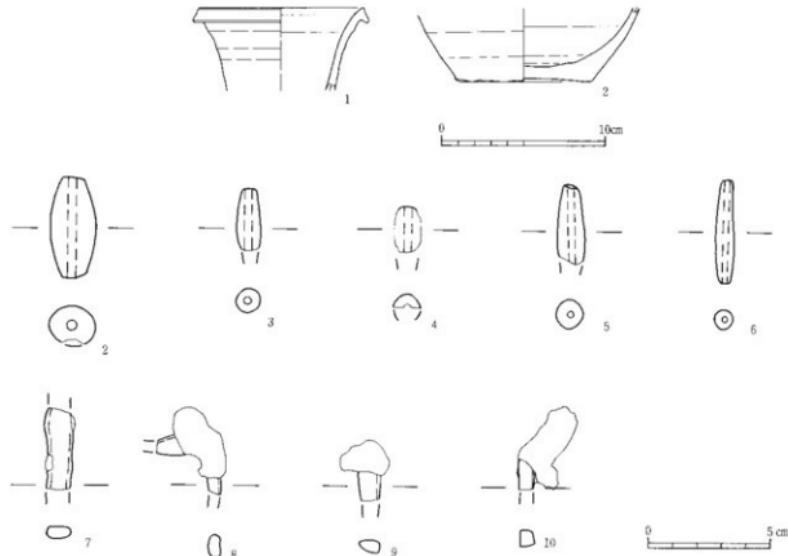
5区東壁断面



第57図 VI a層上面小溝状遺構群平面図
(S35~50)

第6節 I～VI層・その他の出土遺物

前節まで記載した遺物の他に、基本層I～VI層中から出土した遺物や、壁面清掃中などに出土したため出土層位が不明な遺物がある。これらの遺物のなかではI・II層からの出土破片数が2000点を越えていて圧倒的に多いが(表19)、これらのうちの大部分の遺物は耕作によって下層から巻き上げられ、細かく碎かれてしまったものである。このため図化できたものは少なく、須恵器1点、土師器1点、土製品(土鉢)5点、金銅製品(鉄釘)4点のみである(第58図)。



No.	写真回数	出土層位	種別	器種	遺存度	直 番(cm)	直径	外側色調 内側色調	土	焼成	外 内 面 調 整	特徴
1	167-1	2区Ⅰ層	酒器類	長瓶	口縁部 底	(5.0)	?	?	—	灰 灰	ロクロ調整	良
2	167-2	2区Ⅰ層	土師器	壺	体部～ 底部	?	8.4	?	—	白 灰	ロクロ調整	良
3	167-3	2区	II層	土製品	土壷	口沿部形	4.2	灰	1.9	—	—	良好
4	167-4	2区	II層	土製品	土壷	端部欠損	(2.6)	灰	1.0	—	—	良好
5	167-5	9区	層不明	土製品	土壷	端部欠損	(1.9)	灰	1.1	—	—	良好
6	167-6	5区	層不明	土製品	土壷	口沿部形	(3.3)	灰	1.1	—	—	良好
7	167-7	5区	層不明	土製品	土壷	口沿部形	4.2	灰	0.8	—	—	良好
8	167-8	5区	IV層	鉄製品	釘	圓頭欠損	(3.4)	暗	1.3	0.5	—	—
9	167-9	5区	IV層	鉄製品	釘	圓頭欠損	(3.4)	暗	0.9	0.5	—	—
10	167-10	5区	IV層	鉄製品	釘	圓頭欠損	(2.5)	暗	0.9	0.5	—	—
11	167-11	5区	IV層	鉄製品	釘	圓頭欠損	(3.8)	暗	0.7	0.7	—	—

第58図 I～IV層・その他の出土遺物

第7節 VII a1層水田跡

VII a1層上面ではVII a1層水田跡を検出した。

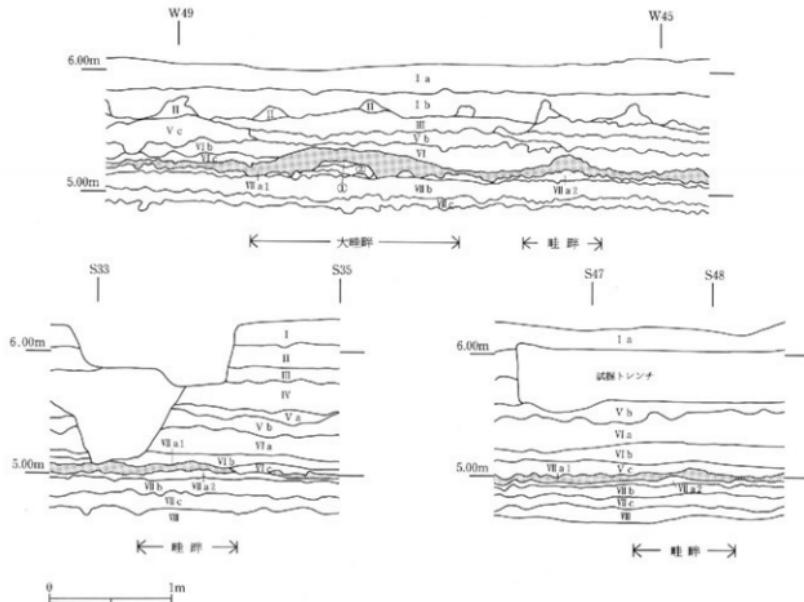
I. 水田の構成と概要

1. 水田の構成

大畦畔1条と多数の小畦畔、土手を伴う水路2条によって小区画の水田が構成される。水路2条は東西方向にほぼ平行して走り、それと直交する南北方向の大畦畔とによって大区画が造られ、大区画を分割して中区画→小区画と細分していくことが想定できる。なお、水路はその他にも2条あるが他の遺構よりもやや新しいと考えられる。

2. 検出・遺存状況

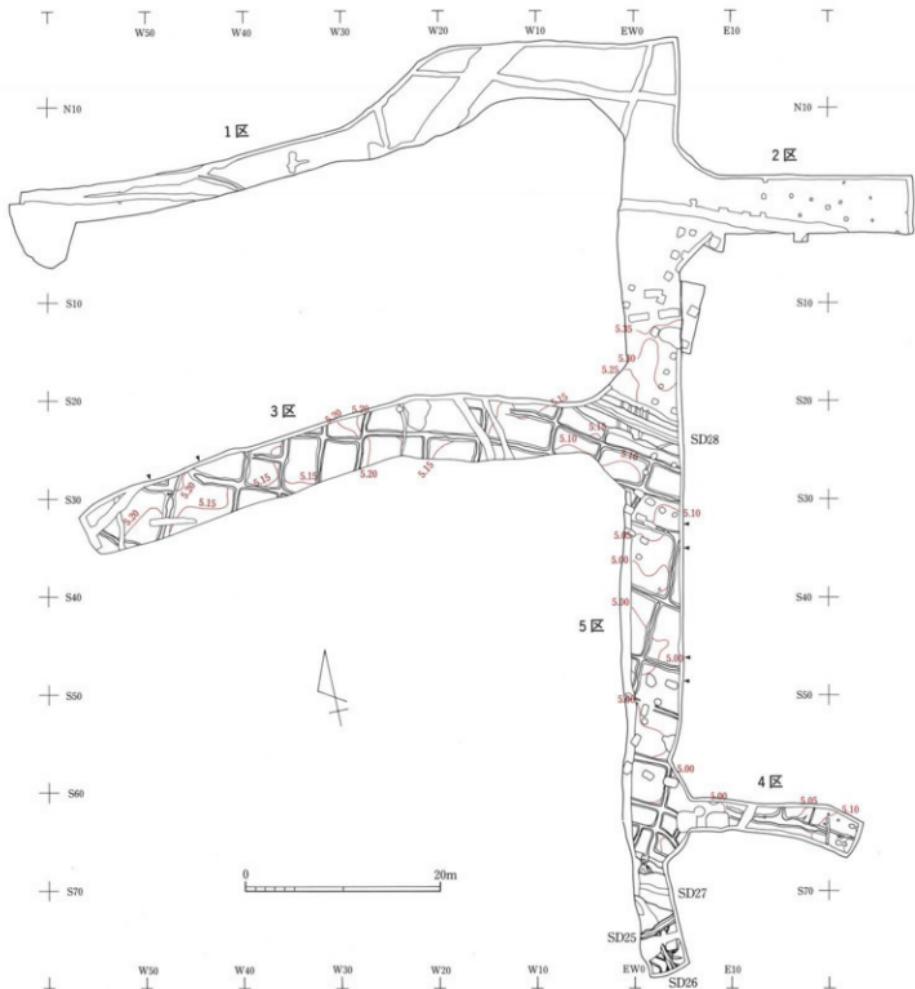
調査開始直後から下層の状況を探るために調査区の周囲に設けた側溝の壁面観察を行っていたが、5区南部において厚い砂層(VI層)の下に暗褐色や黒褐色の粘土層が存在し、この粘土層が耕作土らしいこと、そして畦畔状に盛り上がる部分があることを確認した。このため各区においてこの粘土層の分布を確定するとともに断面観察を行った結果、5区中央部から南と3区・4区において水田跡が遺存している可能性が高いと考えられた。念のため数地点においてプランツ・オパール分析を行った結果イネのプランツ・オパールが検出され、水田跡の存在がほぼ確実となった。このためVI層上面の調査終了後は一度VII層上面を検出せずに、畦畔の確認作業を行いながら徐々にVI層を除去していった。



第59図 VII a1層水田跡断面図（位置は平面図1に表示）

第7節 VIIa1層水田跡

畦畔はVI層を削り込んでいく途中で確認したが、小畦畔はほとんどがVIc層中、大畦畔はさらに上部のVIb層中で確認できた。なお前節で述べたように、SD28の土手はVIa層上面の段階すでに確認している。畦畔の遺存状況は直上のVI層が自然堆積層であるために良好であったが、1区と2区および5区のNS0以北ではすでに層上面が攪拌・削平されていたため畦畔は確認できず、NS0とSD28の間でも確認できなかった。



第60図 VIIa1層水田跡平面図（1）

3. 耕作土

耕作土は基本層VII a1層で、暗褐色の粘土である。厚さは2~10cmで一定せず、平均6cm前後である。下面是凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くはなく、大体直下のVII a2層中で留まっている。

4. 水田域

畦畔が検出できた5区中央部から南の部分については、調査区の東側・南側・西側にまで水田域が広がっていることは確実であるが、畦畔が検出できなかった5区中央部から北の区域については耕作域・非耕作域の区別はできない。

II. 遺構の状況

1. 畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、No.1~41まで検出した。

規模が大きいのはNo.1・19・20・37・38であるが、この他にもNo.27・34・39・40などや大きいものがある。これらのうち、大畦畔と考えられるものは3区の西端で検出し南北方向にのびるNo.1で、上端幅・下端幅・高さ共に他の畦畔と比べて明らかに大きく約2倍ある。なお、No.19・20はSD28の土手、No.37・38はSD27の土手であり、通常の大畦畔とは性格が異なる。また、No.27については検出した長さが短いので大畦畔であるのかどうか断定できず、No.34・39・40については遺存状況が悪く、畦畔が崩れているために幅が広がって見えるのではないかと考えられる。

No.	方 向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	N-23°-E	(6.5)	30 ~ 96	95 ~ 135	3 ~ 14	人跡跡。VII b層水田の大畦畔No.1・VII a2層水田の段落No.1を踏襲
2	N-19°-E	(2.3)	23 ~ 36	54 ~ 62	5 ~ 10	
3	N-21°-E	(3.1)	21 ~ 35	58 ~ 75	3 ~ 8	
4	N-17°-E	(6.1)	20 ~ 56	52 ~ 85	1 ~ 4	
5	N-17°-E	(6.0)	19 ~ 56	44 ~ 72	2 ~ 7	
6	N-22°-E	(6.0)	30 ~ 45	55 ~ 67	2 ~ 5	VII a2層水田の段落No.7を踏襲
7	N-15°-E	(2.1)	38 ~ 45	63 ~ 72	1 ~ 4	
8	N-18°-E	(3.5)	27 ~ 46	60 ~ 71	1 ~ 7	
9	N-23-34°-E	(5.0)	24 ~ 37	50 ~ 60	1 ~ 6	やや屈曲する
10	N-32°-E	(3.2)	21 ~ 34	40 ~ 62	3 ~ 8	
11	N-34-47°-E	(5.0)	23 ~ 38	50 ~ 81	1 ~ 5	やや屈曲する。VII a2層水田の畦畔No.8を一部踏襲
12	N-21°-E	(6.1)	20 ~ 48	56 ~ 70	1 ~ 5	
13	N-27°-E	(9.8)	16 ~ 42	52 ~ 78	1 ~ 7	VII a2層水田の畦畔No.10を一部踏襲
14	N-33°-E	(1.7)	23 ~ 33	43 ~ 58	1 ~ 3	
15	N-20-28°-E	8.8	22 ~ 67	54 ~ 85	2 ~ 7	やや屈曲する
16	N-47°-E	(0.9)	23 ~ 31	47 ~ 51	1 ~ 4	
17	N-26°-E	(0.9)	18 ~ 52	59 ~ 109	5 ~ 6	
18	N-33°-E	(1.5)	48	68	1	
19	N-55°-W	(8.8)	57 ~ 76	150 ~ 186	10 ~ 15	SD28北側の土手。VII b層水田の土手No.21・VII a2層水田の土手No.12を踏襲
20	N-55°-W	(11.1)	51 ~ 110	146 ~ 189	5 ~ 23	SD28南側の土手。VII b層水田の土手No.22・VII a2層水田の土手No.13を踏襲
21	N-54-67°-W	(18.3)	14 ~ 47	43 ~ 81	1 ~ 10	やや屈曲する。VII a2層水田の畦畔No.15を一部踏襲
22	N-62°-W	(7.1)	11 ~ 49	55 ~ 71	1 ~ 5	
23	N-67-77°-W	19.2	28 ~ 45	60 ~ 99	1 ~ 4	やや屈曲する。VII a2層水田の畦畔No.14を一部踏襲
24	N-77°-W	(5.8)	25 ~ 42	46 ~ 79	3 ~ 9	
25	N-75°-W	3.1	20 ~ 59	42 ~ 73	1 ~ 4	
26	N-65°-W	(19.6)	16 ~ 70	58 ~ 117	3 ~ 10	
27	N-69°-W	(2.5)	48 ~ 65	89 ~ 109	5 ~ 9	
28	N-51°-W	(3.4)	25 ~ 37	53 ~ 70	2 ~ 7	
29	N-58°-W	(4.7)	15 ~ 54	54 ~ 99	1 ~ 4	VII b層水田の畦畔No.30を踏襲
30	N-57°-W	(5.3)	16 ~ 48	62 ~ 76	2 ~ 7	VII b層水田の畦畔No.32を踏襲
31	N-62°-W	(5.2)	14 ~ 38	50 ~ 71	4 ~ 7	VII a2層水田の畦畔No.22を一部踏襲
32	N-58°-W	(4.8)	36 ~ 38	47 ~ 52	1 ~ 6	
33	N-63°-W	(3.5)	33 ~ 57	67 ~ 88	6 ~ 9	
34	N-63-76°-W	(13.3)	33 ~ 71	85 ~ 106	1 ~ 7	やや屈曲する。VII b層水田の畦畔No.37を踏襲
35	N-55-63°-W	(9.0)	32 ~ 47	57 ~ 76	1 ~ 6	やや屈曲する。VII b層水田の畦畔No.38を踏襲
36	N-15-66°-W	(5.2)	21 ~ 49	36 ~ 64	1 ~ 6	屈曲する
37	N-58°-W	(3.2)	36 ~ 92	118 ~ 146	11 ~ 14	SD27の南側土手。VII b層水田の土手No.39を踏襲
38	N-57°-W	(4.3)	149 ~ 160	160	2	SD27の南側土手。部分的に複存。VII b層水田の土手No.40を踏襲
39	N-27°-E	(4.4)	57 ~ 100	80 ~ 165	1 ~ 4	部分的に複存
40	N-51°-W	(1.7)	20	96	1 ~ 2	
41	N-72°-W	(1.2)	50	85	4	

表11 VII a1層水田跡畦畔計測表

水路や大畦畔は検出できた距離が短いために正確な方向や位置関係が不明であるが、S D27とS D28はほぼ平行しており、大畦畔No 1はこれに大体直交（約80°振れる）した関係にあるので、これらは他の小畦畔の基軸となっていると考えられる。

小畦畔は上記のものを除くと東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅34cm、下端幅64cm、高さ4cm程度である。方向はNo21・22～24、また離れてはいるがNo26と30の畦畔の配置をみると直線ではなく南側が開いた緩やかな弧状をしている。これは、5区の西側に南方から浅い谷があり込んでいるためにその影響を受けているためと考えられる（微地形については後述する）。

2. 水田区画

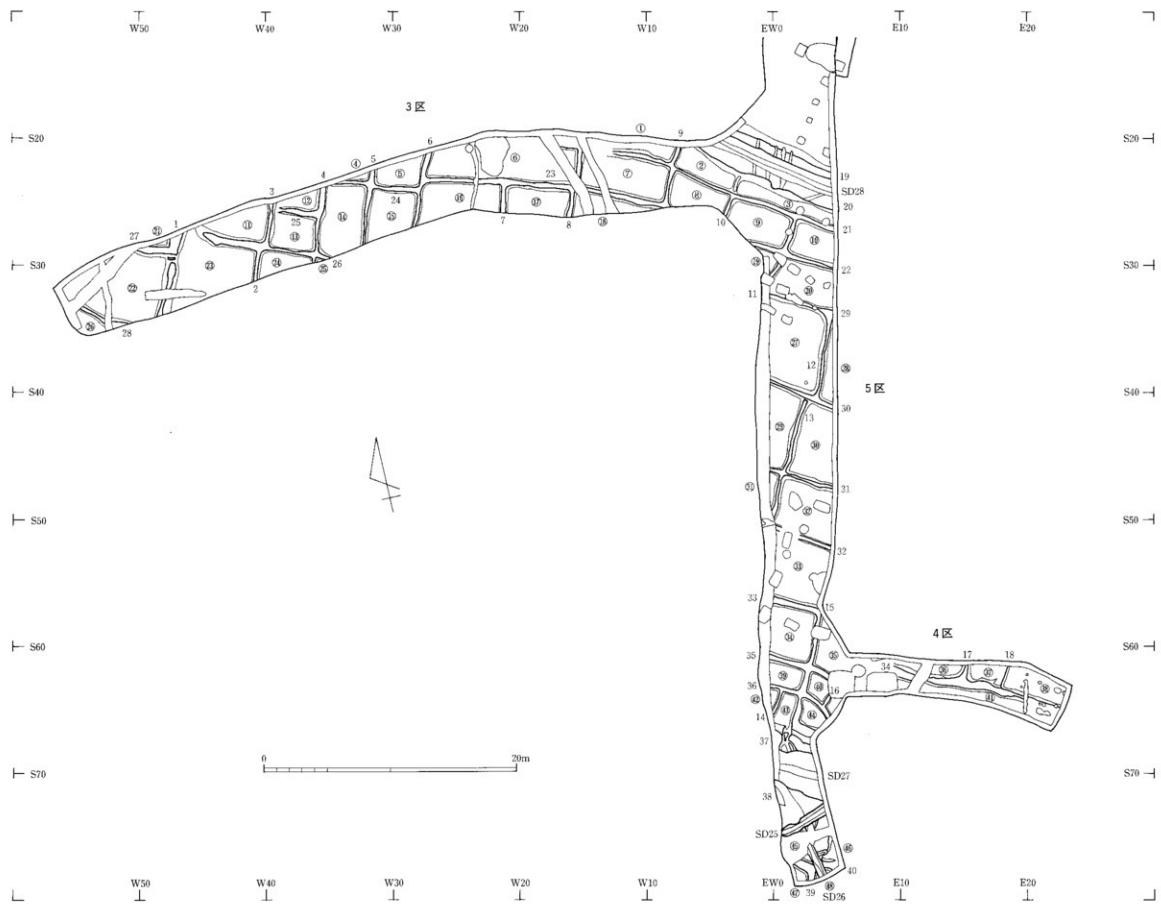
水田区画は大畦畔と水路によって区画された大区画と小畦畔によって区画された小区画がある。大区画は全体が明らかになったものはないが、南北約40m、東西75m以上の長方形の部分が確認されている。なお、S D28の北側も耕作地であった可能性が高いが、この部分には区画Noは付けなかった。

小区画は方形を基調としており、No⑦～⑨や⑩のように短辺2.5～3m×長辺4.5～6.5m程で面積が11～17m²前後の区画と、全体の規模は不明ながらも⑪～⑬、⑭～⑯のように短辺が5.5m前後あって面積が30m²程度と推定されるやや大きめの区画が多い。ただしS D28の南側には②のように1.5×4.7mの細長い区画、あるいは③のように短

No	標高(m)	比高差(m)	傾斜方向	東辺(m)	西辺(m)	南北(m)	北辺(m)	面積(m ²)	推定規様	備考
1	5.14～5.20	(6)	西 → 東	(1.2)	?	(6.5)	?	(5.1)	?	
2	5.15～5.19	(4)	ほぼ水平	1.1	(1.4)	4.3	(4.1)	(7.3)	1.5 × 4.7	台形
3	5.16～5.18	(2)	ほぼ水平	?	1.0	(8.0)	(7.5)	(7.1)	0.8 × ?	
4	5.15～5.20	(5)	?	(0.5)	?	(1.7)	?	(0.5)	?	部分的に検出
5	5.16～5.22	(6)	北 → 南	(2.4)	(1.1)	3.1	?	(6.2)	3.1 × ?	
6	5.16～5.20	(4)	ほぼ水平	2.5	(2.0)	11.3	?	(22.9)	2.5 × 11.3	
7	5.11～5.17	6	北西・南東	2.6	2.6	5.6	6.6	17.2	2.6 × 6.6	
8	5.09～5.14	(5)	北 → 南	(1.5)	2.5	?	4.5	(8.1)	2.5 × 4.5	
9	5.09～5.14	(5)	北 → 南	2.2	(1.5)	?	4.5	(9.9)	2.4 × 4.5	
10	5.11～5.14	(3)	ほぼ水平	?	2.2	(3.5)	(2.8)	(7.5)	2.2 × ?	
11	5.16～5.19	(3)	ほぼ水平	(2.8)	?	(5.0)	?	(8.6)	?	
12	5.16～5.19	(5)	西 → 東	(1.4)	(0.4)	3.1	?	(2.9)	3.1 × ?	
13	5.16～5.18	(4)	→ 東	2.3	2.5	8.4	5.1	12.2	2.5 × 5.4	
14	5.12～5.18	(6)	北 → 南	(1.7)	5.3	(0.9)	2.9	(16.1)	3.0 × 5.5	
15	5.15～5.20	(5)	ほぼ水平	(2.7)	(4.4)	?	3.0	(16.9)	3.0 × ?	
16	5.15～5.23	(8)	北 → 南	(2.2)	(3.4)	?	5.6	(14.3)	6.0 × ?	
17	5.13～5.18	(5)	北西・南東	(2.1)	?	?	4.6	(9.0)	4.5 × ?	
18	5.12～5.15	(3)	ほぼ水平	?	(2.0)	?	(6.3)	(6.5)	?	
19	5.12	—	(1)	?	?	?	(1.4)	(1.7)	?	部分的に検出
20	5.06～5.12	(6)	北西・南東	?	(2.6)	(5.2)	(3.8)	(12.2)	2.6 × ?	
21	5.25～5.27	(2)	?	(0.3)	?	(1.0)	?	(0.2)	?	部分的に検出
22	5.17～5.24	(7)	北西・南東	(4.8)	?	(4.0)	(2.8)	(30.3)	5.3 × ?	
23	5.13～5.26	(7)	北西・南東	(2.4)	(6.6)	?	(5.2)	(29.2)	5.7 × ?	
24	5.10～5.15	(5)	北 → 南	(0.3)	(2.2)	?	3.7	(4.8)	3.7 × ?	
25	5.14～5.16	(2)	?	?	(0.2)	?	(0.5)	(0.1)	?	部分的に検出
26	5.15～5.21	(6)	ほぼ水平	7	7	?	(2.5)	(2.8)	?	部分的に検出
27	4.99～5.06	(7)	北 → 南	5.9	2	(3.7)	(4.3)	(24.3)	5.9 × ?	?
28	5.01～5.05	(4)	北 → 向	?	(5.3)	(1.1)	?	(2.7)	5.9 × ?	部分的に検出
29	4.97～5.02	(5)	北東・南西	5.7	?	(0.9)	(2.7)	(16.6)	5.7 × ?	
30	4.98～5.03	(5)	北東・南西	?	5.6	(3.6)	(1.9)	(15.4)	5.6 × ?	
31	4.99～5.03	(4)	?	(2.5)	?	?	(0.6)	(1.1)	?	部分的に検出
32	4.99～5.02	(3)	ほぼ水平	?	3.5	(4.8)	(3.8)	(15.7)	3.5 × ?	
33	4.96～5.02	(6)	北東・南西	?	?	(3.4)	(4.6)	(18.8)	4.5 × ?	
34	5.00～5.03	(3)	ほぼ水平	3.6	?	(3.1)	(3.1)	(12.9)	3.6 × ?	
35	4.97～5.02	(5)	北 → 南	?	(3.8)	(1.4)	?	(4.8)	?	擾乱が多い
36	5.02～5.08	(6)	?	(0.7)	?	(5.2)	?	(3.5)	?	部分的に検出
37	5.04～5.06	(2)	?	(0.5)	(1.1)	1.6	?	(2.1)	?	部分的に検出
38	5.06～5.14	(8)	東 → 西	?	(1.6)	(4.8)	?	(8.4)	?	
39	4.98～5.01	(3)	ほぼ水平	1.6	?	(2.1)	(2.8)	(4.2)	1.6 × ?	
40	4.95～4.98	(3)	ほぼ水平	1.0以上	1.4	1.4	(1.3)	(2.6)	1.4 × 1.4	並んだ台形
41	5.06～5.17	(11)	東 → 西	?	?	?	(10.1)	(9.0)	?	分割される可能性あり
42	4.98～4.99	(1)	?	(1.4)	?	?	(0.6)	(0.6)	?	部分的に検出
43	4.95～4.98	(3)	ほぼ水平	2.5	(2.3)	(1.3)	(1.0)	(2.6)	1.2 × 2.4	
44	4.94～4.97	(3)	ほぼ水平	?	1.5	(1.5)	(2.4)	(2.5)	1.6 × ?	並んだ台形?
45	5.02～5.03	(1)	?	(0.6)	?	(1.2)	(2.1)	(8.6)	?	部分的に検出
46	4.99～5.01	(2)	?	?	(1.7)	(1.3)	?	(0.9)	?	部分的に検出
47	5.03～5.04	(1)	?	(0.5)	?	?	(1.1)	(9.7)	?	部分的に検出
48	5.00～5.02	(2)	?	?	(0.7)	?	(0.9)	(0.4)	?	部分的に検出

表12 VII a 1層水田跡水田区画計測表

()は現存幅



第61図 VII a1層水田跡平面図(2)

辺0.8mで長辺が8m以上ある極端に細長い区画が認められ、またSD27の北側には⑩・⑪・⑫のように1.4×1.4mあるいは1.2×2.4mで面積が2～3m²と矮小な区画が集中して認められるなど、水路に近接して極端に変形したり小さな区画が集中する傾向がある。

また、畦畔のなかにはNo6・9・26・30・34のように他の畦畔を分断するものがある。調査区が限定されるために断定はできないが、これらが大畦畔以外の基軸の畦畔であると想定すれば、大区画の中で中区画を形成していると考えられる。さらに大畦畔1～畦畔6～畦畔9の間隔はそれぞれ18mと19mでほぼ同じであることから中区画は一定の規格に沿って造られている可能性がある。なお、畦畔23のように他の畦畔を分断はするものの、逆に他の畦畔によって分断される畦畔については基軸の畦畔であるかどうか判断できない。

3. 水田面の標高と傾斜

調査区の全体的な地形は北から南へ傾斜しているが、細かく見ると3区が北西から南東方向、5区が北東から南西方向へ傾斜しており、5区南部の西壁寄りとSD27の北側には最も標高の低い(5.0m以下)部分が数カ所で認められる。これらのことから、5区の西側から調査区外にかけて南方から浅い谷が入り込んでいることが予想され、調査区はちょうどこの谷の北側から東側を巡るように位置していると考えられる。

水田面の標高はSD28から北の部分を除くと4.94～5.27mである。勾配は前述したように南から入り込む谷があるために調査区全体を通しては測定できないが、部分的に見ると3区西部の水田区画①～②の北西～南東方向が18cm/10m、SD28の南側の②～⑧の南北方向が25cm/10m、5区の⑨～⑩の北東～南西方向が12cm/10mである。調査区が谷の周囲に位置するためか傾斜が比較的きつい部分が多く、特にSD28の近くが顕著である。なお、勾配や傾斜の方向は想定した中区画を越えて連続していると考えられることから、中区画は微地形とは特に関係なく設置されていると考えられる。

小区画内の傾斜も全体的な傾斜とほぼ一致するが、SD27の周辺は比較的平坦である。区内の比高差は、全体を検出できた区画が⑦と⑬のみで少ないがそれぞれ6cmと4cmで、その他は不明であるが8cm以上の区画もある。

4. 水口

畦畔を切って隣接する水田区画を結ぶ溝状の窪みを水口とした。明らかに水口と考えられるのは2ヶ所で、大畦畔1、畦畔37(SD27の北側土手)に設けられている。

大畦畔1に付けられた水口は大畦畔の東西にある区画②と③をつないでいる。上端幅約60cm、下端幅5～10cmの溝状で、底面は田面から4～5cm高くなっている。なお、畦畔上面からの深さは西端で約5cm、東端で約9cmで、用水が東に向かって流れているようになっている。

畦畔37に付けられた水口は区画⑬からSD27への排水用と考えられる。北半部は上端幅が45～75cm、下端幅10～35cmの細い溝状を呈しているが南側は幅150cm程に大きく開いている。北端部の底面は43の田面から約6cm高くなっていてそこから南側に向かって徐々に低くなっているが、中央部では段差がついていて南端部では北端部に比べて約20cm低くなっている。

この他に畦畔25と26の西端部も畦畔が途切れている。畦畔26の場合は一部が側溝のために不明となっているが、両者ともに畦畔端部が徐々に低くなって田面と同じ高さとなっている。水口の可能性はあるが、他にこのような形態のものは認められないので断定はできない。なお、この畦畔25と26のものが水口ではないとすると確認できた水口は大畦畔と水路の土手に設けられたものだけ



VII-a 1層水田跡検出作業

となる。

5. 溝跡

VII a1 層上面では溝跡を 4 条検出した。

(1) 25号溝跡－S D25－（第62図）

5 区南部に位置し、畦畔38（S D27南側の土手）や39を切っている。S D27とは調査区の東壁でごくわずかに重複するだけであるので明確ではないが、断面観察では S D27よりも新しいと推定している。なお、S D26とも接続あるいは切り合い関係にあるが新旧は不明である。

確認できた溝の長さは 4 m、幅は約90cm、方向は N-73°-E である。断面形は逆台形で深さは約45cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は 4 層に分層できたが、ほとんどが細砂や粘土の瓦層であることから大部分が水成堆積層と考えられる。溝の性格は堆積土の状況から水路であると考えられるが、流れの方向は不明である。時期については①VII a1 層水田跡の畦畔・土手・水路を切っており方向も異なること、②VII a1 層水田跡同様に VI c 層によって覆われていること、などから同水田跡の経営期間の中の最終段階か、あるいは廃絶直後に掘られた可能性が高い。

(2) 26号溝跡－S D26－（第62図）

5 区南部に位置し、畦畔39・41を切っている。なお、S D25とも接続あるいは切り合い関係にあるが新旧は不明である。

確認できた溝の長さは 4 m、幅は60~80cm、方向は N-15°-W で S D25 とほぼ直交する。断面形はやや開いた「U」字形で深さは約40cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は 5 層で自然堆積層と推定される。

溝の性格については不明であるが、確認した状況が S D25 と同じで方向もほぼ直交するなど S D25 との関連性が高いと考えられる。時期についても S D25 同様に VII a1 層水田跡の経営期間の中の最終段階か、あるいは廃絶直後のものである可能性が高い。

(3) 27号溝跡－S D27－（第62図）

5 区南部に位置する。土手を伴っており、土手のプランは盛土下の現代水田耕作土を除去した直下の VI 層上面で確認できた。土手は VII a1 層上面に構築されたもので、溝も同様に VII a1 層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは 4 m、幅は約 3 m、方向は N-63°-W である。断面形は大きく開く「U」字形で、北側の土手の上面からの深さは約90cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は砂や粘土からなる自然堆積層で、水成堆積と考えられる。

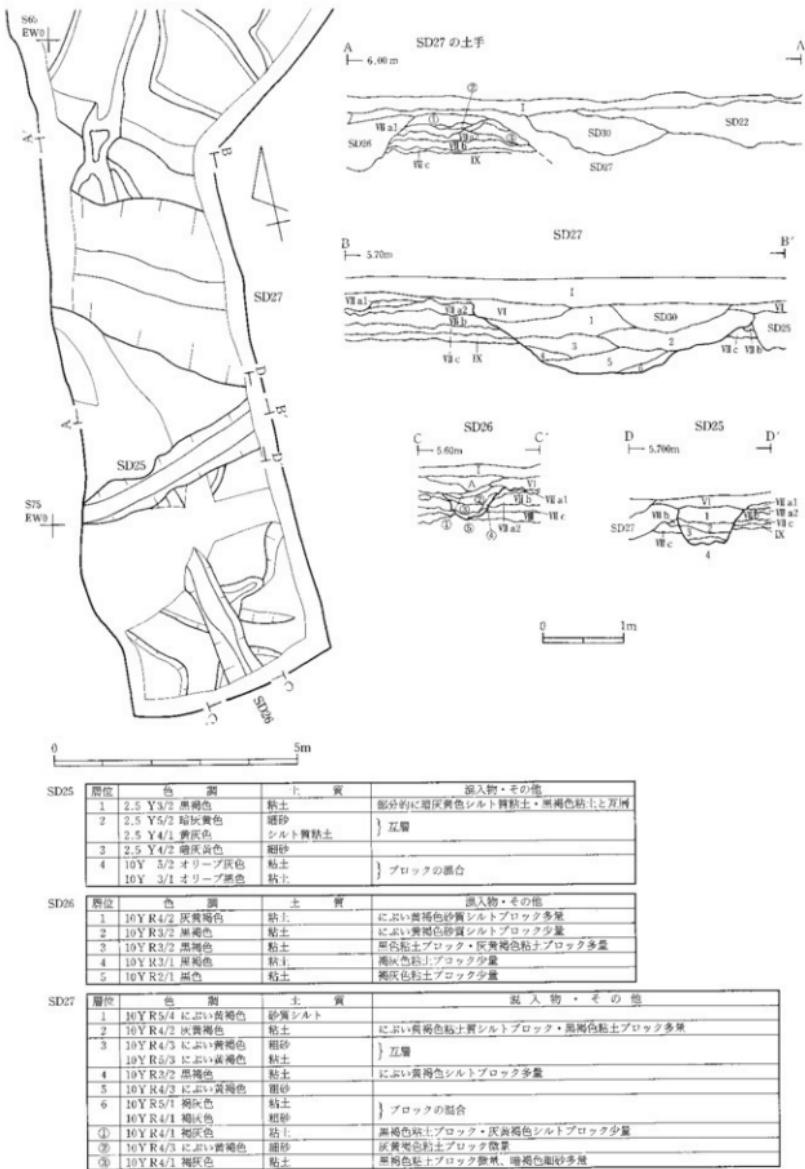
土手は溝の南北両側に認められ（畦畔37・38とした）、遺存状況の比較的良い箇所では VII a1 層の上に褐灰色粘土やにぶい黄褐色細砂の盛土が認められたが、VII a1 層耕作土の高まりだけ確認できた部分もある。規模は表11の通りで、北側の土手には前述したように水口が設けられている。

溝の性格は堆積土が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であり、地形の状況からすると東へ流れていたと考えられる。北側に広がる水田の排水路としての役割を持っているが、南側にも一段低い水田が広がっているとするとこの南側の水田に対する給水路としての役割も有することとなる。なお VII a1 層水田段階だけでなく、下層の VII b 層水田段階にも土手が認められるので、この溝の上限は VII b 層水田段階にまで上ると推定され、掘削されて以来 VII a1 層水田段階まで踏襲された基幹水路であると考えられる。

(4) 28号溝跡－S D28

5 区中央部に位置する。土手を伴っており、土手のプランは第5節で述べたように VI a 層上面で確認できた。土手は VII a1 層上面に構築されたもので、溝も同様に VII a1 層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは 10m、幅は 1~1.3m である。方向は N-55°-W を示しているが北西方方向の延長線上にある

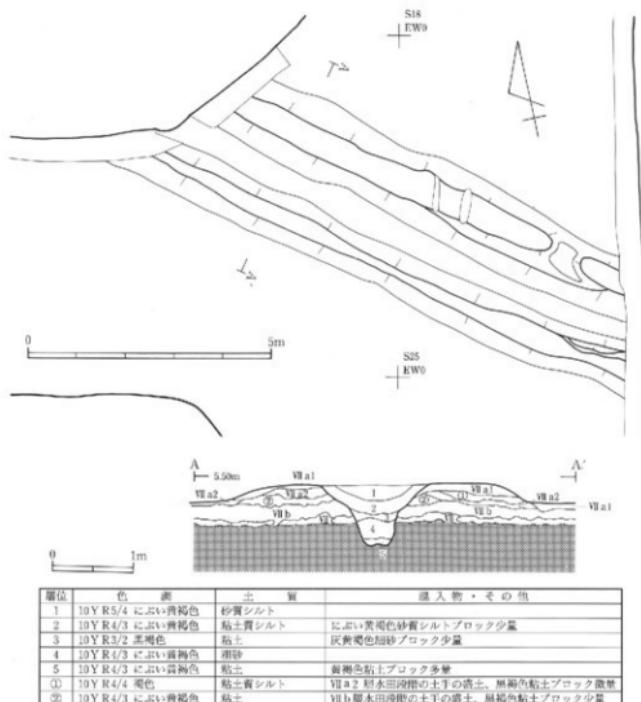


第62図 SD25~27 平面・断面図

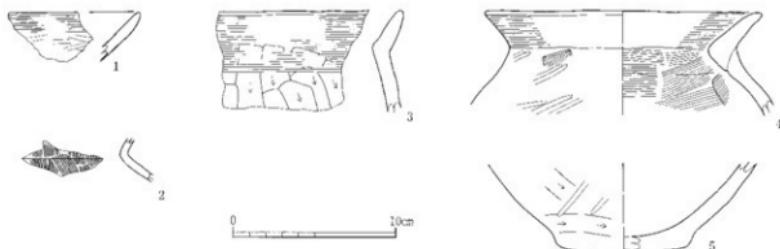
1区西部で確認されていないので、西方にまっすぐには延びずに1区と3区の間を通るように南側に湾曲していると推定される。断面形は上部は大きく開く「U」字形であるが下部は逆台形をしていて、堆積土もこの部分を境にして分層できることから一度埋没した後に再掘削されていると推定される。土手の上面からの深さは70~75cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は上層がシルトを主とし、下層が砂を主とする自然堆積層で、水成堆積と考えられる。

土手は溝の南北両側に認められ（畦畔19・20とした）、規模は表11の通りである。上部にはVIIa1層が積まれて造られているが、土手の下部にはVIIa2層やVIIb層の水田耕作土、褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルトや粘土の盛土が認められる。

溝の性格は堆積土が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であり、東へ流れていたと推定される。調査区内で水口は認められなかったが南側に広がる水田の給水路としての役割を持っていると推定され、また北側にも耕作域が広がっていたとすると北側の水田の排水路としての性格も有することとなる。なお、溝が掘りなおされていることや土手がVIIb層水田の段階から継続して使用されている状況などからするとこの溝はVIIb層段階から踏襲されてきた基幹の水路であると考えられる。



第63図 SD28 平面・断面図



No.	写真 図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法 量(cm)			外 部 色調 内 部 色 調	胎 土	焼 成	外 面 調 査 ・ 特 徴	
						口 径	底 径	厚 さ				内 面 形 状	内 面 装 飾
1	168-4	堆積土 下層	土師器 裏	口縁部 小片	?	?	?	?	赤ぶい、褐色 にぶい褐色	白糪少量	良好	口縁部端部ヨコナデ、ナデ→粗いハラミガキ ナデ→細いハラミガキ	
2	168-1	堆積土 下層	土師器 裏	筒型 小片	?	?	?	?	赤ぶい、褐色 にぶい褐色	白糺微量	良好	ハケメ	11輪部ハケメ、体部ナデ
3	168-2	堆積土 下層	土師器 裏	口縁部 小片	?	?	?	?	赤ぶい、褐色 にぶい褐色	白糺微量	良好	口縁一部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ→粗いハラミガキ
4	168-3	堆積土 下層	土師器 裏	上部 1/4	(17.0)	?	?	?	暗灰褐色 にぶい褐色	白糺微量	良好	11輪部ヨコナデ、体部ヘラナダ→粗いハラミガキ 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナダ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナダ
5	168-5	堆積土 下層	土師器 裏	?	?	(7.8)	?	?	黄褐色 にぶい褐色	白糺少量	良好	体部ハラケズリ→粗いハラミガキ、底部ヘラケズリ ナデ? (削痕)	

第64図 SD27出土遺物

III. 出土遺物

耕作土中からは土師器片が2点出土したのみである。非クロクロ調整の甕と考えられるが細片のため図化はできなかった。

S D27からは堆積土の下層（第62図の5・6層）を中心に土師器片が44点出土した。全て非クロクロ調整で、甕と考えられる5点が図化できた（第64図）。このうち2点は器壁が薄くハケメが細かいのが特徴的で、所謂S字状口縁部である可能性が考えられる。なお、SD27はVII a1層水田跡だけに伴う溝ではなく、VII b層水田の段階から継続して使用された基幹水路と推定されるため、遺物もVII b層～VII a1層水田までのものが混在している可能性があるが、出土層位等によって区別することはできなかった。

第8節 VII a2層水田跡

VII a2層上面ではVII a2層水田跡を検出した。

I. 水田の構成と概要

1. 水田の構成

東西方向にはほぼ平行して走る水路2条と小畦畔によって構成される。検出した畦畔のうち12条の畦畔が直下のVII b層水田跡の畦畔をほぼ踏襲しており（表13の備考欄参照）、特に3区西部では部分的ではあるがVII b層水田跡と類似する小区画が検出されている。5区では畦畔の間隔が広いが、上下層で小区画の水田が検出されていることからすると検出できなかった箇所にも畦畔が存在した可能性が高く、このことから当水田跡もVII a1層水田跡と同じような小区画の水田構造であると推定される。

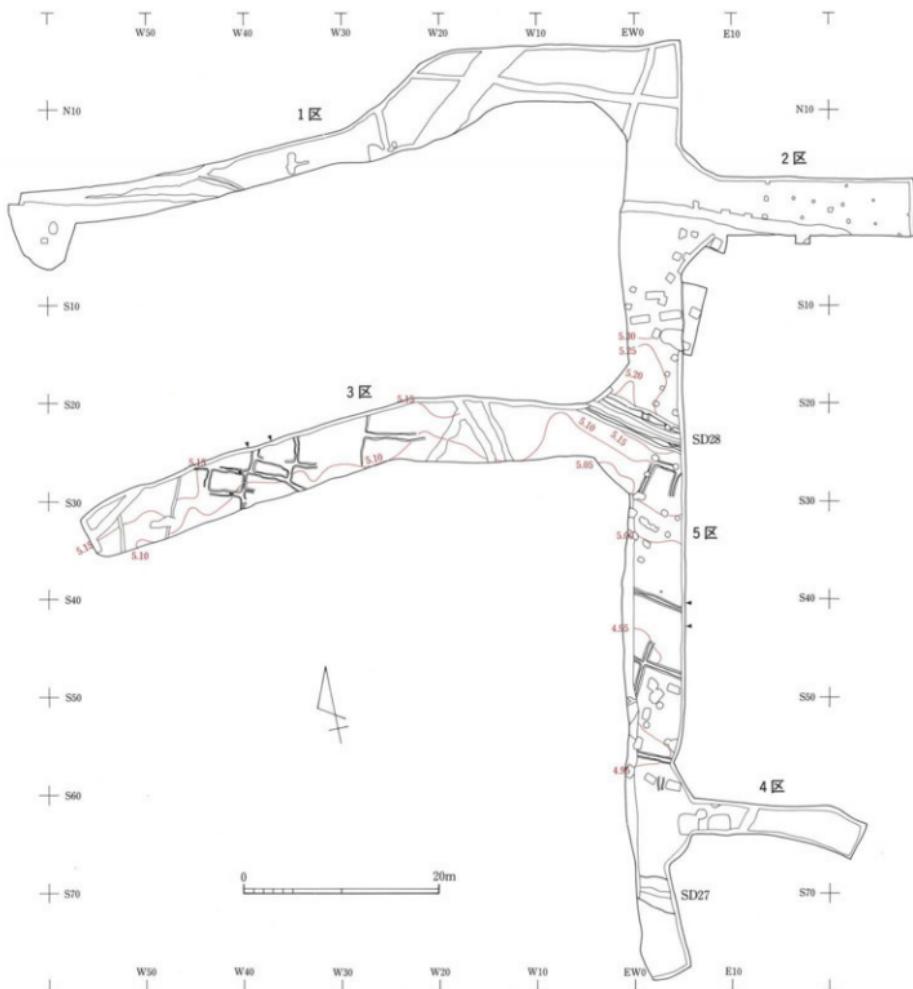
2. 検出・遺存状況

当初の壁面観察において、VII a層は層上部と下部の層相がやや異なることを把握はしていたがそれは同じ耕作土中の耕作頻度の違いに起因するものと考えていた。ところがVII a層（後でVII a1層に変更）の精査終了後、3区においてVII a層を削り込んでVII b層水田跡の畦畔確認作業を開始したところ、VII a層ともVII b層とも異なる畦畔を確認し

第8節 VIIa2層水田跡

た。そこで調査区全面の断面を再検討したところVIIa層は2層に細分できることが判明し、それぞれVIIa1層とVIIa2層とした。

なお、畦畔はVIIa1層を削り込んでいく途中で確認したが遺存状況はあまり良くなく、断片的に確認できたのみであった。



第65図 VIIa2層水田跡平面図（1）

3. 耕作土

耕作土は基本層VII a2層で、黒褐色の粘土である。厚さは2~8cmで一定せず、平均4cm前後である。下面是凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くはなく、直下のVII b層中で留まっている。

4. 水田域

畦畔が検出できた5区中央部から南の部分については、調査区の東側・南側・西側にまで水田域が拡がっていることは確実であるが、畦畔が検出できなかった5区中央部から北の区域については耕作域・非耕作域の区別はできない。この点はVII a1層水田跡と同じである。

II. 遺構の状況

1. 畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、No.1~23まで検出した。詳細は表13の通りである。規模が大きいのはSD28の北側の土手であるNo.12で、その他No.16もやや幅広であるが、これは遺存状況が悪く崩れているためひろがって見えるのではないかと考えられる。なお3区西部にある段差の位置では直下のVII b層水田跡と直上のVII a1層水田跡で大畦畔が検出されているので、検出はできなかったが大畦畔が存在した可能性が高い。

他の小畦畔は東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅31cm、下端幅55cm、高さ2cm程度である。方向は断片的なものが多いために不明な点が多いが、VII a1層水田跡と同様と推定される。

2. 水田区画

区画がある程度明確にできたのは3区西部のみで、他は部分的な検出に留まっているため大部分の詳細は不明である。ただし「水田の構成」の項で述べたように、直上のVII a1層水田跡と直下のVII b層水田跡の構造が類似していることからVII a2層水田跡も同じような小区画であったと考えられ、実際はさらに細分される区画が多いと考えられる。

3. 水田面の標高と傾斜

地形の特徴はVII a1層水田跡と同じで、大まかには北から南へ傾斜するなかで、5区の西側から調査区外にか



図64 VII a2層水田跡作業風景 (SD28付近)

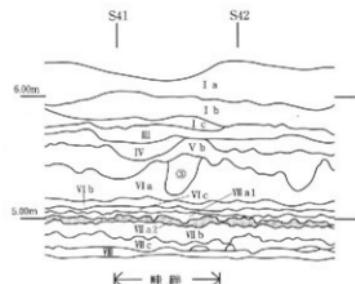
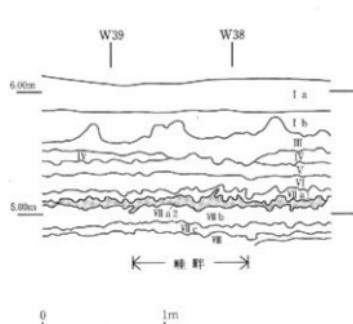


図65 VII a2層水田跡断面図 (位置は平面図1に表示)

けて南方から浅い谷が入り込んでいる。

水田面の標高はS D28から北の部分を除くと4.92~5.19mである。部分的な勾配はVII a1層水田跡と同じで、3区西部の水田区画④の北西~南東方向が15cm/10m、S D28の南側の南北方向が25cm/10m、5区の②の東西方向が12cm/10mである。

なお、小区画内の傾斜・比高差については区画自体が不明確なため詳細は不明である。

4. 水口

明確に水口と考えられる箇所は検出できなかった。

5. 溝跡

VII a1層水田跡上面で確認したS D27・28は前述したようにVII a2層水田跡にも伴う基幹水路で、規模や形態はVII a1層水田段階とほぼ同じである。

III. 出土遺物

遺物は耕作土中から非クロロ調整の土師器片が15点出土したが、細片で磨滅が著しいために図化できたものはない。なお、S D27の遺物については前述したようにVII a1層~VII b層の各水田跡の遺物が混在している可能性はあるが、区別することはできない。

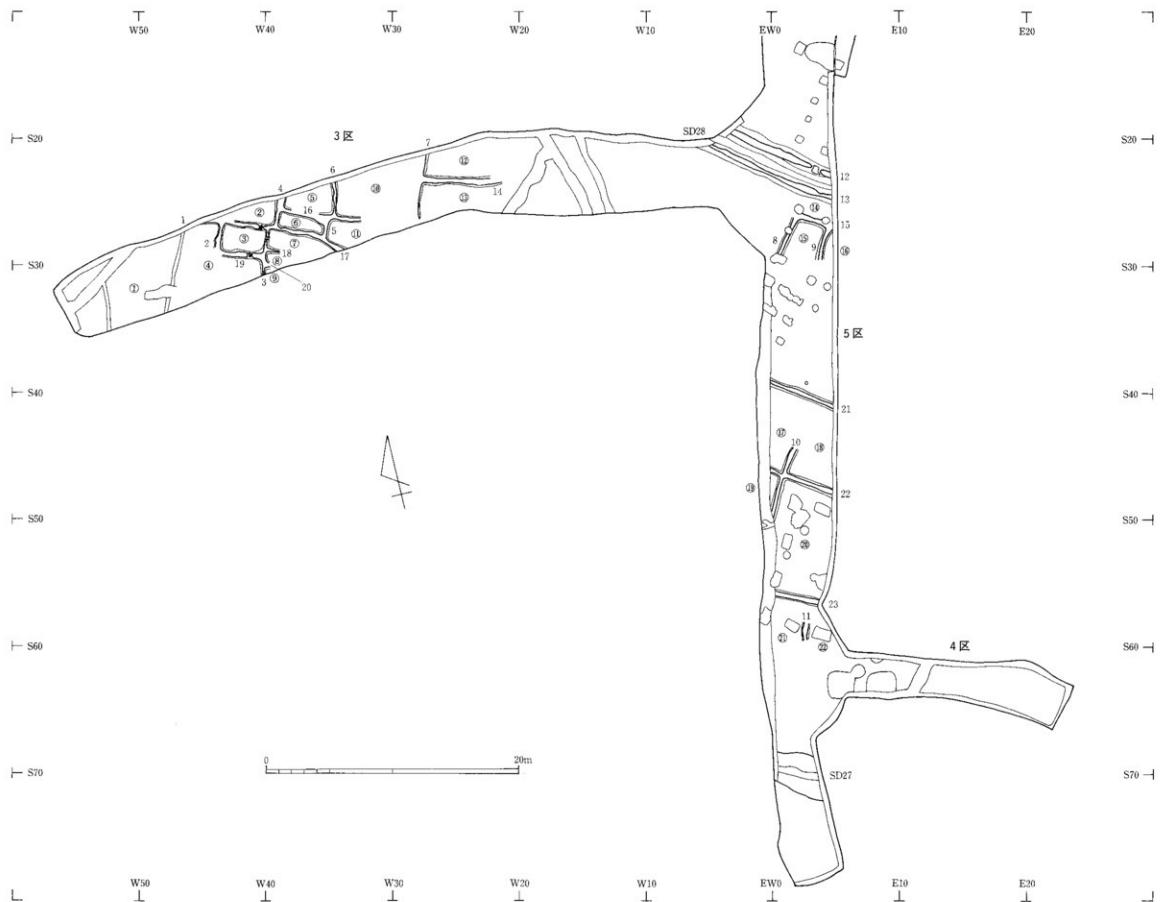
No.	方 向	長さ(cm)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	N-25°-E	(6.6)	—	—	1 ~ 5	段差のみ検出。VII b層水田の大蛇跡No.1を踏襲
2	N-25°-E	1.9	29 ~ 43	46 ~ 66	2 ~ 4	VII b層水田の蛇跡No.3を踏襲
3	N-17°-E	(3.6)	15 ~ 33	45 ~ 58	1 ~ 4	
4	N-21°-E	(2.1)	33 ~ 53	56 ~ 79	2 ~ 3	VII b層水田の蛇跡No.7を踏襲
5	N-22°-E	1.0	29 ~ 33	61 ~ 79	2 ~ 4	VII b層水田の蛇跡No.8の一部を踏襲
6	N-11°-E	(2.5)	17 ~ 31	45 ~ 54	1 ~ 3	VII b層水田の蛇跡No.8の一部をほぼ踏襲
7	N-17°-E	(5.3)	—	—	1 ~ 2	深さのみ検出
8	N-37°-E	(3.1)	26 ~ 33	54 ~ 60	1 ~ 4	
9	N-28°-E	(2.3)	29 ~ 31	55 ~ 65	1 ~ 3	やや屈曲
10	N-25°-34°-E	(5.5)	21 ~ 37	56 ~ 65	1 ~ 3	やや屈曲
11	N-16°-E	(1.4)	29 ~ 45	43 ~ 61	2	
12	N-52°-W	(8.6)	50 ~ 69	70 ~ 120	6 ~ 16	S D28の北側土手。VII b層水田の土手No.21を踏襲
13	N-53°-W	(19.7)	15 ~ 59	46 ~ 80	7 ~ 16	S D28の南側土手。VII b層水田の土手No.22を踏襲
14	N-77°-W	(5.7)	30 ~ 58	58 ~ 81	1 ~ 3	
15	N-61°-W	(1.8)	32 ~ 42	66 ~ 72	1 ~ 3	
16	N-64°-W	(3.6)	25 ~ 71	50 ~ 105	1 ~ 3	VII b層水田の蛇跡No.25の一部を踏襲
17	N-48°-69°-W	(3.1)	23 ~ 38	42 ~ 51	1 ~ 4	やや屈曲する。VII b層水田の蛇跡No.27を踏襲
18	N-68°-W	(1.0)	13 ~ 18	33 ~ 40	1 ~ 2	
19	N-73°-W	(3.0)	26 ~ 45	58 ~ 78	2 ~ 3	VII b層水田の蛇跡No.28の一部をほぼ踏襲
20	N-74°-W	(0.6)	24	66	1	
21	N-57°-W	(5.3)	21 ~ 37	53 ~ 66	2 ~ 4	VII b層水田の蛇跡No.32を踏襲
22	N-52°-58°-W	(5.2)	21 ~ 38	45 ~ 73	2 ~ 4	
23	N-66°-W	(3.6)	35 ~ 46	52 ~ 64	1 ~ 2	VII b層水田の蛇跡No.36を踏襲

表13 VII a2層水田跡跡計測表

No.	標高(m)	比高差(m)	傾斜方向	東西(m)	南北(m)	南北(m)	東西(m)	面積(m ²)	備考
1.	5.10~5.19	(9)	北 → 南	(6.6)	?	?	?	(42.9)	?
2.	5.12~5.14	(2)	ほぼ水平	(1.9)	?	(4.4)	?	(5.2)	?
3.	5.10~5.13	3	北 → 北東	1.6	1.9	3.0	3.2	5.6	1.7 × 3.1
4.	5.08~5.17	(9)	北西 → 南東	(1.3)	(6.6)	?	?	(25.4)	?
5.	5.10~5.12	(2)	ほぼ水平	(2.3)	(9.7)	3.6	?	(5.9)	3.5 × ?
6.	5.10~5.12	2	ほぼ水平	0.6	1.0	3.1	3.2	2.8	0.8 × 3.2
7.	5.08~5.11	(1)	北 → 北東	?	1.4	(1.0)	(5.4)	(6.4)	1.4 × ?
8.	5.06~5.09	(3)	ほぼ水平	?	0.6	?	(1.0)	(1.7)	0.6 × ?
9.	5.06~5.08	(2)	?	?	(0.4)	?	(0.6)	(0.5)	?
10.	5.09~5.12	(3)	ほぼ水平	?	(2.6)	(1.8)	?	(21.6)	6.0 × ?
11.	5.08~5.10	(2)	ほぼ水平	?	1.4	(1.7)	(2.3)	(7.7)	?
12.	5.10~5.17	(2)	北東 → 南西	?	(1.2)	(5.2)	?	?	?
13.	5.05~5.12	(7)	北西 → 南東	?	(2.8)	?	(6.1)	?	?
14.	5.11~5.16	(5)	北 → 南	?	?	(1.6)	?	?	?
15.	4.95~5.10	(19)	北 → 南	(2.1)	(3.0)	?	2.0	?	2.0 × ?
16.	4.95~5.11	(16)	北 → 南	?	(2.4)	?	?	?	?
17.	4.93~4.97	(4)	北東 → 南西	(2.1)	?	(0.9)	?	(13.1)	5.8 × ?
18.	4.94~5.09	(6)	北東 → 南西	?	(1.9)	(3.6)	?	(13.9)	5.7 × ?
19.	4.96~4.97	(1)	?	(2.4)	?	?	(0.7)	(1.9)	?
20.	4.92~4.98	(6)	北東 → 南西	?	(3.3)	(3.6)	(3.9)	(35.8)	8.2 × ?
21.	4.92~4.98	(6)	?	(1.5)	?	?	(2.4)	?	?
22.	4.95~4.98	(3)	?	?	(1.3)	?	(0.5)	?	?

表14 VII a2層水田跡水田区画計測表

()は現存地



第67図 VII a2 番水田跡平面図(2)

第9節 VII b 層水田跡

VII b 層上面ではVII b 層水田跡を検出した。

1. 水田の構成と概要

1. 水田の構成

水田の構成はVII a1 層水田跡とほぼ同じで、南北方向の大畦畔1条と土手を伴なう東西方向の水路2条によって大区画が造られ、その内部を小畦畔によって分割して小区画が造られている。ただしVII a1 層水田跡の場合は小畦畔のなかにも基軸となる畦畔があって、大区画を区切る「中区画」の存在が想定できだが、VII b 層水田跡の場合は中区画の存在はそれほど明瞭ではない。



水田面の検出作業

2. 検出・遺存状況

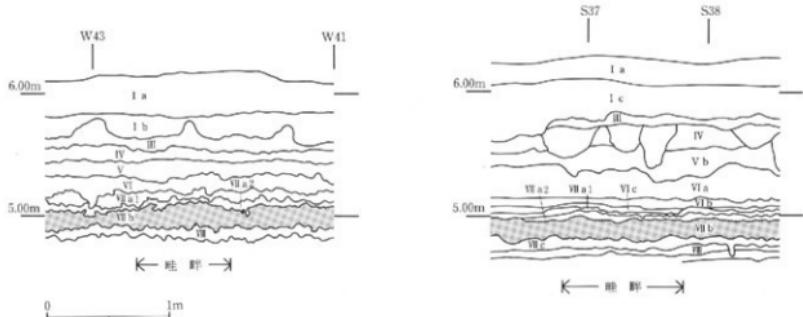
畦畔はVII a2 層水田の耕作土を削り込んでいく途中で確認した。畦畔の遺存状況は比較的良好であったが、S D27 の南側やS D28 の南側では畦畔を確認できなかった。このうちS D27 の南側はこの付近に上層の遺構が集中していたためVII b 層自体が遺存する箇所が少なく、このために畦畔が確認できなかったと考えられる。一方S D28 の南側で畦畔が確認できなかった理由は明らかではなく、本来畦畔が存在しなかったのかどうか不明である。なお、VII a1 層水田跡やVII a2 層水田跡ではS D28 の北側で畦畔は確認できなかったが、本層ではわずかながら北にのびる畦畔 (No.17) を確認できた。

3. 耕作土

耕作土は基本層VII b 層で黒色の粘土であるが、5区中央部のS D28以北では北に向かうにつれて徐々に泥炭質粘土となる。厚さは12~20cmで比較的厚く安定した分布を示し、平均15cm前後ある。下面は凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くなく、直下にVII c 層が遺存する箇所では大体VII c 層中で留まっている。

4. 水田域

畦畔が検出できた5区中央部から南の部分については、調査区の周囲にまで水田域が拡がっていることは確実である。一方、畦畔が検出できなかった5区中央部から北の区域については、2区東端部におけるプラント・オペアル分析の結果、VII b 層中からイネが2900個/gという数値を得ているので(第3章参照)、少なくとも2区東端部付近までは耕作域であった可能性はある。



第68図 VII b 層水田跡断面図 (位置は平面図1に表示)

II. 遺構の状況

1. 畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、No.1～40まで検出した。

規模が大きいのはNo.1・39・40である。このうち大畦畔は3区西端部のNo.1で、高さは他の畦畔とあまり変わらないが、上端幅・下端幅は他の2～3倍ある。なお、No.39・40はSD27の土手である。

水路SD27・SD28と大畦畔No.1はこのVIIb層水田跡で造られたものが上層のVIIa2層水田跡やVIIa1層水田



畦畔の確認状況（3区西部）

跡まで踏襲されたと考えられる。従って当然基本となる構造は前述した上層の水田跡と同じで、水路がほぼ平行し、大畦畔No.1はこれに大体直交して他の小畦畔の基軸となっている。

小畦畔は東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅26cm、下端幅51cm、高さ6cm程度である。方向はNo.24のように比較的直線的なものもあるが、No.23・27・28のように南側が開いた緩やかな弧状をしているものもある。3区と5区の畦畔のつながりが確定できないため判然としないが、VIIa1層水田跡と同じように5区の西側に南方から浅い谷が入り込んでいて、その影響を受けているために畦畔が湾曲しているのではないかと考えられる。

2. 水田区画

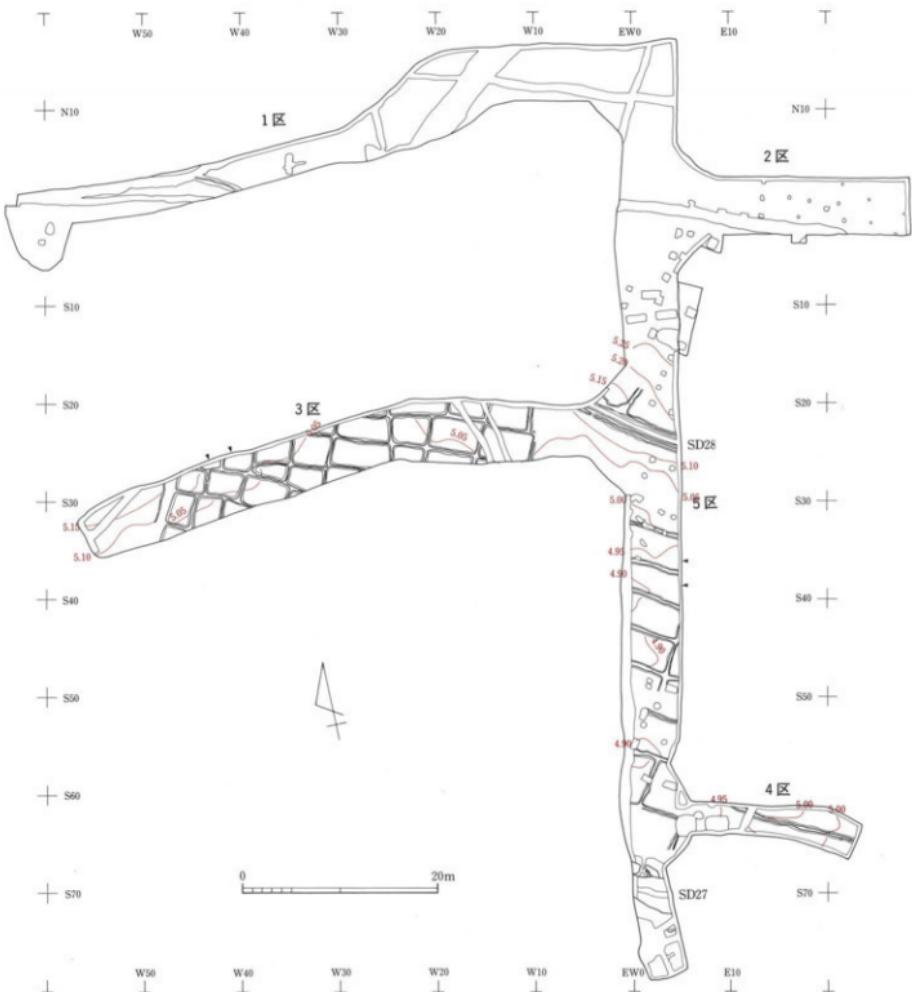
水田区画は大畦畔と水路によって区画された大区画と小畦畔によって区画された小区画がある。大区画は全体

No.	方 向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	N-28°-E	(6.5)	88 ~ 128	128 ~ 156	1 ~ 7	大畦畔
2	N-24°-E	3.1	20 ~ 32	53 ~ 62	3 ~ 5	
3	N-17°-E	2.1	23 ~ 39	46 ~ 56	1 ~ 3	
4	N-17°-E	(9.7)	25 ~ 38	48 ~ 62	1 ~ 2	
5	N-22°-E	(2.0)	8 ~ 24	38 ~ 48	1 ~ 5	
6	N-30°-E	2.3	22 ~ 30	47 ~ 60	1 ~ 3	
7	N-13-37°-E	(1.9)	15 ~ 18	46 ~ 53	2 ~ 5	やや屈曲する
8	N-16-28°-E	(4.2)	12 ~ 22	41 ~ 51	3 ~ 5	やや屈曲する
9	N-32°-E	(0.8)	15 ~ 18	44 ~ 47	3 ~ 5	
10	N-24°-E	(6.2)	7 ~ 24	37 ~ 48	3 ~ 6	
11	N-12°-E	(3.3)	16 ~ 32	46 ~ 60	2 ~ 5	
12	N-21°-E	(4.7)	12 ~ 30	38 ~ 60	1 ~ 4	
13	N-14°-E	(1.0)	17 ~ 24	47 ~ 56	2 ~ 3	
14	N-36°-E	(6.4)	15 ~ 36	45 ~ 71	4	
15	N-19°-E	(2.3)	25 ~ 37	52 ~ 63	1 ~ 4	
16	N-24°-E	(2.6)	20 ~ 26	43 ~ 57	1 ~ 4	
17	N-49°-E	(2.8)	38 ~ 42	50 ~ 62	1 ~ 3	
18	N-30°-E	(5.8)	13 ~ 65	34 ~ 75	2 ~ 5	
19	N-34°-E	(4.5)	20 ~ 36	41 ~ 61	1 ~ 3	
20	N-36°-E	(1.9)	19 ~ 43	45 ~ 66	1 ~ 3	
21	N-55°-W	(8.6)	10 ~ 80	25 ~ 85	1 ~ 3	SD28北側の土手
22	N-54°-W	(10.5)	18 ~ 32	30 ~ 85	2 ~ 6	SD28北側の土手
23	N-72°-W	(17.5)	9 ~ 25	33 ~ 58	1 ~ 7	屈曲する
24	N-70°-W	(18.2)	11 ~ 33	34 ~ 58	1 ~ 5	
25	N-79-79°-W	(8.8)	7 ~ 24	37 ~ 50	3 ~ 6	屈曲する
26	N-70°-W	(3.7)	10 ~ 18	43 ~ 48	1 ~ 5	
27	N-59°-76°-W	(11.5)	12 ~ 31	44 ~ 70	1 ~ 7	やや屈曲する
28	N-56-67°-W	(7.8)	13 ~ 30	38 ~ 58	2 ~ 4	やや屈曲する
29	N-64°-W	(2.4)	11 ~ 39	46 ~ 60	2 ~ 5	
30	N-61°-W	(5.1)	22 ~ 40	34 ~ 62	1 ~ 5	
31	N-63°-W	(5.1)	23 ~ 38	52 ~ 66	1 ~ 4	やや屈曲する
32	N-57°-W	(5.1)	28 ~ 31	48 ~ 56	3 ~ 6	
33	N-59°-W	(5.1)	23 ~ 42	39 ~ 60	2 ~ 4	
34	N-58°-W	(5.0)	28 ~ 43	51 ~ 65	2 ~ 5	
35	N-59°-W	(3.3)	17 ~ 26	37 ~ 50	3 ~ 6	やや屈曲する
36	N-62°-W	(3.5)	28 ~ 57	58 ~ 73	2 ~ 5	やや屈曲する
37	N-62°-W	(11.8)	16 ~ 36	41 ~ 66	1 ~ 5	やや屈曲する
38	N-60°-W	(5.0)	14 ~ 26	35 ~ 48	2 ~ 4	
39	N-58°-W	(3.2)	56 ~ 92	118 ~ 146	11 ~ 14	SD27の南側土手
40	N-57°-W	(4.3)	140	160	2	SD27の南側土手、部分的に遺存

表15 VII b層水田跡畦畔計測表

辺5 m以上で面積が15m²以上と推定されるやや大きなめの区画などがある。概して言えば3区西部（大畦畔No1と畦畔No10の間）に小さな区画が多く、3区東部（畦畔No10の東側）には中ぐらいの規模の区画があり、5区ではやや大きめの区画が多い。

なお中区画については、VII a1層水田跡ほど明瞭に基軸の畦畔と推定できるものはないが、No10・23・27・28のよ



第69図 VII b 層水田跡平面図（1）

うに他を分断する畦畔がVII a1層水田跡と似た配置で認められるので、同様な中区画が造られている可能性がある。

3. 水田面の標高と傾斜

調査区の全体的な地形はVII a1層・VII a2層水田跡と同様で、北から南へ傾斜している中に5区の西側から調査区外にかけて南方から浅い谷があり込んでおり、調査区はちょうどこの谷の北側から東側を巡るように位置していると考えられる。

水田面の標高は5区の西壁側が低く、最も低い箇所は区画⑩で4.86m、標高が高いのは3区西端部の区画②やSD28の北側で、最も高い箇所は区画②で5.21mである。

勾配は調査区全体を通しては測定できないが、部分的に見ると3区西部の水田区画⑤-⑩の北西～南東方向が20cm/10m、3区東部の⑥-⑫の南北方向が10cm/10m、SD28の南側で25cm/10m、5区の⑩-⑬の東西方向が12cm/10mである。3区西端部とSD28の近くの傾斜が比較的きつて他の箇所はやや緩やかで、ほぼ上層の水田跡と同じ状況となっている。なお、小区画内の傾斜も全体的な傾斜とほぼ一致している。区画内の高差は全体を検出できた区画では6cm以下で、その他の区画でも⑦・⑪・⑫・⑬が10cm以上あるがそれ以外はすべて7cm以下である。10cm以上ある4区画については他と比べて面積が広いので実際はさらに細分される可能性があることから、本来はすべて6～7cm以下である可能性が高い。

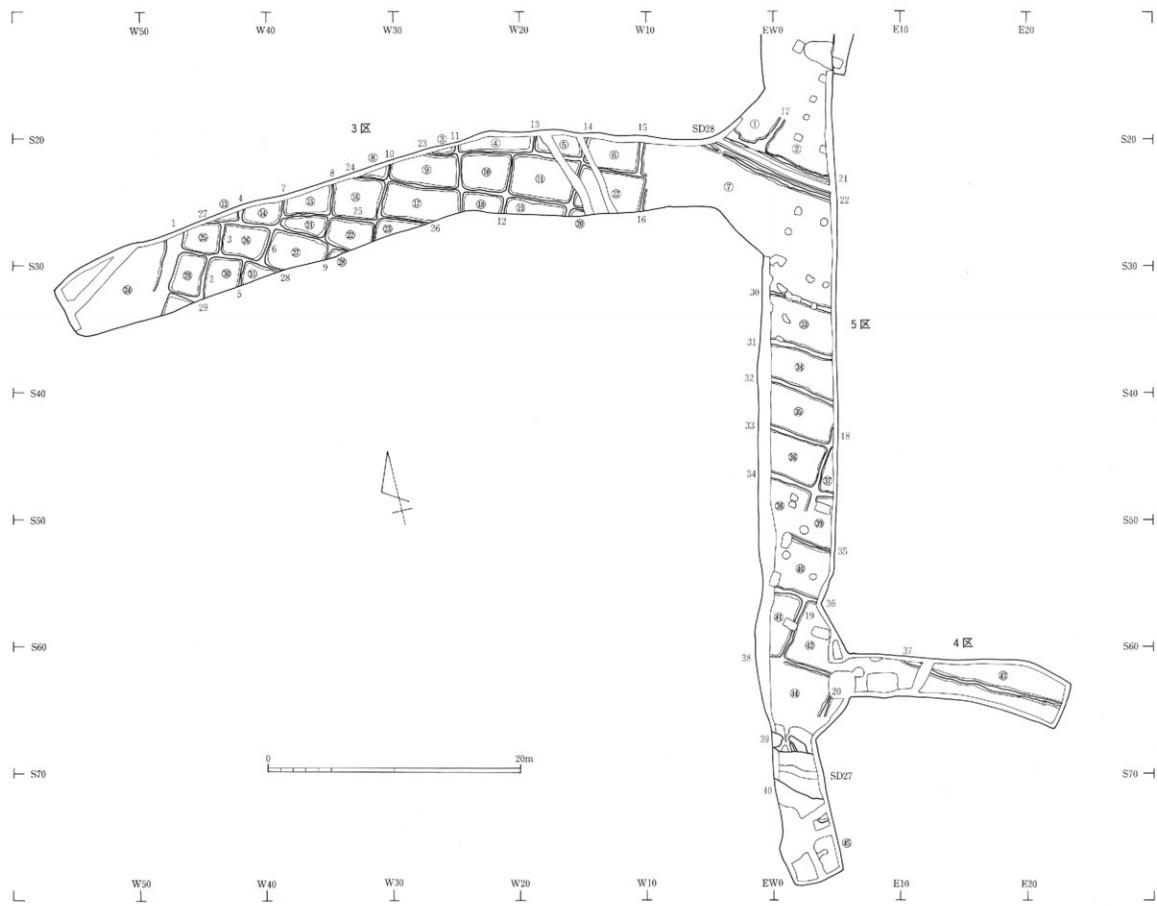
4. 水口

明らかに畦畔を切る形態のものを水口とした。確認できたのは畦畔22(S D28の南側土手)に設けられた1カ所の

No.	標高(m)	比高差(m)	種類	東西(m)	東西(m)	南北(m)	南北(m)	面積(m ²)	推定規模	備考
1	5.13～5.19	(6)	北東～南西	(2.7)	?	(0.8)	?	?	?	
2	5.16～5.21	(5)	ほぼ水平	?	(2.8)	(5.2)	?	?	?	
3	5.03～5.05	(2)	ほぼ水平	(0.4)	7	(1.2)	?	(0.3)	?	部分的に検出
4	5.06～5.07	(1)	ほぼ水平	(1.0)	(0.4)	5.4	?	(4.8)	5.4 × ?	
5	5.07～5.10	(3)	ほぼ水平	(1.3)	(1.0)	3.3	?	(4.4)	3.3 × ?	
6	5.05～5.09	(4)	ほぼ水平	(2.2)	(1.8)	3.8	?	(8.2)	3.8 × ?	
7	5.09～5.14	(14)	北東～南西	?	(5.5)	(5.0)	(11.1)	(91.1)	?	分割される可能性あり
8	5.03～5.05	(2)	?	(0.9)	?	(1.6)	?	(0.8)	?	部分的に検出
9	5.03～5.05	(3)	ほぼ水平	2.3	(1.0)	5.3	(2.5)	(16.1)	2.3 × 5.1	
10	5.03～5.06	3	北東～南西	2.6	2.3	3.0	3.6	9.0	2.4 × 3.6	
11	5.09～5.08	6	東北～南西	3.0	2.7	4.5	4.9	14.3	3.0 × 4.7	
12	5.04～5.08	(4)	北～南	(2.7)	3.0	(0.7)	4.7	(14.4)	3.0 × 4.7	
13	5.08～5.10	(2)	?	(0.5)	?	(1.7)	?	(0.5)	?	部分的に検出
14	5.07～5.10	(3)	西～東	(1.6)	(0.9)	2.6	?	(2.8)	2.6 × ?	
15	5.03～5.09	(6)	北～南	(2.1)	(1.2)	3.2	?	(5.3)	3.2 × ?	
16	5.03～5.07	(4)	北西～南東	3.0	(2.3)	3.2	(2.4)	(10.1)	3.0 × 3.4	
17	5.01～5.04	(3)	ほぼ水平	(1.7)	2.5	(4.2)	5.4	(12.2)	2.4 × 5.7	
18	5.02～5.05	(3)	ほぼ水平	(1.1)	(1.3)	?	2.9	(3.6)	2.8 × ?	
19	5.01～5.03	(2)	ほぼ水平	(0.6)	(1.1)	?	4.3	(3.9)	4.3 × ?	
20	5.01～5.03	(2)	?	?	(0.4)	?	(0.9)	(0.4)	?	部分的に検出
21	5.03～5.05	2	西～東	1.4	0.5	2.8	3.1	3.1	1.0 × 3.1	三角形に近い
22	5.01～5.04	(3)	ほぼ水平	(1.4)	1.5	(2.1)	3.2	(6.0)	1.9 × 3.2	台形
23	5.02～5.04	(2)	?	?	(1.6)	?	(3.2)	(2.7)	?	
24	5.07～5.18	(11)	北西～南東	(2.4)	?	?	?	(26.8)	?	分割される可能性あり
25	5.08～5.13	(5)	北西～南東	2.1	(1.3)	2.5	(1.4)	(5.0)	2.1 × 2.5	
26	5.04～5.08	4	北西～南東	2.2	2.1	2.8	3.2	6.8	2.1 × 3.1	
27	5.02～5.06	(4)	北西～南東	(1.2)	2.4	(1.4)	4.0	(9.7)	2.6 × 4.1	
28	5.03	?	?	(0.5)	?	(0.9)	(0.9)	?	部分的に検出	
29	5.03～5.09	6	北西～南東	3.0	2.8	2.0	1.8	5.7	1.9 × 2.9	
30	5.02～5.06	(4)	北西～南東	(2.1)	(3.1)	?	2.1	(6.3)	2.3 × ?	
31	5.01～5.03	(2)	?	?	(1.9)	?	(1.9)	(2.3)	?	
32	5.03～5.05	(2)	?	?	(1.5)	?	(2.0)	(1.7)	?	
33	4.91～4.98	(7)	北～南	?	(5.1)	(9.1)	(15.7)	3.6 × ?		
34	4.89～4.93	(4)	北東～南西	?	?	(5.7)	(5.0)	(15.0)	2.5 × ?	
35	4.90～4.93	(3)	東～西	(2.7)	?	(4.8)	(5.1)	(15.1)	2.9 × ?	
36	4.88～4.93	(5)	東～西	3.0	?	(3.4)	(4.6)	(12.2)	2.9 × ?	
37	4.92～4.95	(3)	?	?	(3.2)	(1.0)	?	(2.1)	3.2 × ?	部分的に検出
38	4.99～4.94	(4)	ほぼ水平	(1.4)	?	(0.5)	(3.3)	(9.2)	3.4 × ?	
39	4.94～4.95	(1)	ほぼ水平	?	(0.3)	(2.3)	(1.1)	(6.0)	3.6 × ?	
40	4.86～4.93	(7)	東北～南西	?	?	(3.4)	(3.2)	(15.3)	3.4 × ?	
41	4.89～4.93	(4)	ほぼ水平	4.4	?	(0.8)	(2.2)	(7.6)	4.6 × ?	
42	4.91～5.03	(12)	東～西	(6.1)	(3.9)	(13.8)	(41.0)	?	分割される可能性あり	
43	4.97～5.07	(10)	中央が高い	?	?	(10.5)	?	(15.1)	?	分割される可能性あり
44	4.91～4.95	(4)	北～南	(2.3)	?	?	(3.7)	(29.0)	4.5 × ?	
45	4.99～5.05	(1)	?	?	?	?	(4.2)	(11.0)	?	部分的に検出

表16 VII b層水田跡水田区画計測表

()は現存値



第70図 VII b 層水田跡平面図（2）

みで、畔壁が約35cmにわたって途切れていた。S D28から南側の水田面への給水用と考えられる。

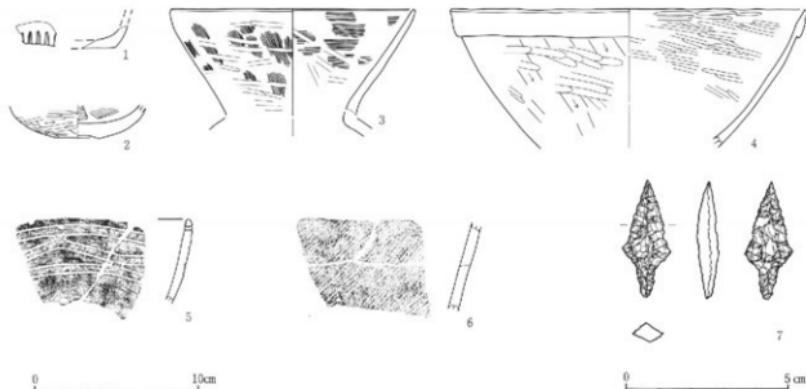
5. 溝跡

当水田跡に伴う溝跡はS D27・28の2条で、VII a1層水田跡まで踏襲される基幹水路である。形態や規模はほぼVII a1層水田跡の項で述べた通りであるが、溝の土手は各水田段階ごとに積み上げられているので土手上面から溝底面までの深さはVII a1層水田跡段階よりもやや浅く、S D27が約80cm、S D28が約60cmである。

III. 出土遺物

耕作土中からは弥生土器片2点、土師器片49点が出土した。遺物の大部分はI層直下にすぐVII b層が露出する5区北部から2区にかけて、I層の搅拌を受けたVII b層上面から出土したもので、確実にVII b層中から出土した遺物はごくわずかである。なお、VII b層中から出土した数少ない遺物の中でも時期差があり、水田跡に伴う遺物を確定することはできなかった。

図化できたのは土師器4点、弥生土器2点、石鉄1点（第71図）である。1は複合口縁壺の口縁部下部と推定されるもので、縦位の刻みがあり、赤彩が施されている。2は小型の壺、3は直口縁の壺、4は瓶と推定される。1は磨滅していて調整技法はよく判らないが、2～4はハケメあるいはヘラケズリの後粗いヘラミガキが施されている。5・6は弥生土器で、6は縄文のみであるが5の鉢は沈線で文様帶が区画され、連弧文が施されている。器形・調整技法の特徴から見て1～4は塙釜式、5は舟形回式と考えられる。



No.	写真 図版	出土層位	種 別	器種	遺存状	法 量(cm)	外 内 色 調		施成	外 内 色 調		
							径	厚		幅	長	幅
1	169-1	2区 VII b層上	土師器	壺	口縁部 小片	?	?	?	?	良好	磨滅、一部ヘラナズ、(赤彩)	複合口縁壺と塙釜
2	169-2	3区 VII b層	土師器	壺	体部～ 底部	?	2.8	?	?	良好	ヘラケズリ→ヘラミガキ	
3	169-4	2区 VII b層上	土師器	壺	口縁部 3/5	(15.0)	?	?	?	良好	ヘラナズ	
4	169-3	2区 VII b層上	土師器	壺	1/4	(22.0)	?	?	?	良好	ハケメー粗いヘラミガキ、(赤彩)	
5	169-5	5区 VII b層	弥生 土器	鉢	1/6	?	?	?	?	良好	ハケメー粗いヘラミガキ、(赤彩)	口縁コナツデ、体部ヘラケズリ→粗いヘラミガキ
6	169-6	3区 VII b層	弥生 土器	壺	体部 小片	?	?	?	?	良好	ヘラミガキ	
7	169-7	VII b層	石器・石器	完形		3.5	?	?	?	良好	(赤) 縄文LR (白) ナデ	
No.	写真図版	出土層位	種 別	遺存状	法 量(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考			
7	169-7	VII b層	石器・石器	完形		3.5	?	?	?	?		

第71図 VII b層水田跡出土遺物

なお、S D27からの出土遺物について、VIIb層水田跡に伴う遺物が混在している可能性があることは前述した通りである。

IV. 耕作土下面の状況

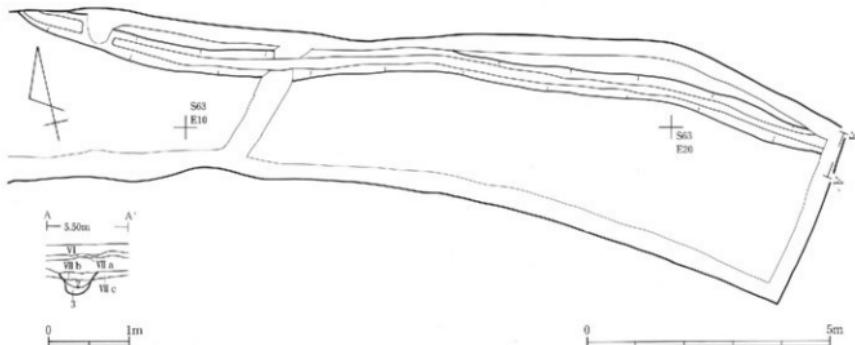
VIIb層水田跡の調査終了後、耕作土VIIb層を除去してその下面（VIIc層上面）を精査した。ほとんど人為的な掘り込みは確認できなかったが、4区から5区南部にかけて東西にのびる溝跡を1条確認した。遺構のプランはVIIc層上面では不明瞭であったため実際にはVIIc層上面で確認している。調査区の断面観察ではVIIc層上面から落ち込んでいることを確認したが、VIIb層上面から掘り込まれた後に耕作されている可能性も考えられる。

幅は約50cm、深さ約25cmで、途中で一部が調査区外となるが4区東端から5区西壁まで約25mの長さを確認している（第72図は4区のみ示した）。堆積土はVIIb層に似た黒褐色粘土で自然堆積層と推定される。

性格は明確ではないが、位置はVIIb層水田跡の畦畔37の北側で畦畔とほぼ平行していることと、堆積土が水田耕作土と類似していることからVIIb層水田の開田直前の時期か、あるいは同水田の経営期間中に掘られたものと推定される。



耕作土除去作業



層位	色調	土質	盛入物・その他
1	2. 5Y3/1 黒褐色	粘土	
2	10YR2/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土少量
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック少量

第72図 SD29 平面・断面図

第3章 プラント・オパール分析

仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

後河原遺跡の発掘調査では、3層準において水田跡が検出された。そこで、これらの遺構における稻作の検証およびその他の層における稻作の可能性について検討する目的でプラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

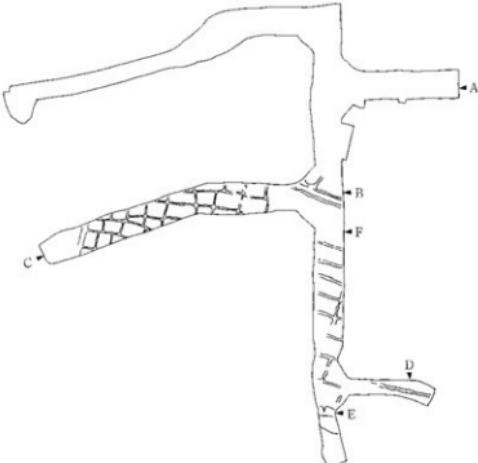
調査の対象となった層準は、上位よりVIIa層(黄褐色砂質シルト)、VIIb層(灰黄褐色シルト質粘土)、VIIc層(暗褐色細砂)、VIIa1層(暗褐色粘土、水田跡検出)、VIIa2層(黒褐色粘土、水田跡検出)、VIIb層(黒色粘土、水田跡検出)、VIIc層(黒褐色粘土)、VIII層(黄褐色粘土)、IX層(黒褐色粘土)である。試料採取地点は、A地点(II区東壁)、B地点(V区東壁)、C地点(III区西壁)、D地点(IV区北壁)、E地点(V区東壁南端)およびF地点(V区東壁)の6地点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾(105°C・24時間)
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスピース添加(直徑約40μm, 約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1g
の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。



第73図 プラント・オパール試料採取地点
本図は編集者が追加した
(S=1/1000、図面はVIIb層水田跡)

検鏡結果は、計数値を試料1 g中のプラント・オパール個数（試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はスキ、タケア科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(穀実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である(杉山・藤原、1987)。

4. 分析結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族(ヒエ属型)、ヨシ属、ウシクサ族(スキ属型)、シバ属、タケア科(ネザサ属型、クマザサ属型、その他)および不明(未分類)である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表17、表18、第74~79図に示した。なお、おもな分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

5. 考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡の調査(探査あるいは検証)を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1 gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合、稲作跡である可能性が高いと判断される。ただし、仙台平野ではこれまでの調査事例から判断基準値を3,000個/gとしている。また、該当層においてプラント・オパール密度にピークが認められれば、上層からの混入の危険性は考えにくくことから、密度が基準値に満たなくとも稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のこととを基準として稲作の可能性について検討を行う。

1) VII a1層

VII a1層はF地点において分析を行った。ここではイネのプラント・オパールが3,200個/gの高い密度で検出された。したがって、当該層において稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) VII a2層

表17 仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析結果(1)

検出密度(単位:×100個/g)

分類群\試料	A地点				B地点				C地点				D地点				
	VII b	VII c	VII b	VII c	VII a2	VII b	VII c	VII	VII a2	VII b	VII c	VII	VII a2	VII b	VII c	VII	
イネ科																	
イネ	29		59	52		35	35						65	7			
キビ族(ヒエ属型)	15		6		14	7							29				
ヨシ属	44	26	29	13	14	42	43	44	7	7	58	37	34	6			
ウシクサ族(スキ属型)	15	7	29	13	7	21	35					7	20	7			
シバ属	7																
タケア科																	
ネザサ属型	22	26	14	32	14	28	7	7	28	15	20	7	6				
クマザサ属型	15				7	7	15	7	14	7	13	34	13				
その他	22	28	57	19	14	7	7	15	29	7	14	7	7	25			
未分類群	354	128	157	123	142	111	234	183	117	69	269	106	115	101			
プラント・オパール総数	501	196	356	258	199	256	376	264	161	125	465	219	203	152			

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²·cm)

イネ	0.85	1.47	1.52	1.02	1.04		1.92	0.19									
キビ族(ヒエ属型)	1.22		0.54		1.16	0.60							1.67				
ヨシ属	2.75	1.28	1.80	0.82	0.89	2.62	2.68	2.77	0.46	0.44	3.67	1.67	2.13	0.40			
ウシクサ族(スキ属型)	0.18	0.08	0.35	0.16	0.09	0.26	0.44						0.69	0.25	0.08		
ネザサ属型	0.10	0.10	0.07	0.18	0.07	0.13	0.03	0.04			0.13	0.07	0.10	0.03	0.03		
クマザサ属型	0.11				0.05		0.05	0.11	0.05	0.10	0.05	0.10	0.25	0.09			

*試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

VII a2層はB地点、C地点、D地点、E地点およびF地点において分析を行った。イネのプラント・オパールはこれらすべての地点において検出された。プラント・オパール密度はE地点以外はいずれも3,000個/g以上の高い値である。また、E地点でも1,900個/gと比較的高い値である。したがって、VII a2層は調査区の全域が水田であったと考えられる。

3) VII b層

VII b層はA～Fの全地点について分析を行った。イネのプラント・オパールはすべての地点で検出された。プラント・オパール密度はD地点で700個/gである他はおよそ3,000個/g以上と高い値である。このことから、VII b層についても調査区のほぼ全域が水田であったと考えられる。ただし、D地点については耕作域ではなかった可能性も考えられる。

4) その他の層 (VI a, VI b, VI c, VII c層, VIII層, IX層)

その他の層でイネのプラント・オパールが検出されたのは、F地点のVII c層のみである。ただし、プラント・オパール密度は600個/gと低い値である。直上のVII b層が10,000個/g以上の高密度であることから、ここで検出されたプラント・オパールは上層からの混入である可能性が高い。したがって、上記以外の層については稻作が行われた痕跡は認められない。

(2) 稲作以外の農耕について

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジユズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型(モロコシが含まれる)などがある。本遺跡では、ヒエ属型がC地点とE地点のVII a2層、A～E地点のVII b層よりそれぞれ検出されている。ヒエ属には栽培種のヒエと野生種のイヌヒエがあるが、現時点では両者のプラント・オパールを識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。したがって、両層においてヒエが栽培されていた可能性が考えられるが、あるいは雑草のイヌヒエ(タイヌ

表18 仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析結果(2)

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群\試料	E地点				F地点							
	VII a2	VII b	VI c	IX	VII a	VII b	VII c	VIII a2	VII b	VII c	VIII	
イネ科												
イネ	19	34							32	26	118	6
ホシタガ (ヒエ属型)	6	6										
リシ属	13	17	13	6				22	6	6	58	94
クシタマ属 (ススキ属型)					6	6	13	26	18	18	12	12
シノ属												
タケ科												
ネヂサ属型	25	6	6	6	70	123	32	52	82	41	61	70
タマザサ属型	6	11	6	6	29	34	6	19	47	47	6	12
その他	6	11	6	26	23	29	6	19	18	12	12	6
未分類等	95	291	81	97	105	190	149	195	210	335	519	205
プラント・オパール総数	177	296	116	142	233	403	213	310	508	664	689	316

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²cm)

イネ	0.56	0.99							0.95	2.23	3.46	0.18
キビ属 (ヒエ属型)	0.53	0.47										
リシ属	0.89	1.06	0.82	0.41				1.41	0.41	0.41	3.68	5.93
ウシタマ属 (ススキ属型)	0.08	0.14			0.07	0.07	0.16	0.32	0.22	0.22	0.15	0.15
ネヂサ属型	0.12	0.03	0.03	0.03	0.34	0.59	0.16	0.35	0.39	0.29	0.29	0.34
タマザサ属型	0.05	0.08	0.05	0.05	0.22	0.25	0.05	0.15	0.35	0.05	0.05	0.09

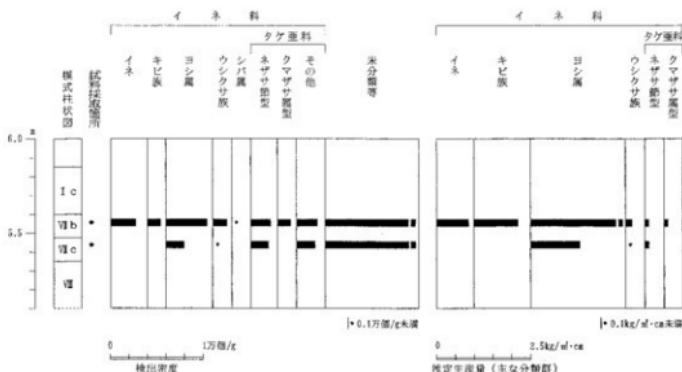
*試料の平均比重を1.0と仮定して算出。

ビエ）である可能性も否定できない。

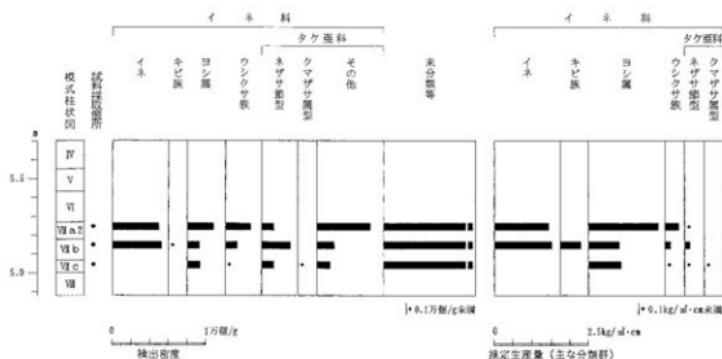
イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に出来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の発明については今後の課題としたい。また、プラント・オパール分析で同定が可能なものは、イネ科の草本植物が主であることから、マメ類、イモ類、野菜類などは分析の対象から除外されている。

6.まとめ

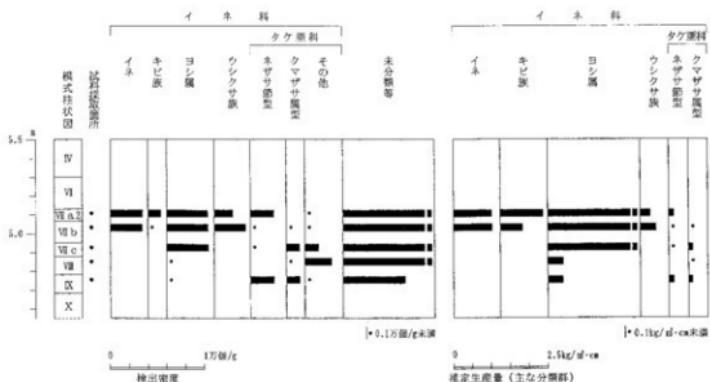
後河原遺跡においてプラント・オパール分析を行い、検出された水田層における稻作の確認およびその他の層における稻作跡の探査を試みた。その結果、耕作層であるVII a1層、VII a2層およびVII b層においてイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらの層において稻作が行われていたことが分析的に確認された。これら以外の層では稻作が行われた可能性は認められなかった。



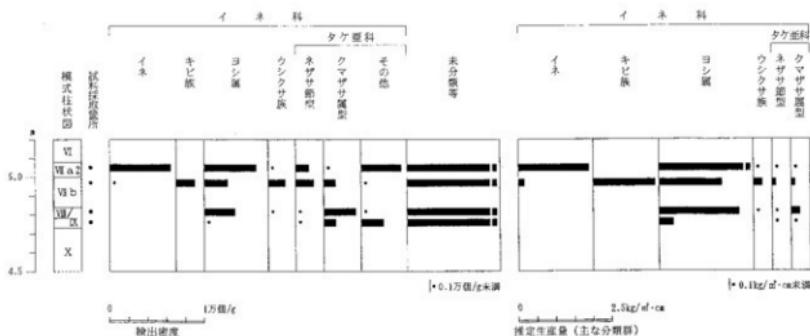
第74図 A地点のプラント・オパール分析結果 *主な分類群について表示。



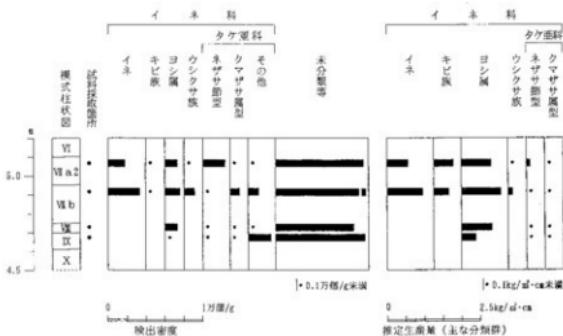
第75図 B地点のプラント・オパール分析結果 *主な分類群について表示。



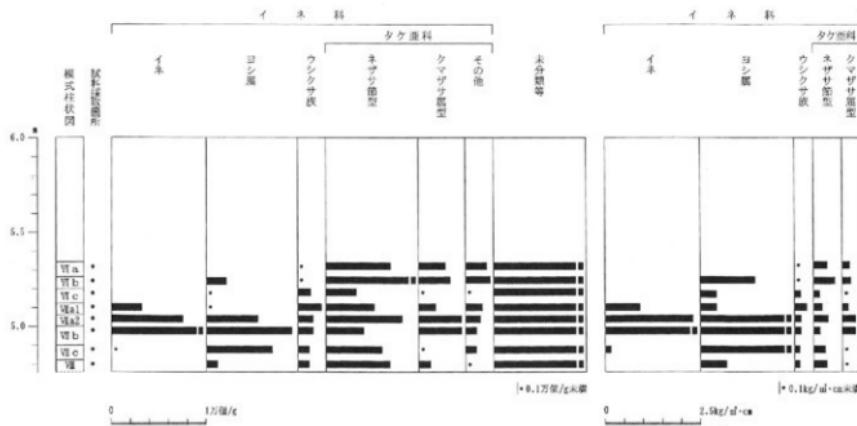
第76図 C地点のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示。



第77図 D地点のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示。



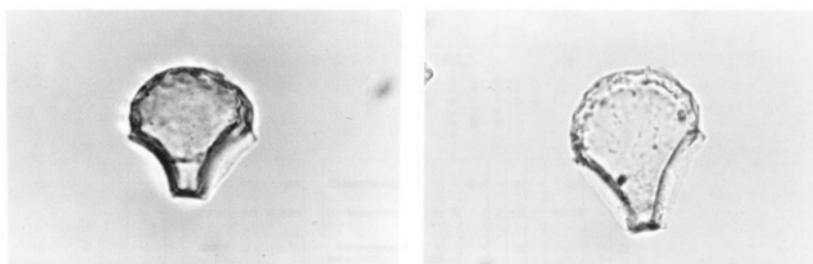
第78図 E地点のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示。



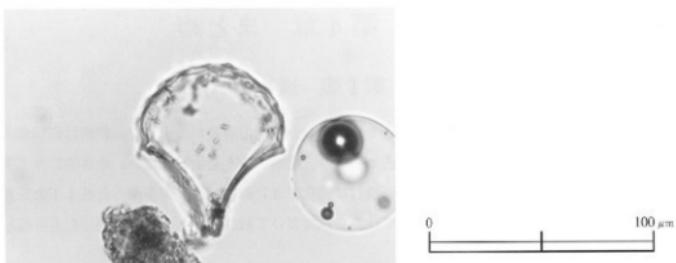
第79図 F地点のプラント・オパール分析結果 推定生産量(主な分類群)について表示。

参考文献

- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追求のための基礎資料として—, 考古学と自然科学, 20: 81-92.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa L.*)生産総量の推定—, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17: 73-85.



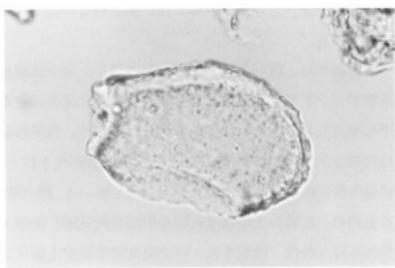
0 100 μm



イネ (F地点 VIIb層)



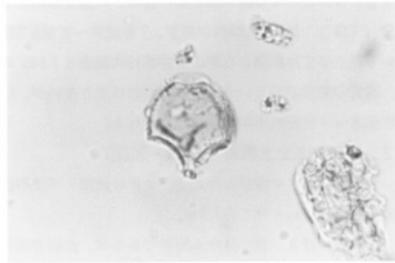
キビ族 (ヒエ属型、A地点 VIIb層)



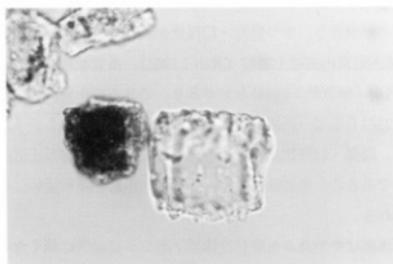
ヨシ属 (F地点 VIIb層)



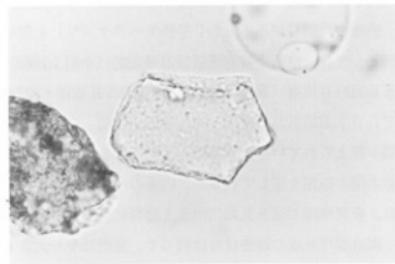
ウシクサ族 (ススキ属、C地点 VIIb層)



シバ属 (A地点 VIIb層)



タケ亜科 (ネザサ節型、F地点 VIIc層)



タケ亜科 (クマザサ属型、F地点 VIIb層)

第4章 まとめ

第1節 遺物について

今回の調査では、土師器・須恵器を中心として約4,800点の遺物が出土した。詳細は表19に示したが、基本層・その他から出土した遺物が全体の73%を占めており、遺構に伴う遺物は少ない。全体的にみて復元・図示できた遺物の数量も限られるため、遺物についての検討は図化できた遺物が比較的多かったS I 1とS K 1についてのみを行うこととし、他の遺構の出土遺物については第2章において触れることのできなかった点を補足する程度に留めておきたい。

1. S I 1 出土土器群（第53図）

土師器は非クロクロ調整の环と壺、須恵器は环蓋と环があるが、全体の器形が判るのは土師器环1点と須恵器环蓋1点である。

土師器环は、浅い丸底で口縁部が内湾し、段や沈線がつかないので、外面調整は口縁部～体部がヘラミガキ、底部がヘラケズリである。このタイプの环は元々の在地の土器の系譜を引くものではなく、関東系の土器の影響の下に成立したと考えられている（太田：1994）。調整技法がやや異なるが、これと類似した器形のものは郡山遺跡第15次調査S I 143（木村他：1982）や中田南遺跡S I 17・S I 19—同III群土器（太田：1994）などで認められ、これらには内外に段の付く在地の土器が共伴している。郡山遺跡—S I 143では須恵器が7世紀代のもので年代にずれがあるものの、在地の土師器は高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）や清水遺跡第VI群土器（丹羽他：1981）との類似から奈良時代と推定され、中田南遺跡第III群土器は8世紀前葉にその中心が求められている。

須恵器环蓋は偏平な宝珠様のツマミと極めて低いカエリが特徴で、これは陶邑編年では第III形式第3段階に相当する。このような特徴の須恵器环蓋は、大蓮寺窯跡第2・3次調査1号灰原（篠原：1993）や福島市小倉寺高畑2号窯（工藤他：1969）に類例があり、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられている。なお、これよりもややカエリが高いものとしては前掲した郡山遺跡第15次調査S I 143のものがある。

遺物の数量が少ないので細かな検討はできないが、以上のような点と他の出土遺物の様相から、S I 1は概ね7世紀末～8世紀前半頃に位置づけられる。

2. S K 1 出土土器群（第29・30図）

土師器はロクロ調整の环と壺、ロクロ使用・不使用が不明な甕があり、須恵器は环がある。ここでは土師器环と須恵器环について見てみたい。

土師器环は3点共に異なる器形であるが、底部の切り離し・再調整技法と底径・口径比の関係を見てみると、切り離し法は不明で底部あるいは底部～体部下端に手持ちヘラケズリ調整される第29図7と9が底径・口径比が比較的大きく（0.47と0.50）、回転糸切無調整の8は底径・口径比が小さい（0.37）。

底部の再調整があるもの（手持ちヘラケズリ）と無いものが混在し、かつ底径・口径比が0.37～0.50程度である例としては、白石市青木遺跡第21号住居（小川：1980）、藏王町東山遺跡土器溜（真山：1981）、多賀城跡60次調査S E 2101B III層（真山：1991）、同遺跡S K 2270・2272（丹羽・柳沢他：1994）などがあり、これらの土器群はそれぞれ青木遺跡第21号住居→東山遺跡土器溜、多賀城跡S E 2101B III層→同遺跡S K 2272→同遺跡S K 2270という変遷が捉えられている。本遺跡の土師器环と比較してみると、底径・口径比は青木遺跡の土器群と東山遺跡の土器群の中間の様相を呈しているが、内面のヘラミガキが横方向であることを加味すると、やや青木遺跡の例に近い。なお、多賀城跡ではS K 2272出土土器群に最も近いと考えられる。

須恵器环6点の器形はほぼ同じで、底径はやや大きく、体部はやや丸みを帯びた体部下端から直線的に開くもの

である。底部の切り離し・再調整技法と底径・口径比の関係をみると、切り離し後（切り離し法は不明）底部全面あるいは底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施される1・2が底径・口径比0.57と0.58で、回転糸切り無調整の3～6は0.51～0.57で平均値は0.54とやや小さい。

同様の特徴を持つものは、前掲した多賀城跡S K2272に類例がある。多賀城跡S K2272の須恵器は底径が比較的大きく（底径・口径比0.48～0.68）体部が直線的な器形が多い点は当遺跡のものと類似している。ただし底部の切り離しと再調整技法の比率がやや異なっており、当遺跡では回転糸切り無調整のものが主体となっているのに対

遺構層位	弥生土器	土師器	須恵器	陶器	磁器	瓦	土製品	石製品	石器	金属製品	その他の
S I 1		3.8	1.6								焼けた粘土塊1
S I 2		3.8	1.2				土鍋 1				
SB 1	1.05	4.0					土鍋 3				焼けた粘土塊2
SB 2	2	2									
SB 3	1.8	3									
SB 4	4.7	1.2									
SB 5	1.35	3.6					土鍋 1		鉄釘 1		
SD 1		4	3								現代の磁器物品3
SD 5		4	2								
SD 7		2									
SD 8		1									
SD 9		7									
SD10		4									
SD11		7	8								
SD12		1									
SD13		1.2	3								
SD14			常滑 1								
SD16		7.7	3.5								焼けた粘土塊2
SD17		3.7	1.8								
SD18		1.3	6								
SD19		6.3	1.7								鉄釘 1
SD21		6	5								
SD23		1.9	2								
SD24		1.0	9								
SD27		4.4									
SK 1	1.02	5.1					土鍋 1		刀子 1		
SK 2	2.6	2									
SK 3	3.3	1									
SK 4	1.9										焼けた粘土塊1
SK 5	2.3	2									
SK 6	2.3						1		鉄釘 1		
SK 9	1										
SK10		1									
P 1		3	1								
P 5		3	1								焼けた粘土塊1
P 6		3									
P 7		1									
P 8		1									
P 33		3									
P 35		7	1								
P 43		1									
P 46		1									
P 60		1.7	1.3								
P 61		8	2								
P 83		1									
P 86		1									
P 99		1									
P100		8									
P101		2									
P102		8	1								
P108		2									
P111		6									
P113		1									
P122		1									
P124		1									
I 磁	3	1.051	2.08	4	6	1	土鍋 1			1	
II 扇	1	6.89	2.18	1.0	3		土鍋 2				
III 桶		1.95	7.2								
IV 箕		2.79	8.1								鉄釘 4
V 磁		5.6	2.1								
VI 治		2.2	1.1								
VIIa 1 磁		2									
VIIa 2 磁		1.5									
VIIb 磁	2	4.9									石鍋 1
漁 不明		3.73	9.4	2							鉄洋 2
計	6	57.14	1.01.9	1.7	9	2	1.1	1	1	9	現代磁器 3、焼けた粘土塊 7、鉄洋 2

表19 遺物集計表

して、SK2272の場合はヘラ切り無調整のものが多い（註1）。

以上のようなことからSK1出土の土器群の編年的位置を考えてみる。全体的な様相は多賀城跡SK2272出土土器に類似していることから、SK1は多賀城跡SK2272とほぼ同時期であると推定されるが、SK1の須恵器坏には回転糸切り無調整のものが多いことからSK2272よりも新しい要素も持っているとも言え、このことからすると、SK1出土の土器群の方がやや新しい時期の所産である可能性もある。ただし、多賀城跡でSK2272に後続する時期とされるSK2270出土土器群と比べると、SK2270の方が若干新しい様相を示す（註2）ことから、SK1の土器群は多賀城跡SK2270の時期までは下らないと考えられる。したがって、SK1の年代は多賀城跡SK2272と同じく9世紀第3四半期を中心とする頃と推定される（註3）。

3. その他の出土土器

他の遺構は出土遺物が少なく、図化できた土器があるのはS12、SB5、SD11・13・19・27、P5・60、SK5・10、基本層I・VIIb層のみである。

(1) S12出土土器（第10図）

土師器坏は椀状のもので、このような器形の坏はSK1出土の体部が逆台形をした坏（第29図7）よりも後出のタイプであることが明らかにされている（註4）。他に図化できた遺物が回転糸切り無調整の須恵器坏1点のみであるので断定はできないが、これらは大体9世紀後半～10世紀前半頃を中心とする時期の所産と考えられよう。

(2) SB5、SD11・13・19、P5・60、SK5・10、基本層I層出土土器

これらの遺物についてはすべて平安時代の所産で、その中でも坏類に関しては平安時代前半を中心とする時期のものと考えられる。

(3) SD27出土土器（第64図）

S27出土遺物はすべてが非クロコ調整の壺のみである。器面の調整技法を見ると、ハケメ、ハケメ後ヘラミガキ、ヘラケズリ後ヘラミガキなどのものがあり、塙釜式～南小泉式期の所産であると考えられるが、全体形が判るものがないのでこれ以上の時期の限定はできない。

(4) 基本層VIIb層出土土器（第71図）

VIIb層上面からは土師器（1～4）、層中からは弥生土器（5・6）と石鏡（7）が出土している。土師器は古墳時代前期の塙釜式に比定されるものである。器種が少なく全体形が判るものがないため詳細な時期区分はできないが、口縁部下端に刻みがほどこされる2段口縁の壺（註5）があることから塙釜式の中でも古い段階のものも含まれている可能性がある。弥生土器のうち時期が限定できるのは（5）のみで、文様構成の特徴から中期の柳形回式に比定される。

VIIb層中から出土した弥生土器や石器については、VIIb層水田跡に伴う可能性はあるが、周辺からの混入やVIIb層水田によって破壊された古い遺構（水田も含む）に伴う遺物である可能性もあり、断定はできない。

第2節 遺構について

1. 本来の遺構掘り込み面の推定

第2章第1節で述べたように、調査時の確認面と本来の遺構掘り込み面とが一致しない場合がある。そこで遺構の切り合い関係と出土遺物を検討することによって、①遺構プランの確認面、②本来の遺構掘り込み面とその推定根拠、③調査時の確認面と本来の遺構掘り込み面との一致・不一致についてまとめたのが表20である。すべての遺構について確定することはできなかったが、III層～VIIc層まで推定される遺構面ごとに記載した。

2. 遺構の変遷

遺構の掘り込み面について以上のように推定できた。実際に掘り込み面が確定できた遺構は少なく、また同一

面の遺構であっても必ずしも同時期のものとは限らないため、詳細な遺構の変遷を明らかにすることはできなかつたが、これらの遺構の変遷に各層の形成過程を加えてまとめたのがP92である。時期を確定できた遺構については中に示したが、時期を限定できない遺構もあるため、各層段階における上限・下限を明らかにすることはできなかつた。

これによって当遺跡における遺構の変遷を概観してみる。なお、各層上面の遺構は直上層によって覆われているわけであるが、各遺構は必ずしも直上層の堆積によって廃絶したわけではなく、廃絶後に埋没する場合もあり得る。今回は両者を区別することはできなかつた。

古墳時代前～中期、集落については明らかではないが、自然堤防上から南側の低地にかけてVII b～VII a1層水田が

遺構名	プラン図説明	本末の遺構面とその測定概要	プラン図説明・本来の法縫面との一致・不一致 不一致の場合、本来の遺構面で確認できなかった理由 × 墓土と頂面が類似するので見分けにくい
S D 17	IV層上層	田畠上層 調査区東壁・西壁で確認	○
S B 1 - P 57～59 - P 22～26, 49 - P 27, 31, 32 - P 34, 62	IV層上層	IV層上層 平面で確認、P59は調査区東壁でも確認	○
V a 層上層	IV層上層	IV層上層 P57～59と同一の種物	×
S D 9 - vIb層上層	IV層上層	IV層上層 P57～59と同一の種物	×
S D 10	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 11	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 12	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 13	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 16	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 18	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S D 19	IV層上層	IV層上層 平面で確認	○
S I 2	V a 層上層	V a 層上層 遺物の種類がS K 1 とほぼ同じ	×
S B 4 - P 68 - P 63～67 P 69, 70	V a 層上層	V a 層上層 平面で確認	○
V a 層上層	V a 層上層	V a 層上層 P68と同じ建物	×
S I 1 - VI層上層	V a 层上层	V a 层上层 S B 4 と形態・方向が類似	×
- P 74	V a 层上层	V a 层上层 S B 4 と形態・方向が類似	○
- P 75	S I 1 层上层	S I 1 层上层 S B 4 と形態・方向が類似	○
- P 76, 77	V b 层上层	V b 层上层 S B 4 と形態・方向が類似	○
S K 1	V a 层上层	V a 层上层 S B 4 と形態・方向が類似	○
S I 11	V a 层上层	V a 层上层 V a 层の小構体遺構 (VI層上面確認)	×
S B 6 - P 87, 88, 93 P 92 - P 94～96	V a 层上层	V a 层上层 V a 层の小構体遺構 (VI層上面確認)	○
S D 20	S B 4 - P 68底面	S B 4 - P 68底面	×
S D 16底面	V b 层上层	V b 层上层 P87, 88, 93, 101と同じ建物	○
V b 层上层	V b 层上层	V b 层上层 S D 16と同じ建物	○
S D 25	V a1 层上层	V a1 层上层 平面・調査区東壁で確認	○
S D 26	V a1 层上层	V a1 层上层 平面・調査区南壁で確認	○
S D 27	V a1 层上层	V a1 层上层 平面・調査区東壁・西壁で確認	○
S D 28	V a1 层上层	V a1 层上层 平面・調査区東壁・西壁で確認	○
S D 29	V c 层上层	V c 层上层 平面で確認	×
X層上層	?	?	?
S D 6	V b - X層上層	?	?
S D 7	X層上層	?	?
S D 8	V b 层上層	?	?
S D 9	V a - vIb層上層	?	?
S D 14・15、21～24	V a 层上層	?	?
S D 30	V a 层上層	?	?
S K 2～10	V a 层上層	?	?
P 1～21	IV層上層	?	?
P 33, 35, 36, 60	S D9～vIb層上層	?	?
P 41～48, 61	V b 层上層	?	?
P 99～126	V a 层上層	?	?
5区の小構体遺構群	IV層上層	堆積物が山層、調査区壁で確認	×
5区の小構体遺構群	V a 层上層	堆積物がIV層、調査区壁で確認	×
5区の小構体遺構群	V b 层上層	堆積物がV a 层、調査区壁で確認	×
5区の小構体遺構群	V b 层上層	堆積物がV b 层、調査区壁で確認	×

表20 遺構の検出状況と掘り込み面

営まれる。開田の時期については弥生時代にまで遡る可能性はあるが確定はできない(後述する)。これらの3面の水田跡のうち最も上層のVIIa1層水田はVIc層の堆積によって埋没している。

その後VIb層・VIa層・Vb層(Vb層畑の母材層)が堆積し、上面にはSI1・SB6などの建物が造られ、Vb層畑が耕作されて集落が営まれる。SI1の時期は7世紀末～8世紀前半を中心とする頃と推定されるが、他の遺構の年代は明らかではない。

Va層(Va層畑の母材層)堆積後、上面にはSI2やSB4・5などの建物とSK1が造られ、Va層畑が耕作されるようになる。SI2やSK1は9世紀後半頃を中心とする時期と推定される。

IV層(IV層畑の母材層)堆積後、上面にはSB1・2・3・7などの建物が造られ、IV層畑が耕作されている。建物の時期は方向がVa層上面の遺構群と類似することからVa層上面の遺構群と近接する9世紀末頃と考えられるが、IV層畑の耕作土中に灰白色火山灰が含まれることなどから、畑については10世紀前半頃も耕作されていたことが判る。建物や畑の下限については不明であるが、これ以後に付近において集落が営めることはなかったようである。

この他、IV層上面にはSD10～13・16・18・19などの溝跡がある。これらの溝のプランはIV層畑の耕作によって乱されていないことから、溝の時期はIV層畑の耕作以降であることが明確であるが、具体的な年代については不明である。また、土地の利用形態もはっきりしない。

遺構の変遷

[土砂の供給など]	[建物・溝・土坑などの遺構]	[水田・畑など]	[備考]
III層の形成	S D17		
	⋮	⋮	⋮
III層畑の母材層堆積			III層畑耕作
↑	SD10～13・16・18・19		
灰白色火山灰降下	↑	↑	灰白降下は10世紀前半頃
IV層の形成	SB1～3・7	IV層畑耕作	
↑	⋮	⋮	
IV層畑の母材層堆積			
↑	↑	↑	
Va層の形成	SB4・5 SI2 SK1	Va層畑耕作	SI2は9世紀後半～10世紀前半頃 SK1は9世紀第3四半期頃
↑	⋮	⋮	
Va層畑の母材層堆積			
↑	↑	↑	
Vb層の形成	SB6 SI1 SD20	Vb層畑耕作	SI1は7世紀末～8世紀前半頃 集落の形成
↑	⋮	⋮	
Vb層畑の母材層堆積			
VIa層堆積			
VIb層堆積			
VIc層堆積			
↑		↑	
VIIa1層水田の母材層堆積		VIIa1層水田耕作	古墳時代中期頃
↑		↑	
VIIa2層水田の母材層堆積		VIIa2層水田耕作	
↑		↑	
VIIb層水田の母材層堆積		VIIb層水田耕作	古墳時代前期頃

III層（III層畑の母材層）堆積後の遺構はSD17のみであり、III層畑の範囲や周辺の状況、年代などについては不明である。

3. 掘立柱建物跡について

P92で示したように古代の遺構は大きく3段階（Vb・Va・IV層段階）に分けられるが、そのうちのVa～IV層段階において倉庫を含む掘立柱建物跡が方向をそろえて出現し、しかも堀り方の規模が比較的大きな建物が3棟（SB1・4・5）伴うことが明らかになった。IV層段階の遺構の年代がはっきりしないが、Va層上面のSK1は出土した土器群の年代から9世紀第3四半期と推定できたので、IV層をVa層段階に後続する近接した時期であると仮定すれば、大体9世紀第4四半期を中心とする時期と考えられる。つまり、Va～IV層段階の9世紀後半頃を中心として、規模の大きな建物を含む多数の掘立柱建物跡が企画性を持って建てられていることになる。当遺跡周辺では、北東1.5kmにある中田畑中遺跡（長島・青沼：1983）や南方3kmにある鶴巻前遺跡（大友：1993）で堀り方規模の比較的大きな平安時代の掘立柱建物跡が調査されており、特に中田畑中遺跡例と共に多くの認められるが、その性格について明らかにすることはできなかった。

4. 水田跡について

VIIa1層・VIIa2層・VIIb層水田跡と連続する3面の水田跡を検出したが、これらの水田跡は基幹水路が踏襲して使用され、区画方法も共通点があるなど、共に同じ構造を持っている。

水田跡の時期については出土遺物が限られるので確定できないが、以下の①～③の判断材料がある。

①最上層のVIIa1層水田跡に伴うSD27から塩釜～南小泉式の土師器が出土している。

②最下層のVIIb層水田跡上面から塩釜式の土師器が出土しており、さらにこれらの中には塩釜式の中でも古い段階の遺物が含まれている。

③最下層のVIIb層水田跡の耕作土中からは土師器に混じって楔形匣式の弥生土器が出土している。

これらのうち①・②の事例から考えると、各水田跡それぞれの時期については細分はできないが、VIIb～VIIa1層水田跡を合わせた経営期間は上限を塩釜式期、下限を南小泉式期とする頃と考えられる。

なお、③によるとVIIb層水田跡の上限は弥生時代中期にまで遡る可能性がある。この状況は第2次調査のVII層水田跡と似ている（註6）が、基本層序の項で述べたように今回の調査区と第2次調査区との間で明確な層の対応ができないために両水田跡をもって互いに補完させることはできない。また、耕作土中の弥生土器は水田跡の上限を示すのではなく、水田跡によって弥生時代の遺構が破壊された結果を示している可能性もあること、さらに土師器に比べて該期の遺物の数が圧倒的に少ないとから、VIIb層水田跡の上限は弥生時代にまで遡る可能性は否定はできないが、断定は避けたい。

（註）

1. 報文によると底部の切り離し法と再調整技法の比率は、ヘラ切り無調整が69.8%、回転糸切り無調整が8.3%、切り離し後回転ヘラケズリ調整が14.4%、切り離し後手持ちヘラケズリ調整が5.2%である。
2. 多賀城跡SK2270出土の土師器環は口縁部が外反するものがやや多く、内面のヘラミガキの方向は放射状のものが98%を占めていることなど、当遺跡SK1の遺物よりも新しい要素が認められる。
3. 本文中では触れなかったが、河南町須江関ノ入道跡第11号窯跡（佐藤：1993）では、底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるIII B類や回転糸切り無調整のIV C類あるいはIV D類などが本遺跡SK1のものと類似している。当遺跡の方が底径・口径比がやや大きい（関ノ入道跡第11号窯跡のIII B・IV C・IV D類共に底径・口径比の平均は0.52）点は異なるが、同窯跡ではヘラ切りのものが含まれるもの、主体は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されるものと、回転糸切り無調整のものであり、本遺跡SK1と共通する点が多い。

しかし、須江関ノ入道跡第11号窯跡の年代は8世紀末～9世紀第1四半期と考えられており、この年代観をそのまま当遺跡SK1

第2節 遺構について

に当てはめるとかなりのずれがあるが、県内の須恵器は各空隙群によって回転糸切り技法の導入の時期が異なるなど、生産地の空隙群によって異なる変遷をすることが明らかにされている（佐藤：1993）ので、SK1の須恵器の产地は須江間ノ人跡群ではなく、別の空隙群と推定される。

4. 小川：1987、貞山：1991、柳沢：1991など
5. 近くでは名取市鶴巣遺跡に類例がある。
6. 第2次調査のⅧ層水田跡の時期は「平安時代中期以前」とされており、弥生時代とは限定されてはいないが、水田外のⅦ層や水路から「弥生土器らしきものが1点」と「石礫に酷似した打製石片が1点」出土している。

引用・参考文献

- 赤沢精一 1996「中在家南遺跡出土の弥生土器について」「中在家南遺跡他 仙台市荒井土地地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第213集 仙台市教育委員会
- 氏家和典 1957「東北土師器の形式分類とその編年」「歴史」第14期 東北史学会
- 太田昭夫 1994「中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集 仙台市教育委員会
- 大友 透 1993「仙台東道路遺跡調査概報図」名取市文化財調査報告書第31集 名取市教育委員会
- 小川淳一 1980「青木遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書第71集 宮城県教育委員会
- 小川淳一 1987「五本松塚跡 都市計画道路「川内・南小泉線」開通遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第99集 仙台市教育委員会
- 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」「研究紀要I」宮城県多賀城跡調査研究所
- 加藤道男・阿部博志 1980「樹音呂遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」「宮城県文化財調査報告書第72集」宮城県教育委員会
- 加藤正範 1982「後河原遺跡」「年報3」仙台市文化財調査報告書第41集 仙台市教育委員会
- 木村清二他1982「郡山遺跡II—昭和56年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第38集 仙台市教育委員会
- 酒井清治・伊藤博幸編 1995「須恵器集成図録 東日本編II」堀山閣出版
- 斎野裕彦他1987「富沢一高沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1984「後河原遺跡—平安時代以前・中世の水田跡の調査—」「仙台市文化財調査報告書第71集」仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1998「畠跡の歴史と耕作底について—仙台市域の考古学的事例から—」「人類誌集報 1998」東京国立大学考古学報告3「津利利用の人類誌調査・飛驒山峡の人類誌調査グループ」
- 佐藤敏幸 1993「須江間跡群 開ノ入遺跡—陸奥海道地方最大の須恵器生産地—」河南町文化財調査報告書第7集 河南町教育委員会
- 佐藤智雄他1985「宮城県仙台市後河原遺跡」「埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第1集 埋蔵文化財発掘調査研究所 後河原遺跡調査団
- 幾原信彦 1993「大蓮寺跡—第2・3・4次発掘調査報告書—」仙台市文化財調査報告書第168号 仙台市教育委員会
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要VII」宮城県多賀城跡調査研究所
- 領藤 隆 1984「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」「宮城の研究1」著文堂
- 仙台市史編纂委員会 1998「仙台市史 特別編2 考古資料」仙台市
- 辻 秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年—その2」「東北学説論集—歴史学・地理学—第27号」東北学院大学学術研究会
- 中村 浩他1978「陶色II」「大阪府文化財調査報告書第29号」大阪府教育委員会
- 中村 浩他1978「陶色III」「大阪府文化財調査報告書第30号」大阪府教育委員会
- 長島栄一・青沼一民 1983「中田畠中遺跡—発掘調査報告書—」「仙台市文化財調査報告書第53集」仙台市教育委員会
- 丹羽 茂他1981「前水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」「宮城県文化財調査報告書第77集」宮城県教育委員会
- 丹羽 茂 1994「五万崎地区」「多賀城跡」「多賀城跡調査研究所年報1994」宮城県多賀城跡調査研究所
- 松本秀明 1994「臨海冲積平野と軟弱地盤」「仙台市史 特別編1 自然」仙台市
- 箕山 恒 1981「奥山遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書V」「宮城県文化財調査報告書第81集」宮城県教育委員会
- 真山 哲 1991「II 第60次調査」「多賀城跡」「多賀城跡調査研究所年報1991」宮城県多賀城跡調査研究所
- 村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」大戸古窯跡群検討会
- 柳沢和明 1991「山 第61次調査」「多賀城跡」「多賀城跡調査研究所年報1991」宮城県多賀城跡調査研究所

写 真 図 版



写真 1
VIIa1 層水田跡と
SD28 確認状況
(5 区・北から)



写真 2
VIIb 層水田跡検出状況
(3 区・西から)



写真 3 VIIb 層水田跡確認状況 (3 区・北から)



写真 4 5 区東壁 (S29 ~ 32 付近)



写真5
2区北壁 (E6 ~ 9付近)

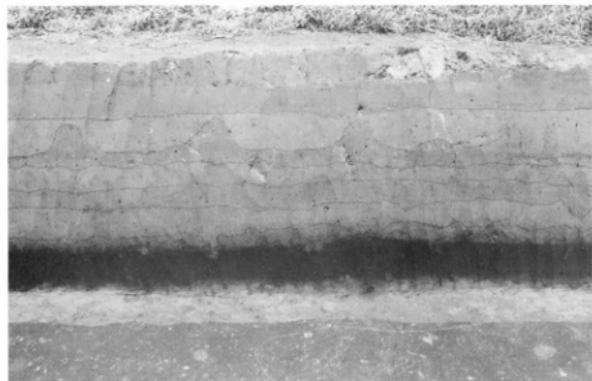


写真6
3区北壁 (W 40 ~ 45付近)

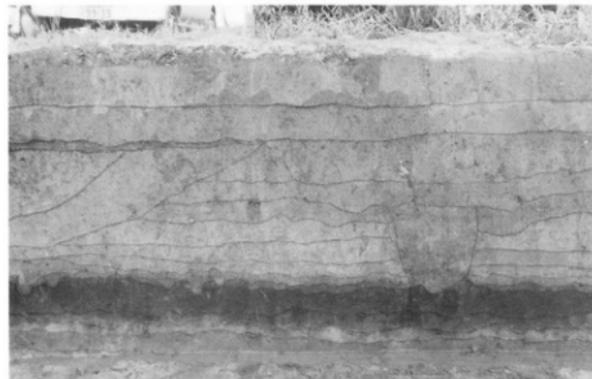


写真7
5区東壁 (S27 ~ 30付近)

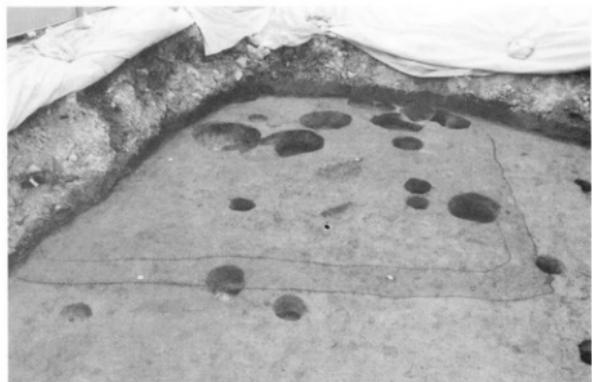


写真 8
S12 確認状況（西から）

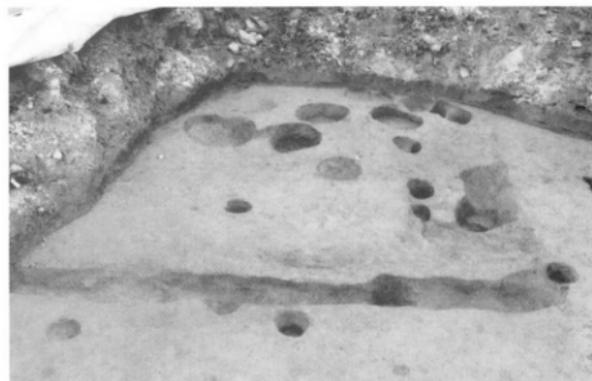


写真 9
S12 完掘状況（西から）



写真 10
SB1 檻認作業（西から）

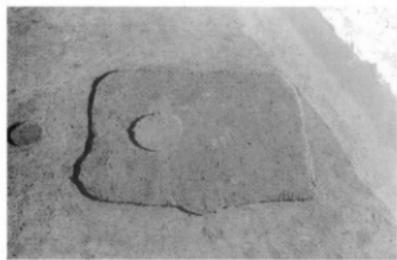


写真11 SB1-P58 確認状況



写真12 SB1-P 49 断ち割り状況



写真13 SB1 - P31 断面



写真14 SB1-P59 断面



写真15 SB1 完成状況(1)、(西から)



写真16 SB1 完掘状況（2）、（西から）



写真17 SB1 完掘状況（3）、（北から）



写真18
SD1～3 確認状況
(東から)



写真19
SD1～3 完成状況
(東から)



写真20 SD2 断面 (東から)



写真21 SD3 断面



写真22 SD4～7 確認状況（南西から）

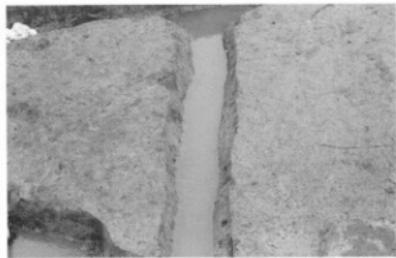


写真23 SD4 完掘状況（南から）



写真24 SD6 確認状況（西から）



写真25 SD6 完掘状況（東から）



写真26 SD6 断面（東から）



写真27 SD8 確認状況（南から）



写真28 SD9 完掘状況（西から）

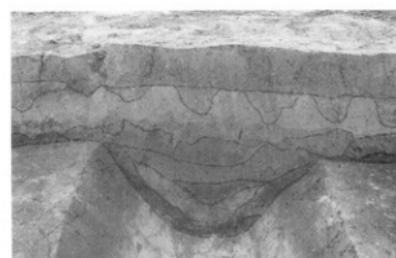


写真29 SD9 断面（東から）

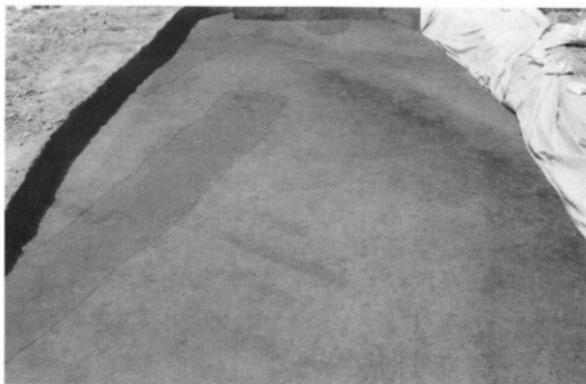


写真30
SD10～13 確認状況
(東から)



写真31
SD10～13 完壊状況
(東から)



写真32
SD12 完壊状況
(南から)

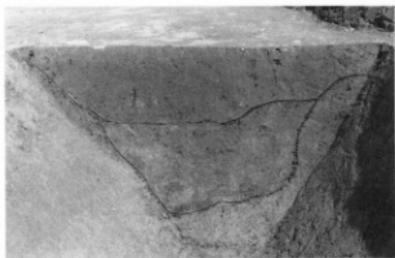


写真33 SD11 断面（西から）



写真34 SD12 断面（南から）



写真35 SD14・15 確認状況（南から）



写真36 SD14 断面（南から）



写真37 SD15 断面（南から）

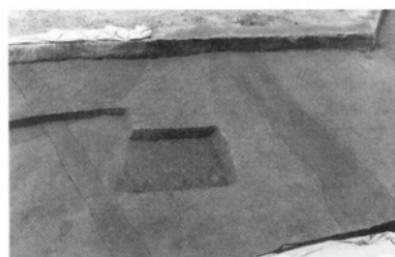


写真38 SD17・18 確認状況（東から）

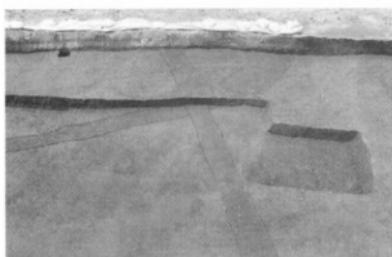


写真39 SD18・19 確認状況（東から）



写真40
SD16・17 完掘状況
(西から)



写真41
SD17 完掘状況
(西から)



写真42
SD18・19 完掘状況
(北から)

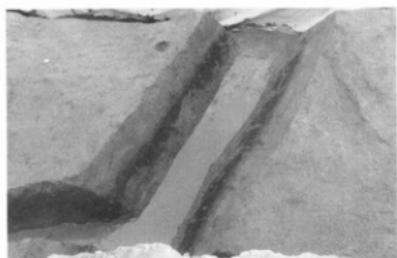


写真43 SD21 完掘状況（南から）



写真44 SD21断面（南から）



写真45
SD22～24・30 確認状況
(南から)



写真46
SD22・23 完掘状況
(南から)



写真47 SD24 完掘状況（東から）



写真48 SD24 断面（西から）



写真49 SD23 断面（東から）



写真50 SD30 断面（東から）



写真51 SK1 確認状況（南から）



写真52 SK1 断面（南から）

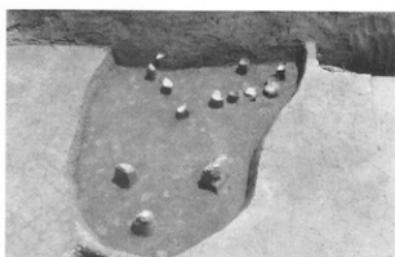


写真53
SK1 遺物出土状況（西から）



写真54 SK5 遺物出土状況（南西から）



写真55 SK9 完掘状況（東から）



写真56 SK9 断面（東から）



写真57 SK10 完掘状況（東から）



写真58
IV層上面小溝状遺構群
完掘状況（3区・東から）



写真59 SB3 確認状況（西から）



写真60 Va層上面小溝状造構群確認状況
(5区S20付近、東から)



写真61
Va層上面小溝状造構群
確認状況
(5区S40付近・西から)



写真62
Va層上面小溝状造構群
完掘状況
(5区S40付近・西から)



写真63
SB4 完掘状況
(北東から)

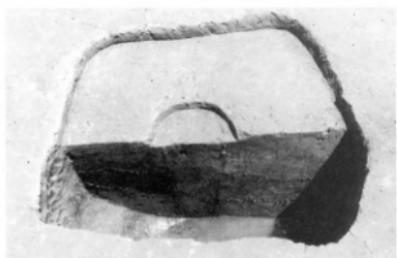


写真64 SB4 - P65 断面 (南西から)



写真65 SB4 - P66 断面 (南西から)



写真66
SB4 - P69 と SD17 断面
(東から)



写真67
SB5 確認状況(1)
(南から)



写真68
SB5 確認状況(2)
(南から)



写真69
SB5 完掘状況
(南から)

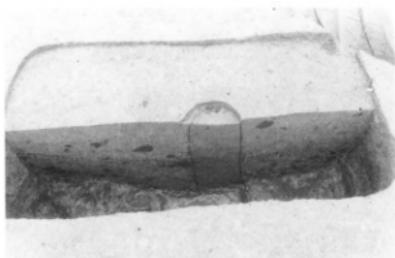


写真70 SB5 - P71断面（南から）

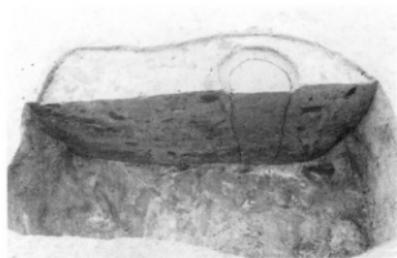


写真71 SB5 - P73断面（西から）

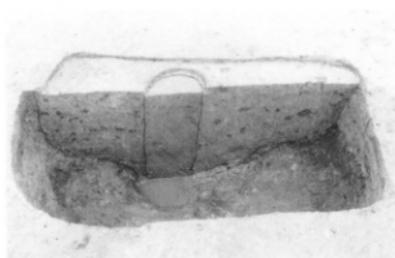


写真72 SB5 - P75断面（西から）



写真73 SB5 - P76断面（西から）

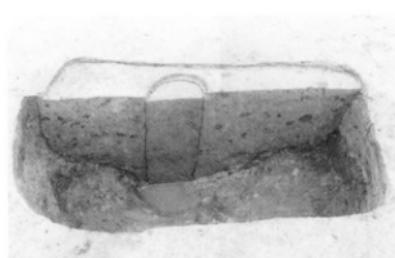


写真74 SB5 - P72断面（南から）



写真75 SB5 - P73完掘状況（西から）



写真76 SB5 - P74完掘状況（西から）



写真77 SB5 - P75完掘状況（西から）



写真78 SD20と土手の疊状状況（南西から）



写真79 SD20断面（南西から）



写真80
SD20 完掘状況
(南西から)



写真81
Vb層上面小溝状遺構群
完掘状況
(西から)



写真82 SI 1 床面検出状況（南東から）



写真83 SI 1 カマド



写真84
SI 1 床面の精査



写真85
SI 1 柱穴等確認状況



写真86 SI 1 南北断面(1) (西から)

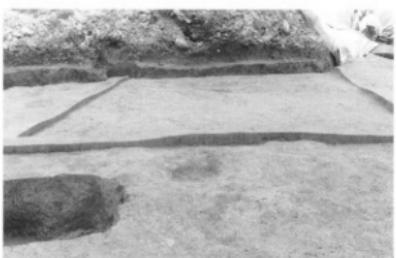


写真87 SI 1 南北断面(2) (西から)



写真88 SI 1 - P3断面



写真89 SI 1 - P8断面



写真90 SI 1 完掘状況 (南東から)

写真91
SI 1 摂り方実掘状況
(南東から)



写真92
SI 1 摂り方工具痕
確認状況(1)



写真93
SI 1 摂り方工具痕
確認状況(2)

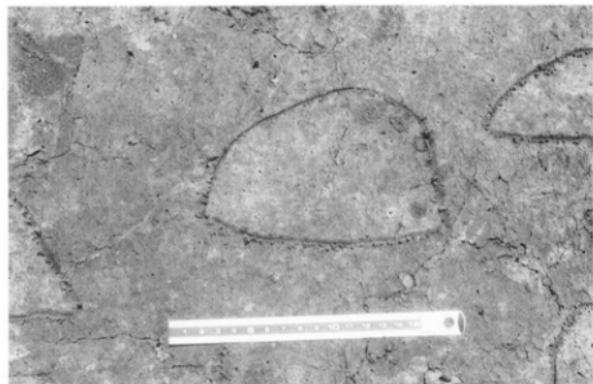




写真94
SB6 完掘状況(1)
(南西から)



写真95
SB6 完掘状況(2)
(南西から)



写真96
Via 層上面小溝状道構群
完掘状況
(S40 付近、東から)

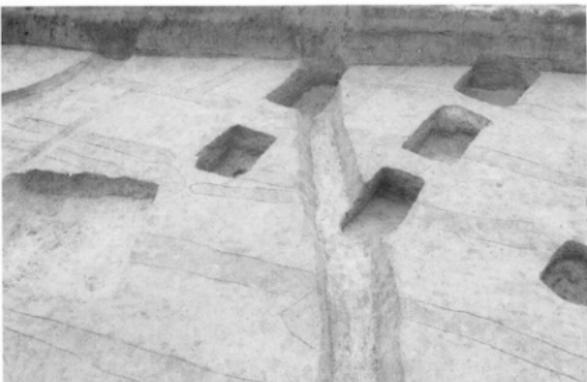


写真97
Via 層上面小溝状遺構群
確認状況
(S30 付近、東から)



写真98
Via 層上面小溝状遺構群
実測状況
(S30 付近、東から)



写真99
Via 層上面小溝状遺構群
実測状況
(北東から)

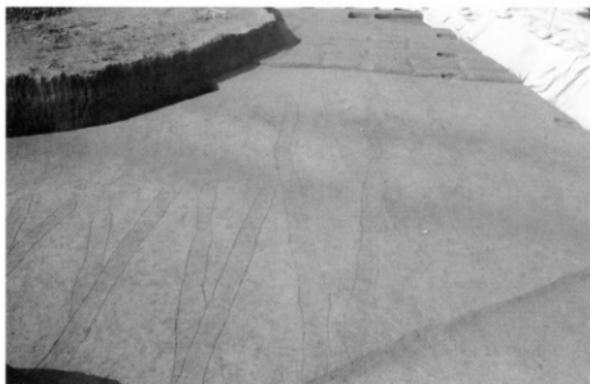
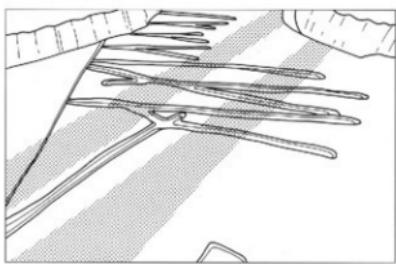
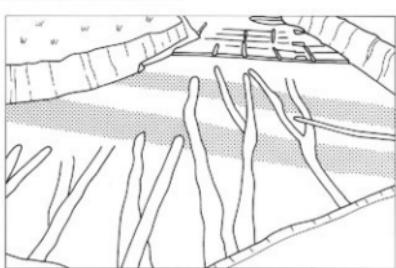


写真100
Vla 層上面小溝状造構群と
SD28 の土手の確認状況
(南から)



アミ点部分が SD28 の土手



アミ点部分が SD28 の土手



写真101
Vla 層上面小溝状造構群の完掘
状況と SD28 の土手の確認状況
(東から)



写真102
Vila 1層水田跡
畦畔の確認作業
(3区・南から)



写真103
Vila 1層水田跡確認状況
(3区・西から)



写真104
Vila 1層水田跡検出状況
(3区・西から)



写真105
Villa 1層水田跡確認状況
(5区、南から、手前は検出状況)



写真106
Villa 1層水田跡検出状況
(5区、南から)



写真107
Villa 1層水田跡検出状況と
SD28完掘状況
(5区、北から)

写真108
Vla 1層水田跡と
SD27の確認状況
(5区南部、北から)



写真109
Vla 1層水田跡の検出作業と
SD27の実掘状況
(5区南部、北から)



写真110
Vla 1層水田跡の検出作業と
SD27の実掘状況
(5区南部、北から)





写真111
Vila 1層水田跡検出状況と
SD27 実掘状況
(5区南部、北から)



写真112
Vila 1層水田跡確認状況
(4区、西から)



写真113
Vila 1層水田跡検出状況
(4区、西から)



写真114
SD28 土手の確認作業
(5区、北西から)



写真115
SD28 土手とVila 1層水田跡
確認状況
(北西から)



写真116
SD28 土手とVila 1層水田跡
確認状況
(北西から)



写真117
SD28 完掘状況
(北東から)



写真118
SD28 完掘状況
(西から)



写真119
SD28 断面
(西から)

写真120
SD27 確認状況
(北西から)



写真121
SD27 完擺状況
(北西から)



写真122
SD27 完擺状況と
Via 1 層水田跡検出状況
(北から)





写真123
SD27・30 断面
(西から)



写真124
SD27 北側土手の断面
(西から)

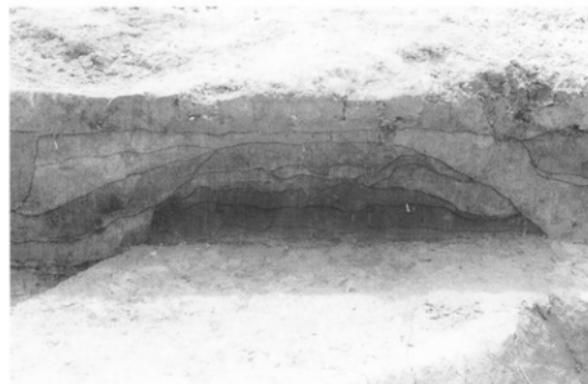


写真125
SD27 南側土手の断面
(東から)

写真126
SD26 とVila 1層水田跡
確認状況
(南から)



写真127
SD25 完掘状況
(東から)

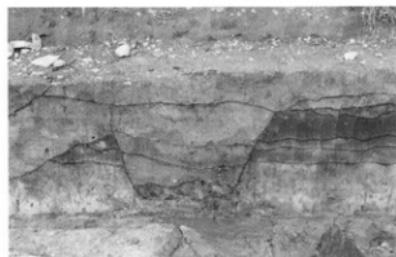


写真128 SD25 断面 (西から)

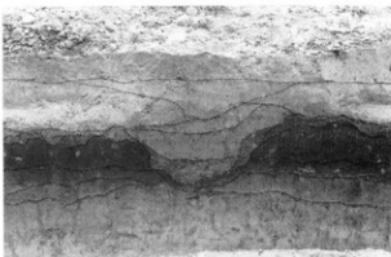


写真129 SD26 断面 (北から)



写真130
Vila 2層水田跡確認状況
(3区、西から)



写真131
Vila 2層水田跡検出作業
(3区、西から)



写真132
Vila 2層水田跡検出状況
(3区、西から)

写真133
SD28 土手とVla 2層水田跡
確認状況
(西から)



写真134
SD28 土手と
Vla 2層水田跡検出状況
(西から)



写真135
SD28 土手と
Vla 2層水田跡検出状況
(北西から)





写真136
VIIb 層水田跡確認作業
(3区、西から)



写真137
VIIb 層水田跡確認作業
(3区、西から)



写真138
VIIb 層水田跡確認状況
(3区、西から)



写真139 VIIb 層水田跡確認状況（3区、西から）



写真140 VIIb 層水田跡跡畔確認状況（3区、南から）



写真141 VIIb 層水田跡跡畔確認状況（3区、南から）

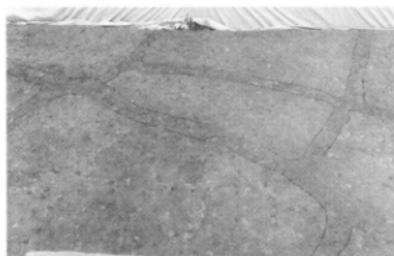


写真142 VIIb 層水田跡跡畔確認状況（南から）



写真143 VIIb 層水田跡跡畔確認状況（南から）



写真144 Vlb 層水田跡検出状況（3区、西から）



写真145 Vlb 層水田跡検出状況（5区、北西から）



写真146 Vlb層水田跡 확인状況（5区、西から）



写真147 Vlb層水田跡 확인状況（5区、西から）



写真148
Vlb層水田跡確認状況
(4区、東から)

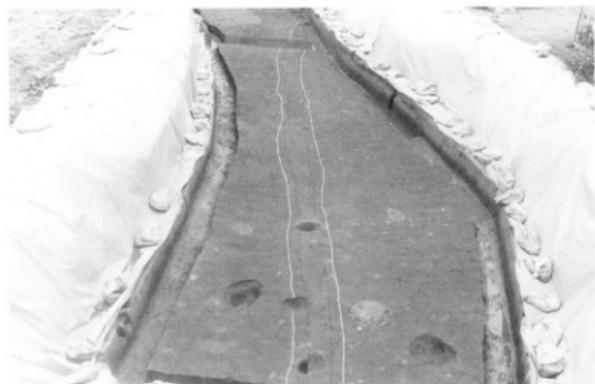


写真149
Vlb層水田跡検出状況
(4区、東から)



写真150
Vlb層水田跡検出状況
(5区、北西から)

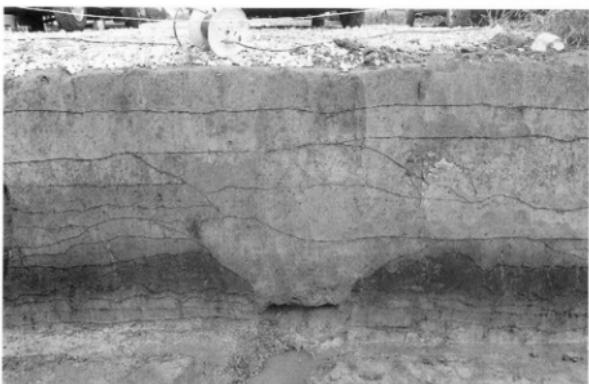


写真151
SD28断面
(西から)

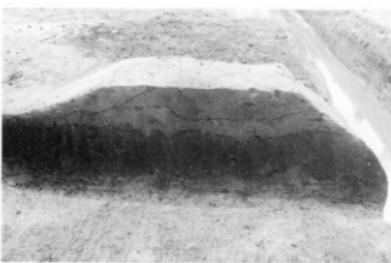


写真152 SD28 北側土手断面 (西から)



写真153 SD28 南側土手断面 (西から)



写真154 SD29 確認状況（4区、東から）

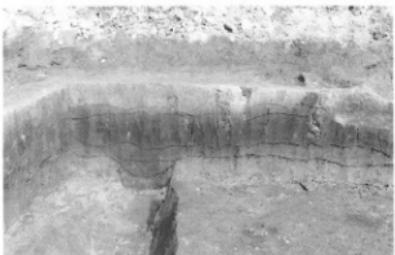


写真155 SD29 断面（西から）



写真156
SD29 完成状況
(西から)



写真157
Vlb + Vlc 層除去後の状況
(VII層上面、5区、北から)

IV～X層の遺物 1

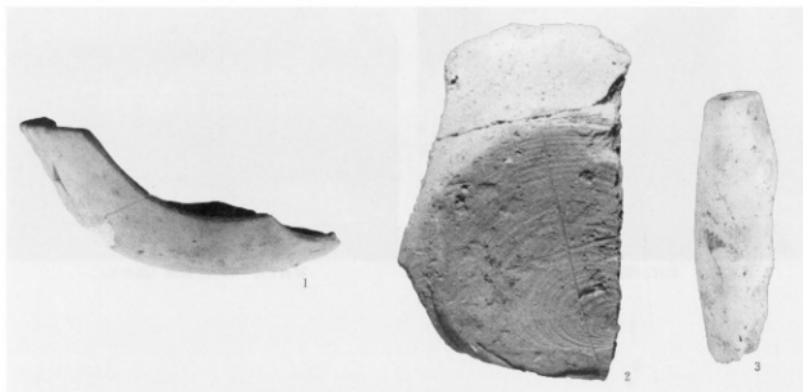


写真158 SI2 出土遺物



写真159 SD9・11・13・19 出土遺物

1. SD 9

3. SD13

2. SD11

4・5 SD19

N～X層の遺物 2

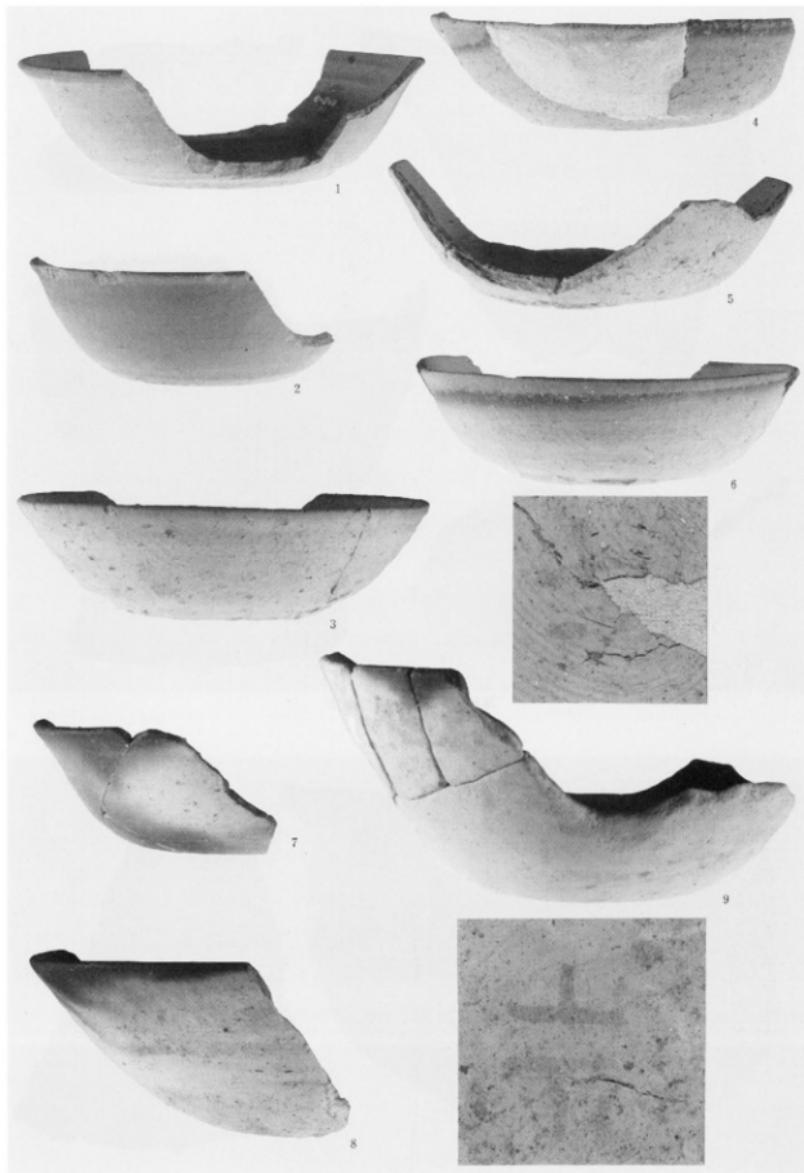


写真160 SK1 出土遺物(1)

IV～X層の遺物 3



写真161 SK1 出土遺物(2)



写真162 SK5・6 出土遺物

1.SK5

2.SK6

IV～X層の遺物 4



写真163 SK10 出土遺物

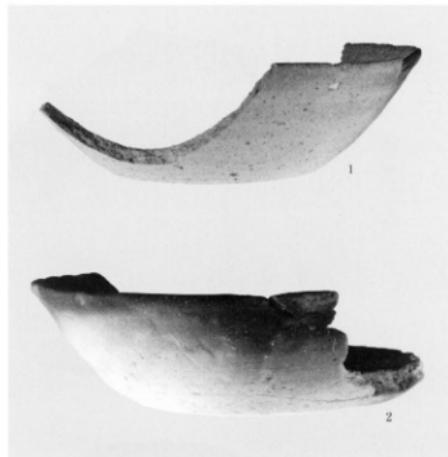


写真164 P5・P60 出土遺物

1. P5
2. P60

Vb・Vla・Vlb・X層の遺物

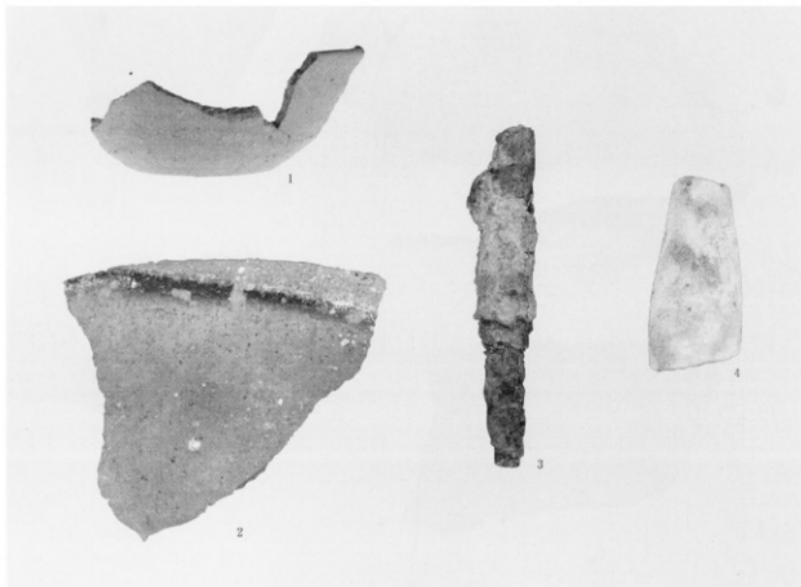


写真165 SB5 出土遺物

VI a～X層の遺物



写真166 SI1 出土遺物

I ~ X 層・その他の遺物



写真167 I ~ IV 層・その他の出土遺物

VII a 1 層の遺物

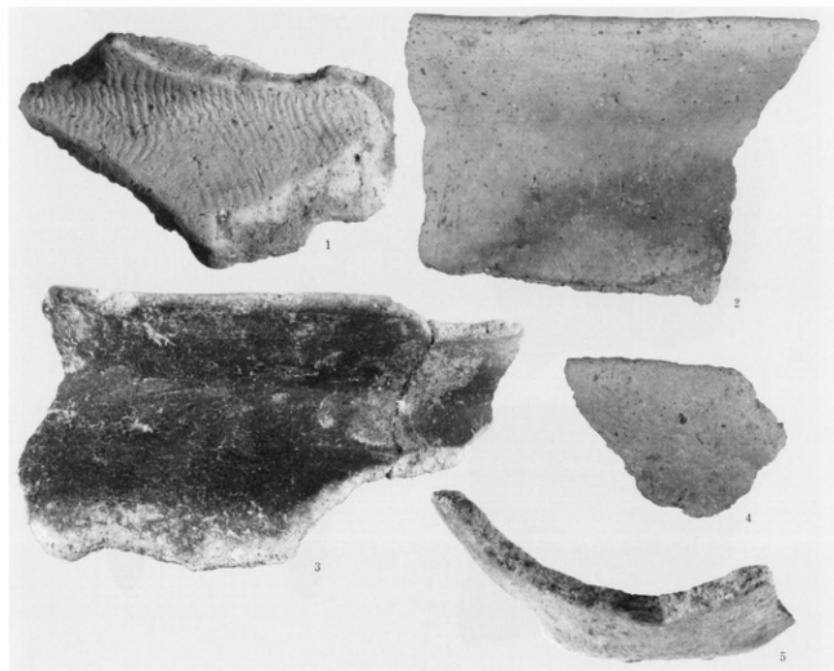


写真168 SD27 出土遺物

VII b 層の遺物

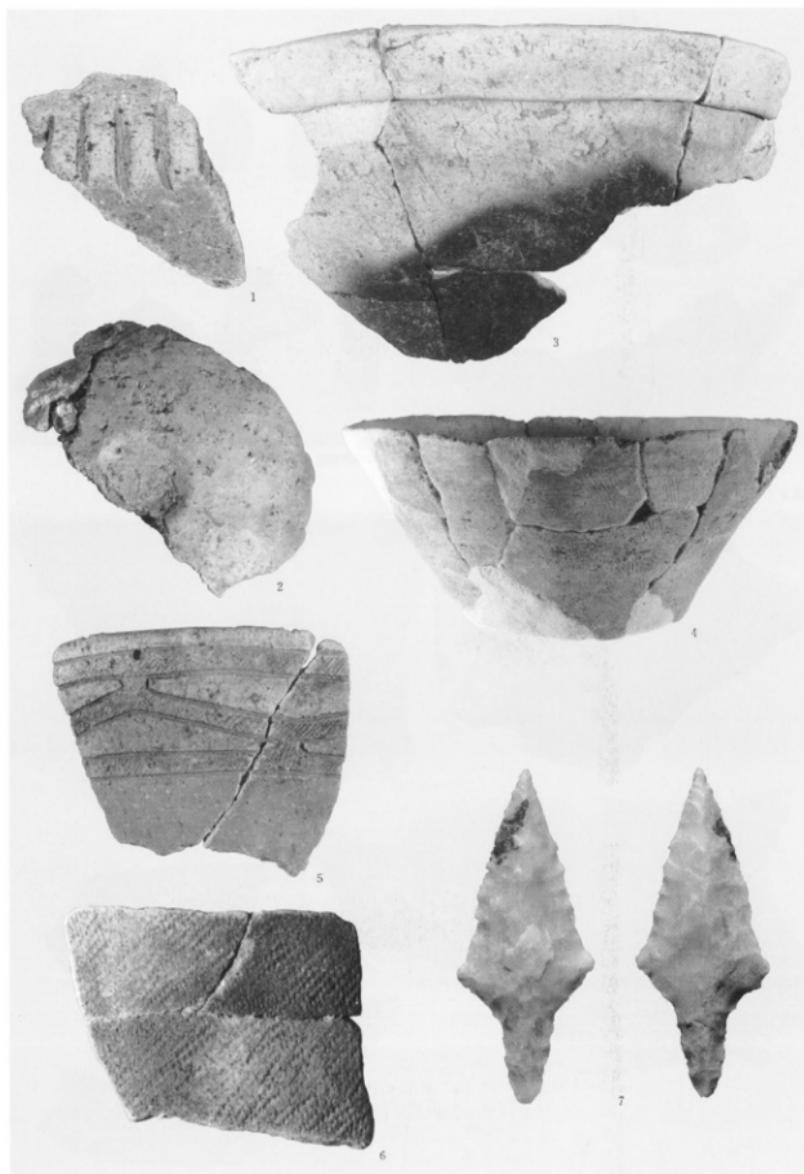


写真169 VIIb 層出土遺物

第2編 後河原遺跡第4次調査

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

平成9年、福仙興業株式会社によって、宅地造成の申請が出された。申請地は、後河原遺跡の範囲に隣接する地点に位置しており、遺構の続きが検出されることが予想された。そのため、協議を重ね平成10年3月に試掘調査を実施した。その結果、溝跡等の遺構が検出されたので本調査を行うこととなった。

第2節 調査要項

遺跡名：後河原遺跡（仙台市文化財登録番号C-208、宮城県遺跡登録番号01273）

調査名：後河原遺跡第4次調査

所在地：仙台市太白区中田字後河原27-1、27-2

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会 文化財課

担当職員 佐藤 洋 五十嵐康洋

調査期間：平成10年10月12日～11月18日

調査面積：約125m²

発掘調査参加者

青木 吉次	浅見 禮子	阿部すえ子	阿部美枝子	阿部みのる	井筒 孝子
-------	-------	-------	-------	-------	-------

井深みつ子	大沼みさほ	小田鶴祥子	斎藤 康子	佐藤とき子	菅井きみ子
-------	-------	-------	-------	-------	-------

須賀 栄子	鈴木 いし	竹森 光子	田中さと子	福山 幸子	山田千代子
-------	-------	-------	-------	-------	-------

整理作業参加者

相沢美佐子	佐藤 悅子	高橋 弘子	小泉 幸子	若生 洋子
-------	-------	-------	-------	-------

第3節 遺跡の概要

地理的環境・歴史的環境

これらについては、詳しくは3次調査の第1章第3節を参照していただきたい。ただ、4次調査地点は微高地の縁辺に位置しており、微高地から後背湿地もしくは旧河道へと傾斜していく変換点にあたっていたことが調査の結果わかった。このことは遺構の検出、基本層位の認定において大きな影響を与えている。

第4節 調査方法

平成10年10月12日より現耕作土（其本層Ⅰ層）を重機により排除し、宅地造成によって破壊される道路部分の計画に合わせて調査区を設定した（3次調査第3図）。今回の調査区は、後河原遺跡の範囲に隣接する地域であったが、試掘調査の結果遺構の分布が認められた地域である。また、今年度に調査を行った3次調査の北約50mの地点に位置している。調査区は東西約24m、南北約14m、幅約3mの「T」字状のものであり、調査の都合上調査区を「西区」、「中央区」、「東区」、「北区」と分けて調査を行った（第1図）。調査面積は、約125m²である（第1図）。Ⅱ層以下は人力による遺構検出に努めた。

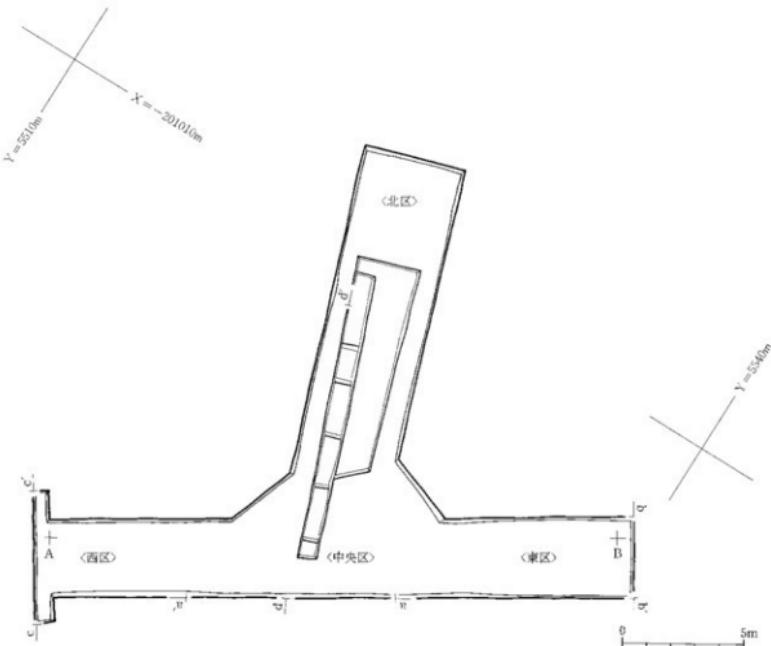
調査区内には測量用の基準杭（杭A・B）を任意に設定し、その後杭A・Bを国家座標（直角平面座標系X）に位置付けている（杭A：X=-201027.260m、Y=5519.305m 杭B：X=-201015.664m、Y=5539.175m）。検

出した遺構については、随時1/40で図面の作成を行い、モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルム等で写真撮影を行い記録に努めた。すべての野外調査を終えたのは、11月18日である。

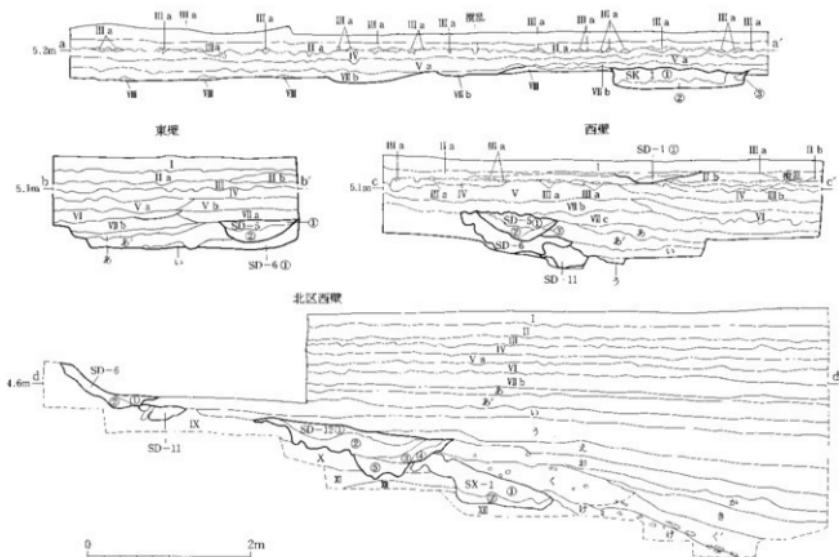
第5節 基本層序

基本層は調査区のほぼ全域にみられる層序で、大別13層、細別18層を数える（I～XIII）。しかし、「北区」および深堀トレンチでは基本層にはみられない大別9層、細別11層の層序があり、これらの層序を基本層とは区別し微高地から旧河道にかけての傾斜部分にのみ堆積した層序と判断した（あへけ）。深堀トレンチで、標高約3.8mの「く」・「け」層から灰白色火山灰を検出している（第2図）。

層名	色	調	土性	特徴
I 層	2.5 Y 3 / 3	暗オリーブ褐色	シルト質粘土	現代の水田耕作土
II a層	2.5 Y 3 / 2	黒褐色	シルト質粘土	II a層水田
II b層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	擬似畦畔にのみ分布
III a層	2.5 Y 4 / 3	オリーブ褐色	シルト	



第1図 調査区設定図



第2図 基本層序

III b 層	2.5 Y 4 / 1	黄灰色	シルト	
IV 層	2.5 Y 3 / 2	黒褐色	粘土	IV層水田
V a 層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	粘土	V a層水田
V b 層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	部分的な分布
VI 層	2.5 Y 3 / 2	黒褐色	粘土	主に調査区の南半部に分布、酸化鉄
VII a 層	2.5 Y 3 / 3	暗オリーブ褐色	シルト質粘土	
VII b 層	2.5 Y 3 / 2	黒褐色	シルト質粘土	
VII c 層	2.5 Y 3 / 1	黒褐色	粘土	
VIII 層	2.5 Y 5 / 3	黄褐色	シルト質粘土	
IX 層	2.5 Y 5 / 3	黄褐色	粘土	細砂を多量に含む
X 層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	砂	層の上面は粗砂
X I 層	10 Y 4 / 1	灰色	細砂	綿状に泥炭質粘土層を挟む
X II 層	5 G Y 4 / 1	暗オリーブ灰色	粗砂	
X III 層	2.5 Y 3 / 2	黒褐色	泥炭質粘土	
あ 層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	炭化物、酸化鉄を若干含む
あ'層	2.5 Y 4 / 2	暗灰黄色	粘土	あ層よりも砂質分が少ない
い 層	10 Y R 4 / 2	灰黄褐色	粘土	炭化物、木片を少量含む
う 層	5 G Y 4 / 1	暗オリーブ灰色	粘土	¢ 1 cm程のVII層ブロックを含む
え 層	5 Y 2 / 1	オリーブ黒色	粘土	

第2節 検出した遺構

お 層	7.5 Y 2 / 1	黒色	粘土	5GY4/1 粘土ブロックを多量に含む
か 層	2.5 Y 2 / 1	黒色	粘土	5Y3/1 粘土ブロックを少量含む
き 層	10Y R1.7 / 1	黒色	粘土	互層である。上部はかなり泥炭質である
	5 Y 3 / 1	オリーブ黒色	粘土	
く 層	7.5 GY 3 / 1	暗緑灰色	粘土	強グライ化、層中に火山灰を含む
く'層	2.5 Y 3 / 1	黒褐色	粘土	層下部に火山灰を帶状に含む
け 層	5 Y 4 / 1	灰色	泥炭質粘土	未分解の植物を多量に含む

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 調査の概要

検出した遺構は、調査区の制約もあり全容がはっきりとしないものが多い。遺構は、II a層、IV層、V a層で水田跡を検出した。また、VI層、VII層、VIII層で溝跡を検出した。前述したように傾斜の変換点に位置していることからVI層以下では北にむかひ基本層にはあてはまらない層位が多くなる。そこで、「北区」に層位確認用の深堀トレーンチを設定し地表から約3mまで掘り下げたが、湧水が激しくなったのでこれ以下の調査は断念した。

第2節 検出した遺構

(1) II層

II a層水田跡

II a層は、黒褐色のシルト質粘土層である。上層の水田耕作により削平され、層の遺存状況は良くない。畦畔も、既に削平されており、検出できたものは擬似畦畔B（斎野他1987）2条である。それと、擬似畦畔Bに挟まれる溝跡1条（SD 1）である。

擬似畦畔B

擬似畦畔B 2条は、いずれも東西方向で検出（N-60° - E）した（1・2）。1は、検出長約14mで、上端幅は1m、下端幅は1.2m～1.4mである。しかし、東部分の一部は表土排除、および試掘の際に削平しており検出できなかった。2は、1と平行しており検出長約7mで、他の規模等は1と同様である。

水口と思われる部分を、1の途中で2箇所検出している。上端幅は、それぞれ50cm、60cmで、深さは2cm程度である。堆積土は、上層のI層である。

水田区画に関しては、これら以外の擬似畦畔等が検出できなかつたので不明である。

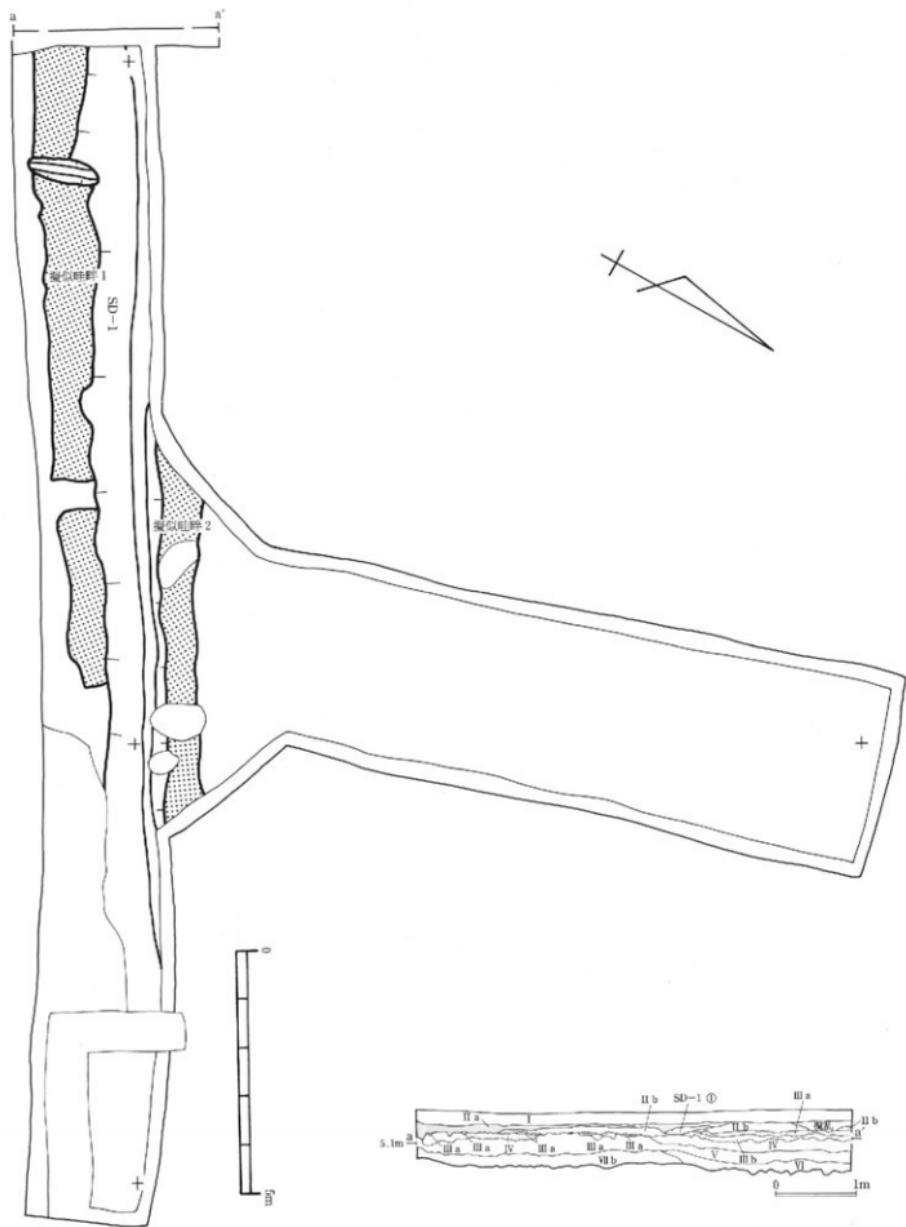
水田跡検出の遺物として、調査区の南壁付近で打ち込み杭（第10図14）を出土しているが、上層からの打ち込みの可能性も考えられる。また、作土中から瓦質土器（第10図7）を出土している。他には、写真図版で示したような陶磁器類が出土している。

SD 1

SD 1は、2条の擬似畦畔Bに挟まれる形に東西方向（N-60° - E）で検出した。これにより、SD 1はII a層水田に伴う水路と理解した。検出長は、約19mである。上端幅は1.2m～1.4m、下端幅は20～40cmである。深さは5～10cmで、断面形は「皿」形である。底面は起伏があり一定しないが、大きさは東へ緩やかに傾斜している。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

(2) IV層

IV層水田跡



第3図 II a 層水田跡平面・断面図

IV層は、黒褐色の粘土層である。調査区の全域に分布し、層厚は10cm前後である。下面の乱れは少ない。畦畔1条と段差1段を検出した。また、畦畔の両側で足跡を検出している。

畦畔

畦畔は、東西方向で検出（N-60°-E）した。検出長は約20mで、上端幅は20~40cm、下端幅は80cmである。畦畔の高さは、残りの良好な部分で15cm程で、調査区の西に向かうに従い遺存状況は悪くなり5cm以下になるとこころもみられる。遺物は出土していない。

足跡は畦畔の両側で連続して検出し、特に畦畔の北側は残りが良く、13mに渡って「ハ」字状に連続している。
2・3個掘ってみたが、足指の痕跡は確認できなかった。

段差

段差は、調査区の北区で検出（N-75°-E）したが、畦畔の方向とは若干のずれがみられる。遺存状況は余りよくなく比高差は2~3cm程である。本来はこの部分に畦畔があったものと考えられるが、削平されたものと思われる。

水田区画に関しては、南北方向の畦畔や段差も検出できなかったので詳細は不明である。ただ、畦畔の南北では比高差が大きく、これを境に北側に傾斜している。このために、水田区画内の比高差が大きくなると、段差を設けることにより修正をはかっていたものと考えられる。このことは、これ以前の水田跡でも同様の傾向がみられる。

（3）V a層

V a層 水田跡

V a層は暗灰黄色の粘土層である。調査区の全域に分布し、層厚は20cm前後である。比較的下面は乱れている。畦畔1条と段差2段を検出した。畦畔の北側部分で、掘りすぎによりV b層が露出してしまった部分（第5図スクリーントーン部分）があるが、基本的には北に向かうに従い10cm程の比高差をもって傾斜していることがわかる。この傾斜の変換点に段差が取りついている。

畦畔

畦畔は、東西方向で検出（N-75°-E）した。検出長は約20mで、上端幅は70cm~1.4m、下端幅は1.2~2mである。畦畔の高さは、あまり遺存状況が良くなく2~4cmである。また、畦畔にはこれに取りつき南北方向に延びると思われる畦畔の一部が2条確認できたが、いずれも20cm以上の延びは検出できなかった。

段差

段差1は、東西方向で検出（N-60°-E）し、検出長は約3.4mでやや湾曲している。比高差は2cmである。段差2も、東西方向で検出（N-62°-E）し、検出長は約3.2mで直線的である。

水田区画に関しては、畦畔と段差の間隔が一定でなかったり、南北方向の畦畔もはっきりとしないので不明である。

遺物は、弥生土器、動物の歯（馬？）、焼骨（人骨の可能性）等が出土しているが、図示できるものはない。

（4）VII a層

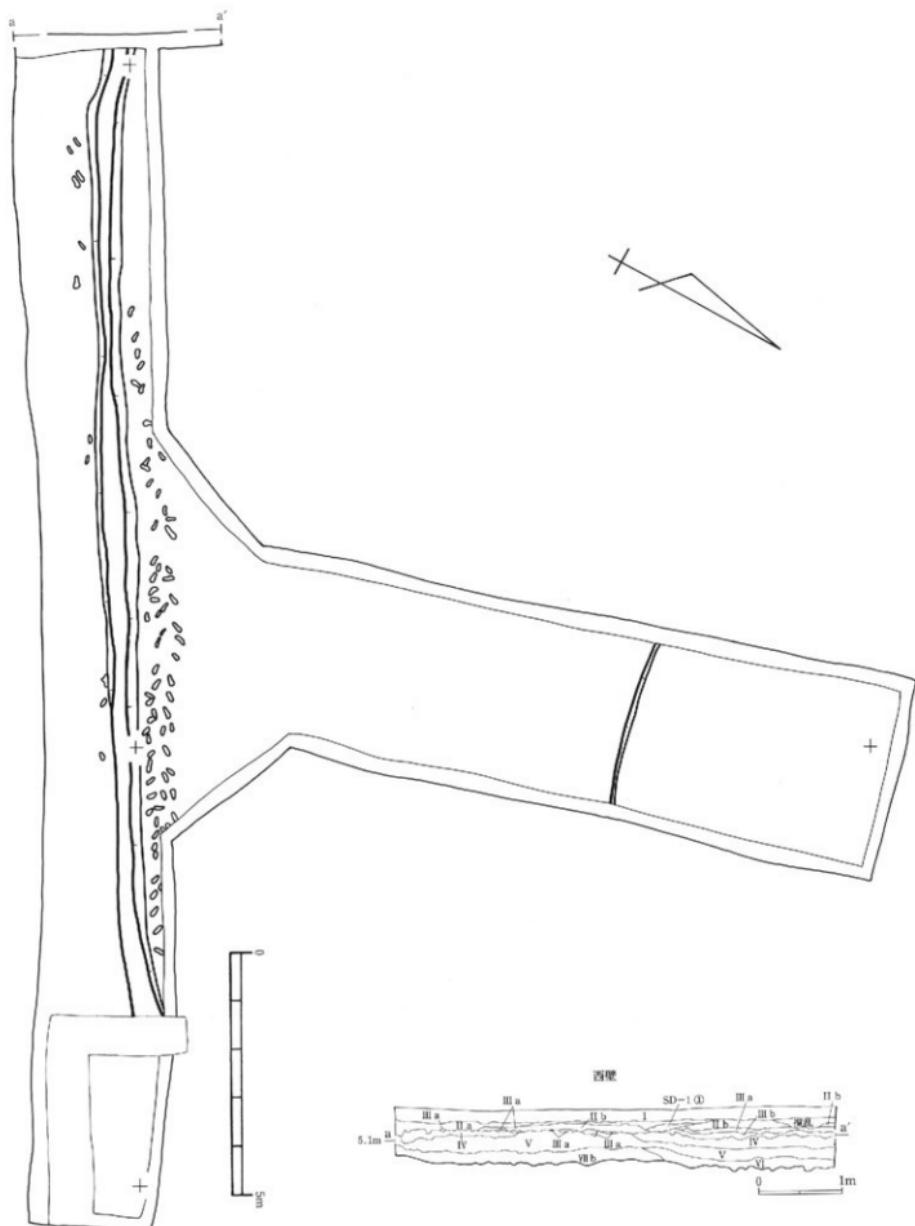
VII a層は暗オリーブ色のシルト質粘土層である。調査区の南半部に分布し、層厚は10cmである。溝跡1条と段差1段を検出した。

段差

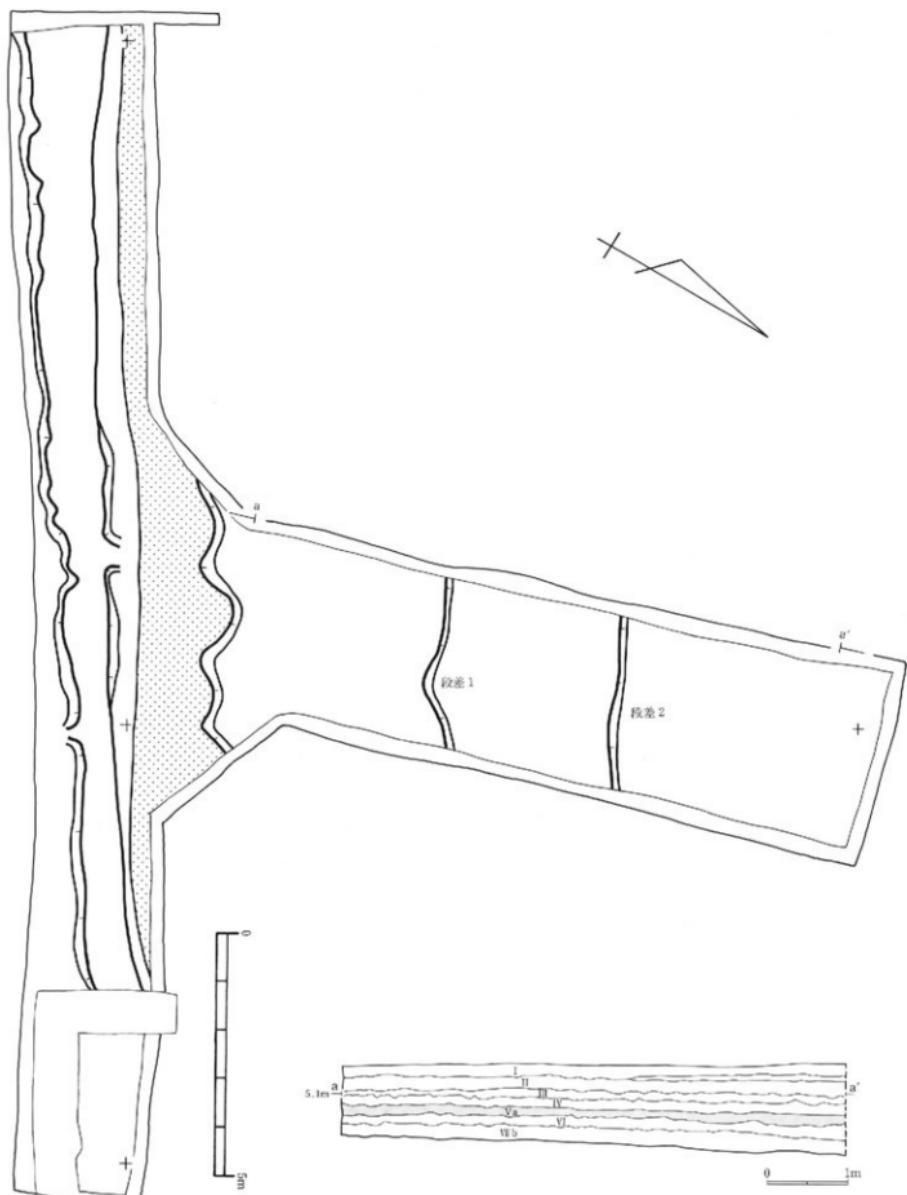
段差は、調査区の南縁から1.8m離れたところで検出した。比高差は30cmで、1.2~1.4mぐらいの平場を持ち、そこから先は北に向かいざらに下がっている（この平場上でS D 2を検出した）。

S D 2

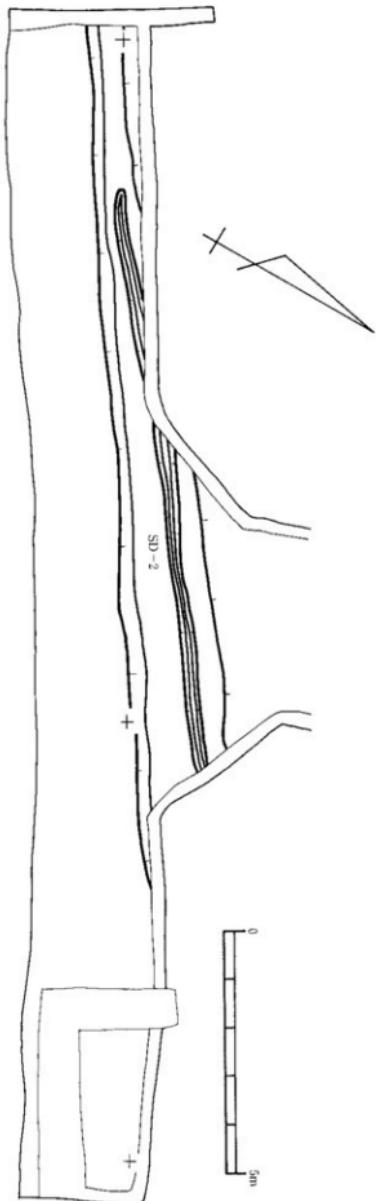
東西方向で検出（N-80°-E）し、検出長は12mで、調査区の西端までは延びていない。上端幅は20~40cm、



第4図 IV層水田跡平面・断面図



第5図 V-a 層水田平面・断面図



第6図 VII a 層上面

下端幅は10cmである。深さは2cmで、断面形は「皿」形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、基本層のVI層が堆積している。遺物は出土していない。

(5) あ層

VII b層は、黒褐色のシルト質粘土層である。この層位あたりから平面的に精査をしていくと、調査区の北部には旧地形にのみ堆積している層序が現れてくる。遺構を検出したのは、「あ」層上面である「あ」層は暗灰黄色のシルト質粘土である。溝跡3条(S D 3～5)と土坑1基(S K 1)を検出した。これらの遺構の重複関係は、S D 4がS D 5を切っている。また、S K 1をS D 3が切っている。S D 3とS D 4との間には重複ではなく、同時に存在していたものと考えられる。S D 5とS K 1とをみた場合、両者にも直接的な重複ではなく新旧関係はつかめない。しかし、平面的にみるとS D 5がこの面では一番古いものであろう。

S D 3

東西方向で検出(N-80°-E)し、検出長は4m程度である。上端幅は60cmで、下端幅は10cmである。深さは5cmで、断面形は開いた「U」字形である。底面は北に向かって低くなっている。堆積土は1層で基本層のVII b層が堆積している。遺物は出土していない。

S D 4

東西方向で検出し、S D 3に平行している。検出長は9.4mである。上端幅は60～70cm、下端幅は10cmである。深さは5cmで、断面形はS D 3と同様に開いた「U」字形である。底面の様子、堆積土共にS D 3と同様である。遺物は少なく、図示したものは木製品(第10図12)である。

S D 5

東西方向で検出(N-46°-E)し、検出長は16mで直線的である。上端幅は1.6～1.9m、下端幅は20cmである。深さは40cmで、断面形は北に緩く傾斜の変換点を持つが、開いた「皿」形である。底面はやや凹凸があるが、全体的には東に傾斜している。堆積土は3層で、自然堆積である。遺物は弥生土器、土師器、石製品(砾石)、焼骨(人間の頭蓋骨?)、歯(人間)等が出土している。このうち図示したものは、土師器(第10図4)・石製品(第10図11)である。



SK 1

平面形は、さらに調査区外へ延びているので全容ははつきりしないが、ほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。長軸長は3.5m、短軸長は1.6mである。深さは30cmで、壁は角度を持って立ち上がる。堆積土は2層で、VII層がブロック状に入り人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

(6) VII層・「い」層

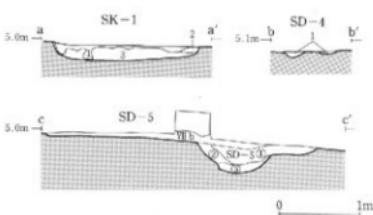
VII層は黄褐色のシルト質粘土層である。「い」層は灰黄褐色の粘土層である。VII層・「い」層上面で溝跡5条(S D 6~10)と土坑1基(SK 2)を検出した。これらの遺構の重複関係は、SD 6とSD 7~10とは同時期に存在していたと考えられる。次に、SD 6はSK 2を切っている。また、SD 8とSK 2は接しているが、直接的な重複はみられない。しかし、他の遺構との関係から考えると、SD 8が新しいものと思われる。

SD 6

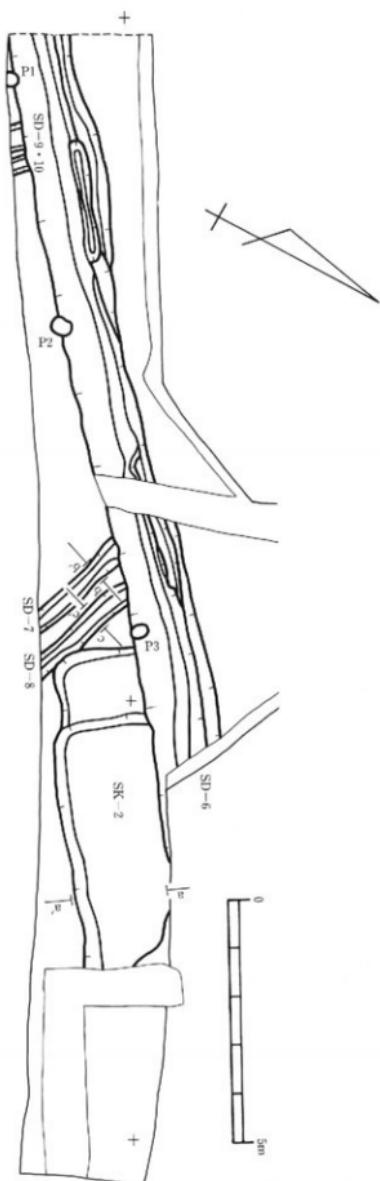
東西方向で検出(N-48°-E)し、検出長は15mである。上端幅は1.2~1.3m、下端幅は10cmである。深さは50cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は、馬の歯、須恵器等が出土している。図示したのは須恵器(第10図1)である。南辺に3基のピット(以下Pと略す)を検出した。P 1・2間の間隔は5mで、P 2・3間は6.4mとやや広い。平面形はいずれも30~40cmの円形で、深さがP 1:40cm、P 2:20cm、P 3:50cmである。

SD 7

北西方向で検出(N-45°-W)し、検出長は2.8mである。上端幅は50cm、下端幅は10~20cmである。深さは



第7図 SD-3・4・5 SK-1 平面・断面図



第8図 SD-6・7・8・9・10 SK-2 平面・断面図

3cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のVII層である。遺物は出土していない。

SD 8

北西方向で検出（N-45°-W）し、検出長は3mである。上端幅は50cm、下端幅は15~20cmである。深さは3cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のVII層が堆積している。遺物は出土していない。

SD 9

北西方向で検出（N-14°-W）し、検出長は30cmである。上端幅は56cm、下端幅4cmである。深さは3cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のVII層である。遺物は出土していない。

SD 10

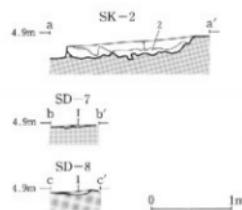
北西方向で検出（N-16°-W）し、検出長は40cmである。上端幅は34cm、下端幅15cmである。深さは3cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のVII層である。遺物は出土していない。

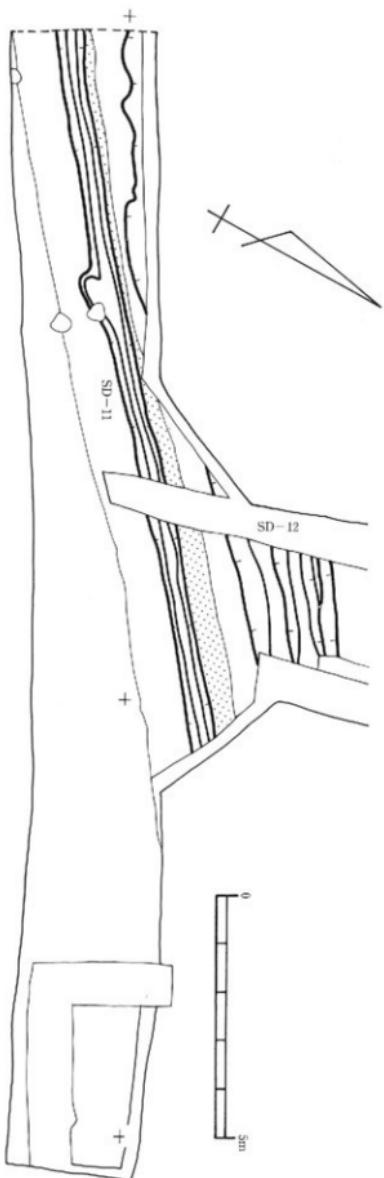
SK 2

調査区の東部分で検出したが、SD 6に切られており全体の形ははっきりとしない。また、試掘トレンチによってすでに失われた部分もある。検出できた部分での大きさは、長軸長約6m、短軸長約3mで隅丸長方形の平面形を呈し、西側に段を持っています。堆積土は2層で基本層VII層が上部に堆積している。遺物は弥生土器、土師器等が出土しているが、図示できるものはない。

(7) VII層・「お」層

VII層と「お」層上面で溝跡2条（SD 11・12）と性格不明遺構1基（SX 1）を検出した。これらの遺構の重複関係は、SD 12がSX 1を切っている。





第9図 SD-11・12平面図

S D11

東西方向で検出(N-50°-E)し、検出長は15.8mである。上端幅は40~50cmで、下端幅は10~20cmである。深さは12cmで、断面形は「U」字形である。底面は、凸凹しており傾斜は一定ではない。堆積土は1層で、基本層のⅧ層をブロック状に含んでいる。遺物は、土師器、須恵器等が出土している。図示したのは、須恵器壊?体部(第10図9)である。

S D12

深堀トレンチで確認しているので規模等の詳細は断定できないものが多い。調査区の西で、北側に下がる傾斜を検出しており、これがSD12の延長である可能性も考えられる。ここまで延びた場合検出長は、約13mになる。トレント部分での確認状況は、方向はN-50°-Eで、検出長は2.4m、上端幅は1.8m、下端幅は80~90cmになる。深さは70~90cmで、断面形は南側に段を持ち起伏のみられる「U」字形である。底面は、湧水が多くはっきりしないがほぼ平坦であると考えられる。堆積土は5層で、樹木片や基本層Ⅷ層のブロックを含んでいる。遺物は土師器、須恵器、種子等が出土している。図示したのは、須恵器壊(第10図6)である。

S X1

S X1は、深堀トレントの断面で確認した構造で平面的には確認できなかった。遺物等も出土せず詳細は不明である。

第3節 出土遺物

遺構から出土した遺物は第10図に示したとおりである。この他に、遺構に伴わざ基本層中から弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、古鏡等が出土している。しかし、遺構出土の遺物同様に細片が多く図示できるものは少ない。そのうち、主な陶磁器については、写真図版に掲載してある。

第4章 まとめ

(1) 今次調査区は、微高地の縁辺から後背湿地もしくは谷地形に傾斜していく地形の変換点に位置していることがわかった。

(2) 検出した造構は、II a層、IV層、V a層で畦畔（擬似畦畔Bを含む）と段差、溝跡である。VII a層で土坑1基と溝跡1条、「あ」層で土坑1基と溝跡3条を検出した。VIII層・「い」層で土坑1基と溝跡5条、VII層・「お」層で溝跡2条と性格不明造構1基を検出した。

(3) II a層から出土した遺物は、陶磁器、瓦質土器、自然遺物（種子）等である。このうち、年代のわかる陶磁器をみると、14世紀から18世紀にかけてのものがみられる。II a層水田跡は近世（17世紀後半以降）に位置付けられる。

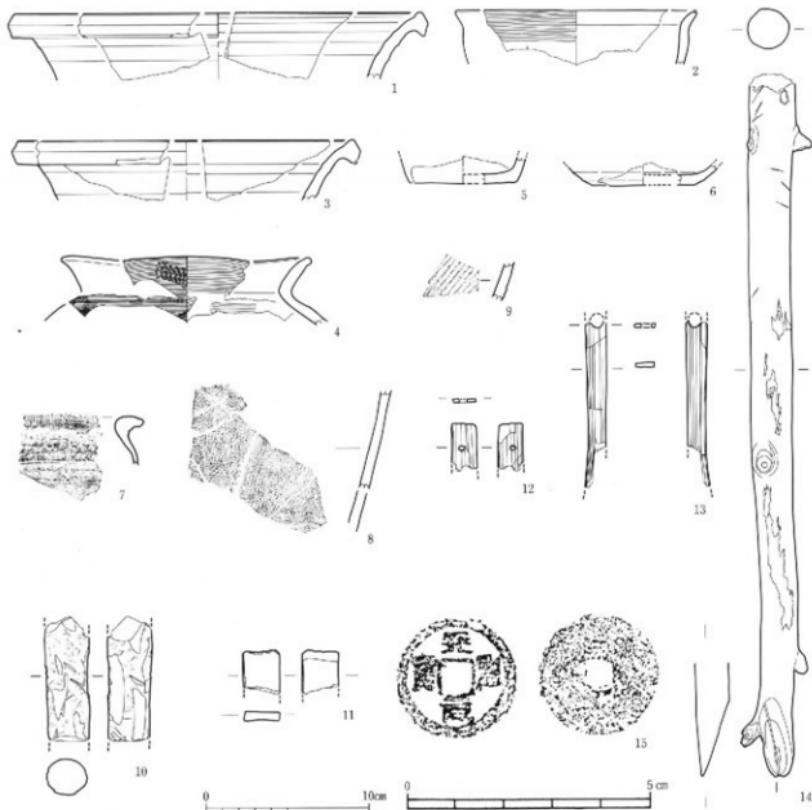
(4) IV層から出土した遺物は、磁器、自然遺物（種子）等である。このうち、年代のわかるものは肥前産の白磁のみである（17世紀から18世紀）。これ1点のみで年代を決定することは難しいが、IV層水田跡も近世（17世紀以降）と位置付けることが妥当であろう。

(5) V a層から出土した遺物は、弥生土器、陶器、自然遺物（動物骨、種子）等である。このうち、年代のわかるものは、在地産と考えられる陶器である（13世紀～14世紀頃）。V a層水田跡は中世（VI層中から初鉢年1023年の「天聖元宝」が出土しているので、すくなくともこれよりは新しい）と位置付けられる。

(6) VII a層で検出した溝跡は、遺物が出土していないことから年代は判断できないが、層位の関係からみて古代から中世（どちらかと言えば中世に近いか）にかけての時期といえよう。

(7) 「あ」層とVIII層・「い」層で検出した溝跡は方向・規模ともに似ている点が多いので時期的には近接した時期のものであろう。これらの溝跡の機能を考えた場合東西方向に比較的幅の広い溝を作り、これに接続する形で平行する2本1単位の溝を取り付けている。主水路とそこから水を給排水するために設けた水路の可能性が考えられよう。これらの溝跡の時期であるが、やはり年代を決定するような遺物の出土はみられず、上下の層位との関係から見て古代から中世にかけての間におかざるものと考えられる。

(8) VIII層・「お」層で検出した溝跡は、出土遺物や灰白色火山灰（仙台平野において、10世紀初頭に降下したものと同様のものと考えられる）を含む層を切っていることから平安時代頃（火山灰降下以降）に属するものと考えられる。また、性格不明造構は、大きくは平安時代に属するが、これらの溝跡や灰白色火山灰を含む層の下位に位置することからこれらよりは古いものと考えられる。



図版番号	遺構・所位	種別	内面	外面	法規	備考	写真図版		
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第16回-1	S D 6	束腰器	ロクロ	ロクロ	(25)	—	—	17-1	
第16回-2	繩層	弥生土器?	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.8)	—	—	17-6	
第16回-3	瓦層	板瓦	ロクロ	ロクロ	(20.6)	—	—	17-3	
第16回-4	S D 5	土師器	ヨコナデ、ヘラナデ	ハケメ、ヨコナデ	(15.4)	—	—	17-7	
第16回-5	VIIa層	赤生土器	—	—	(6.2)	—	—		
第16回-6	S D 12	瓦器器	ロクロ	ロクロ	—	(6.2)	—		
第16回-7	H a層	瓦質土器	ロクロ	ロクロ	—	—	—	17-2	
第16回-8	VIIb層	弥生土器	—	平行LR	—	—	—	17-5	
第16回-9	S D 11	漆器器	当て具置	平行タクホ	—	—	—	17-11	
図版番号	遺構・所位	種別	特徴	石材・材質	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径(cm)	写真図版
第10回-10	VIIa層	石製品	柱状石斧の破片?	流紋岩	73.6	(7.6)	—	径:(2.7)	17-8
第10回-11	S D 5	石製品	砾石(荒鉈)	安山岩	3.8	(2.7)	2.2	0.6	17-15
第10回-12	S D 4	木製品	—	—	(2.95)	1.6	0.2	—	17-9
第16回-13	瓦層	木製品	上下欠損、孔内面焼け?	—	(10.2)	1.3	0.3	—	17-10
第16回-14	H a層	木製品	弁端を斜めに加工	—	43.2	—	—	径:2.5	17-14
第16回-15	VIIa層	金属製品	北宋錢「大聖二年」元祐丙午1023年	銅	2.7	—	—	径:2.6	17-16

第10図 出土遺物



写真1 II a 属水田検出状況（西より）



写真2 II a 水田確認状況（西より）



写真3 IV 属水田検出状況（西より）



写真4 IV 属水田確認状況（西より）



写真5 IV 属水田足跡（南より）



写真6 V a 属水田確認状況（西より）



写真7 SD3・4・5 SK-1 完掘全景（西より）



写真8 SK-1 セクション（北より）



写真9 SD-6～10 完掘全景（西より）



写真10 SD-12 完掘全景（西より）



写真11 調査区南壁断面



写真12 調査区南壁断面



写真13 調査区東壁断面



写真14 深掘トレンチ西壁断面

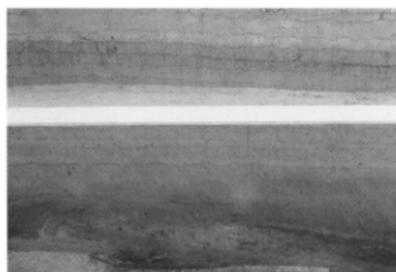
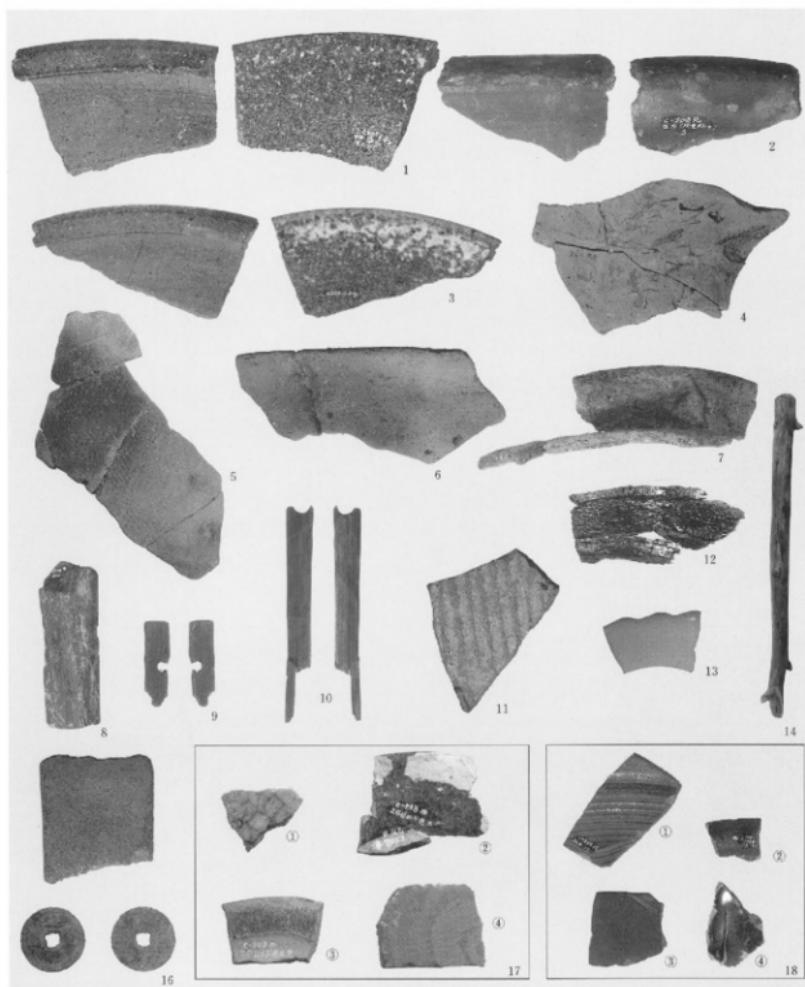


写真15 深掘トレンチ西壁断面



写真16 調査区西壁断面（最深部）



写真図版	調査・所位	種別	產地	年代	備考
17-12	Ⅵ 層	漆器・板			外面に漆絵あり
17-13	Ⅶ 層	磁器・皿	肥前	17C~18C	白龍?輪花Ⅲ
17-17-(1)	II a 層	陶器・皿	志野云窓	16C末~17C初(大空V型)	
-②	II a 層	陶器・皿	古瀬戸	15C?	鉄ぬ、見込は無船
-③	II a 層	陶器・皿	古瀬戸	14C?	緑釉
-④	II b 層	漆器・皿	薩摩松原	13C~14C	青磁、舟形文
17-18-(1)	II a 層	陶器・杯	唐津	17C後半	
-②	II a 層	陶器・皿	唐津?	16C~17C	鉄ぬ、折縁
-③	II a 層	瓦質土器・鉢?			
-④	II a 層	陶器・鉢?	大村昭馬?	18C~	灰釉

写真17 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うしろがわらいせき					
書名	後河原遺跡					
副書名	第3次・4次発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第236集					
編著者名	平間亮輔、五十嵐康洋					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894					
発行年月日	1999年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村				
うしろがわらいせき 後河原遺跡 第3次 第4次	宮城県仙台市 太白区中田町 字後河原	04100	01273	38°11'20" 140°53'48"	19980413~19980806 19981012~19981118	宅地造成 宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
後河原遺跡 第3次 第4次	生産跡 集落跡	弥生・古墳 奈良・平安	水田跡・畠跡 堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡・土坑	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代前～中期の水田跡と水路 古代の集落と畠跡 堀り方規模が大きな掘立柱建物跡群	

仙台市文化財調査報告書第236集

後河原遺跡

—第3次・4次発掘調査報告書—

1999年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893~4

印刷 株式会社東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

